

石川県立歴史博物館

紀 要

28

2019

4



Ishikawa Prefectural Museum of History

〔論 文〕	加賀前田家による京都北野社への太刀奉納	
 塩 崎 久 代	1
	加賀藩領内の廻船問屋と「北前船」北ルートの研究	
 濱 岡 伸 也	35
	初代石川県令内田政風	
	— その事績の検討 —	
 石 田 健	51
	美人ツーリズムの成立（上）	
	— 「加賀美人」の系譜 —	
 大 門 哲	77

加賀前田家による京都北野社への太刀奉納

塩崎 久代

はじめに

加賀前田家は菅原道真（天神）を祖と仰ぎ、五代綱紀以降、天神御忌五十年おきに京都北野社に太刀や金・白銀などを奉納した⁽¹⁾。また、加賀小松の梅林院や金沢の玉泉寺天満宮で連歌会が催されるなど、加賀藩領内でも天神御忌にかかる諸行事が盛大に執り行われた⁽²⁾。

北野天満宮に伝わる前田家からの奉納品の中でも、奉納太刀は同宮を代表する宝物として大切に保管されている。江戸時代、前田家が北野社に奉納した太刀は、いずれも鎌倉・室町時代に製作された古刀で、拵は奉納に際して前田家が新調したものである。八五〇年御忌以降に奉納された太刀は、藩から発注を受けた加賀の職人たちによって分業体制で製作された。また、奉納太刀を収納する漆塗の箱には奉納

した藩主や奉納年月日が高時絵で記されている。しだいに藩財政が悪化していく中、江戸時代を通じて前田家が多額の資金を投じて北野社に太刀を奉納したことは、同家が天神御忌を重んじていたことを示している。

本稿の課題は、このように前田家が重要視していた天神御忌にあたって、前田家の太刀がどのようにして北野社に奉納されたのか、奉納に関わった藩士や製作を担当した職人の動向にも注目しながら、その過程を具体的に明らかにすることである。その際、太刀奉納に関する前田家側の史料や北野社側の史料に加え、「水野源六家文書」（以下、「水野家文書」）を用いる。「水野家文書」は、加賀藩の白銀師の水野源六家⁽³⁾に伝わった古文書で、黒川威人氏を中心に調査がなされ、その成果として目録も作成されている⁽⁴⁾。北野社への太刀奉納に関する

古文書の翻刻も一部掲載され、水野家歴代の事跡を紹介する中で北野社への奉納太刀の製作について言及されているが、加賀前田家の歴史の中で、さらには加賀の工芸史においてどのような意味を持つのか、より詳細に分析し再評価する必要がある。

右に掲げた課題に取り組むにあたって、留意しておきたい点として①近世における北野社内部の状況、②前田家の京都屋敷の機能や同家と朝廷・公家との関係、という二つの問題がある。第一の点については、石津裕之氏による僧位僧官の叙任経路や北野社内の支配・身分についての研究があり、近世北野社の複雑な社内組織の実態が明らかにされつつある^⑩。本稿は北野社の組織や経営について論じること主眼を置くものではないが、天神御忌における前田家の太刀奉納に北野社のどのような人々が関わっていたのか、北野社側の体制にも目を向ける必要がある。第二の点については、加賀前田家の京都における儀礼・交際について論じた千葉拓真氏の仕事がある^⑪。千葉氏は、京都に詰める藩士たちの動向や京都屋敷の機能について検討し、前田家が公家や寺社に助成金（米）を出していたことや縁組により公家との関係を深めていったことを明らかにされた。天神御忌に際しての前田家の太刀奉納は、前田家の先祖祭祀という特別な意味を持っているので、千葉氏が検討した寺社への助力金（米）の問題とは区別して論じるべきであるが、太刀奉納がどのような人々との関わりの中で成立していたのか、前田家の京都における社会的関係をふまえながら分析する視点は有効であると考ええる。

今回、北野天満宮に伝わる前田家奉納太刀を調査する機会に恵まれたので、現存する史料から奉納太刀の製作に携わった人々の動きを追いながら、奉納に至るまでの過程を明らかにするとともに、前田家による北野社への太刀奉納の歴史的意義について考察する。

1、北野天満宮所蔵の前田家奉納太刀の概要

北野社への太刀奉納の過程について考察を進める前に、前田家奉納太刀の概要を提示しておきたい。

北野天満宮に伝わる前田家の奉納太刀五振は「表1」の通りである。このうち、恒次「写真1」・師光・助守の三振は重要文化財に指定されている。「表2」は「水野家文書」に確認できる北野社への奉納太刀関係の史料を示したものであるが、後述するように、八〇〇年御忌の奉納太刀の装飾は家元の後藤家によるもので、加賀の職人たちが奉納太刀の製作に関わったことを示す史料は確認できなかった。また、昭和二年（一九二七）に十六代利為が奉納した貞勝の太刀は江戸時代の奉納太刀とは形状も異なり、古市某が製作に関わっている^⑫。したがって、水野家が関与した記録が残るのは、八代重熙が奉納した師光と十一代治脩が奉納した清則、十三代斉泰が奉納した助守の三振ということになる。

[表1] 加賀前田家が北野社に奉納した太刀および奉納箱

①太刀について

	奉納年代	奉納者	代拝人	製作年代	銘	太刀全長 (cm)	刃長 (cm)	極書	反り (cm)	目釘孔	拵長 (cm)
恒次	元禄15年 (1702) 2月25日	前田綱紀 (5代)	前田知頼	鎌倉時代 (13世紀)	恒次	92.2	74.3	2尺4寸5分半 ／代金子10枚	2.4	2	107.1
師光	宝暦2年 (1752) 2月25日	前田重熙 (8代)	前田橘三	応永9年 (1402)	備前長船師光／応永九年	86.4	68.3	極書なし	1.4	2	101.9
清則	享和2年 (1802) 2月25日	前田治脩 (11代)	前田孝連	文明18年 (1486)	清則作／文明十八年八月 日	94.3	72.5	2尺4寸／代金 子10枚	2.3	2	102.8
助守	嘉永5年 (1852) 2月25日	前田斉泰 (13代)	前田孝情	鎌倉時代 (13世紀)	助守	92.2	70.4	2尺3寸3分／ 代金子15枚	2.0	2	103.8
貞勝	昭和2年 (1927) 2月	前田利為 (16代)	—	昭和2年 (1927)	奉納北野天満宮宝前／昭和二 年二月侯爵前田利為／大阪住 人月山貞勝謹作 (花押)	86.1	71.3	極書なし	—	1	101

②奉納箱について

	内箱 (cm)	中箱 (cm)	外箱 (cm)
恒次	縦115.8×横18.3×高15.2	縦123.5×横26.5×高26.5	縦128.8×横33.4×高33.7
師光	縦110.8×横19.4×高16.9	縦117.4×横28.6×高26.1	縦124.6×横37.8×高53.7
清則	縦111.5×横19.4×高17.0	縦120.9×横31.1×高30.7	縦127.0×横41.0×高41.2
助守	縦112.6×横22.0×高25.5	縦123.4×横36.5×高36.2	縦131.4×横47.4×高45.5
貞勝	縦120.5cm×横32.4cm×高25.2cm		

〔表2〕「水野家文書」にみえる北野社奉納太刀関係史料

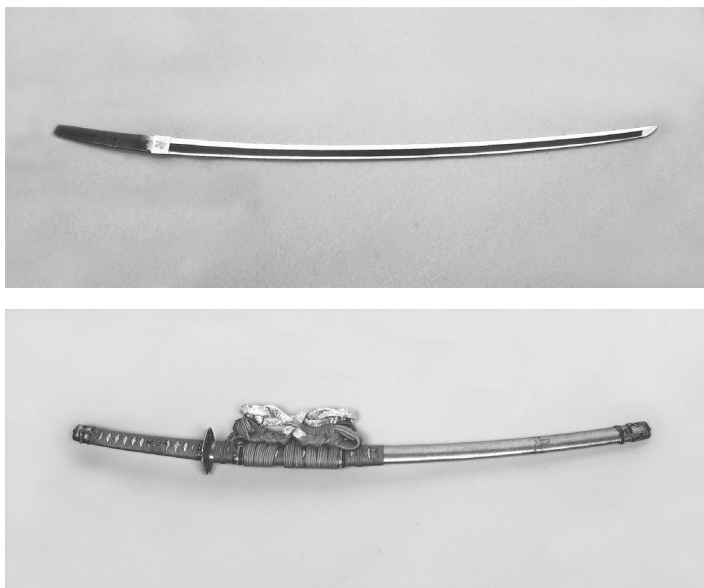
No.	文書名	頁数	年代	差出	宛所
1	北野天満宮御献納御太刀之絵図	1点	享和元年（1801）西2月28日	勘師 高良又之丞ほか4名	表御納戸方
2	真御太刀御金具図り書（写）	1冊	（享和元年）	—	—
3	真御太刀御金具金目勘定書（写）	1冊	（享和元年）西11月	白銀屋後藤清次郎ほか2名	表御納戸方
4	享和二年北野へ御奉納太刀拵図	1点	江戸時代（19世紀）	—	—
5	北野天満宮御献納御太刀相勤候人々書上（宝暦・享和）	1点	江戸時代（19世紀）	—	—
6	北野天満宮御献納御太刀拵方に付請書	1点	（嘉永3年）戌6月	水野源次ほか19名	表御納戸方役所
7	（北野御献納）御太刀被仰付候二付罷出候様廻状	1点	（嘉永3年）6月14日	中村長三郎・吉野半次	勘師 高尾太右衛門ほか16名
8	御献納御太刀金具手間料中勘願書	1点	（嘉永3年）戌8月	水野源次（印）ほか4名	表御納戸
9	御献納御太刀金具手間料雑用銀中勘渡願書	2点	（嘉永3年）戌8月	水野源次（印）ほか5名	表御納戸
10	真御太刀御金具新出来手間銀御渡願書（覚）	1点	（嘉永3年）戌8月	水野源次（印）ほか3名等	表御納戸御役所
11	御献納御太刀拵方に付入用金銀手間料等中勘願書	1点	（嘉永3年）戌9月	水野源次（印）ほか3名	表御納戸
12	北野天満宮御献納御太刀絵形、菱形等関係書類	3点	嘉永3年（1850）	—	—
13	御献納御太刀御打台日変更に付廻状	1点	（嘉永4年）亥2月16日	石川栄左衛門・井浦理三郎	高尾太右衛門ほか16名
14	北野御献納御太刀打合せ通知	1点	（嘉永4年）4月4日	樋口芥吉・石川栄左衛門	勘師 高尾太右衛門ほか16名

15	北野御敵納御太刀拵方に付光の字名乗り願書	1点	(嘉永4年) 亥4月	白銀師 水野源六	表御納戸御役所
16	北野御敵納御太刀打合日延期廻状	1点	(嘉永4年) 亥4月	樋口芥吉・石川栄左衛門	砌師 高尾太右衛門ほか16名
17	御太刀御身預人々書上	1点	(嘉永4年) 亥5月	—	—
18	御太刀関係書状等①(写)	1点	(嘉永4年) 亥6月17日	時絵師与衛門	水源六様貴下
19	御太刀関係書状等②(写)	1点	(嘉永4年) 6月24日	—	—
20	御太刀関係書状等③(写)	1点	(嘉永4年) 6月28日	中村長三郎・吉野半次	駒井久次郎
21	御太刀関係書状等④(写)	1点	—	—	—
22	北野御敵納御太刀御絵形通り治定ニ付廻状	1点	(嘉永4年) 9月	樋口芥吉・中村長三郎	砌師 高尾太右衛門ほか15名
23	中勘銀相渡に付廻状	1点	(嘉永4年) 10月12日	樋口芥吉・中村長三郎	高尾太右衛門ほか15名
24	御太刀十二月四日ニ打合ニ付廻状	1点	(嘉永4年) 11月28日	樋口芥吉	砌師 高尾太右衛門ほか11名
25	御敵納御太刀御金具細工割	1点	(嘉永4年) 亥12月11日	水野源次ほか4名	表御納戸方御用

(注) 本表は「水野家文書」のうち、前田家奉納太刀関係の史料をおおよそ年代順に並べたものである。史料の年代について、写の場合は原本の年代を示している。なお、本文書の多くは、職人たちが藩の表納戸方へ提出した文書や表納戸方から職人たちへ出された文書の控である。

2、北野社への太刀奉納

江戸時代、前田家が北野社に太刀を奉納したことが確認できるのは、元禄十五年（一七〇二）、宝暦二年（一七五二）、享和二年（一八〇二）、嘉永五年（一八五二）の四回の天神御忌で、その前後に北野



〔写真1〕元禄15年（1702）800年御忌奉納太刀「恒次」
（写真提供：北野天満宮）

社の社殿修造が行われている。¹⁵⁾

(1) 五代綱紀による太刀奉納

元禄十五年（一七〇二）の八〇〇年御忌に際し、五代綱紀が北野社に太刀を奉納したことは前田家側、北野社側いずれの史料にも記録されている。

まず前田家側の史料から見ていこう。「史料1」・「史料2」はいずれも「加越能文庫」（金沢市立玉川図書館蔵、石川県指定文化財）に収められている明治期の記録であるが、当時の状況を伝える史料として紹介する（史料名の下には「加越能文庫」の番号を示す）。

〔史料1〕加賀藩史料（二六・二八―八八） 前田家編輯方手写

（朱筆）

「前田御家雜録卷第二 元禄十五年二月二十五日」

杵本義隣覚書

一、元禄十五年壬午二月北野 聖廟江從相公様御太刀被献、

是年八百御年忌也、御使者前田修理知頼、

箱ノ書付山本源右衛門基庸調之、

天満宮 寶劍 青江恒次作 一鞘

（朱筆）

「右箱ノ裏ニ書付」

元禄十五年歳次壬午春二月二十五日

参議正四位下行左近衛権中将兼加賀守 菅原朝臣綱紀

(朱筆)

「上箱ノ書付」

天満宮寶剣

〔史料2〕 加藩諸事雜記(一六・二八―七六) 森田良見編 自筆

一、元禄十五年二月廿五日八百祭、御代拝人前田修理、御太刀

御奉納 青江恒次 代金十枚、神馬代白銀二千兩

旧傳三云、元禄十五年御奉納太刀裁許仁岸惣右衛門、暨修竹庵

能順等有合申候、承應二年七百五十年祭之時、御代拝人御太刀

奉納之時雷鳴震動奇瑞有之、今度ハ如何有之哉与申候、間も無

之雷鳴震動致シ、何茂不堪不審与云々

〔史料1〕によれば、京都北野社への使者(藩主の代拝人)は前田

修理知頼⁽¹⁶⁾で、箱書の文字は書物役で詩歌にも長じていた山本基庸⁽¹⁷⁾が整

えた。また、奉納は御奉納太刀裁許の仁岸惣右衛門が北野社の宮仕⁽¹⁸⁾の

預⁽¹⁹⁾(筆頭の地位)であった能順⁽¹⁹⁾等と申し合わせた上で行われ、太刀

の代金が十兩、神馬代の白銀が二〇〇〇兩であったことを〔史料2〕

から知ることができる⁽²⁰⁾。

次に、北野社の宮仕の記録にみえる奉納太刀の記事を示す。

〔史料3〕宮仕記録 元禄十五年三月二十四日条

一、廿四日雨、松平加賀守殿^(前田綱紀)方為御寄進御太刀奉納、其粧藪⁽²¹⁾丁寧

也、御宿坊能順へ黄金二之折紙ニ而去ル廿五日ニ御代参、加賀

方上京也、然所今日内陣へ奉納之事松梅院方⁽²²⁾能順御頼ニ而内意

三云、奉納之節能順も内陣へ入申度之旨、則松梅院承引ニハ廿

一日之秉燭方潔斎可有之旨松梅院方内意ニ而潔斎互ニ被相勤、

今未刻ニ奉納也、今度内陣へ能順御入候事重而必然之例ニハ難

成事也、ケ様之事ハ松梅院衆中挨拶ノ事也、尤今度内陣へ奉納

之事、松梅院方蜜々也、其謂ハ他方奉納被頼ニ付難儀然も如何

ニ付隠蜜也、松梅院云ニ、此方ニ奉納之物モ有之故、幸之事と

被申也、其心入尤之事也、奉納物儒者大学頭^(林信篤)五音^首之詩尅封八百

首之和哥尅箱、是ハ二条与力松井善右衛門入道同輩申合奉納之

由也、来国光ノ御太刀尅箱共也、紺地ノ今織ニ而包之鏝ハ金焼

付也、此分松梅院方也、能順方加賀守殿御奉納之御太刀青江尅

腰金具後藤細工也、^(彫)贈物皆松と梅也、金十枚ノ折紙添也、夏

堂へ入人数松梅院方善右衛門・左近也、衆中ハ能順・能東・能

観・能什・能通・能玉・能作也、内陣へハ松梅院・能順斗被入

也、此太刀御虫干之時ハ楽間ニ而拭可申間、左様被成被下候様

ニと松梅院へ能順御約束也、

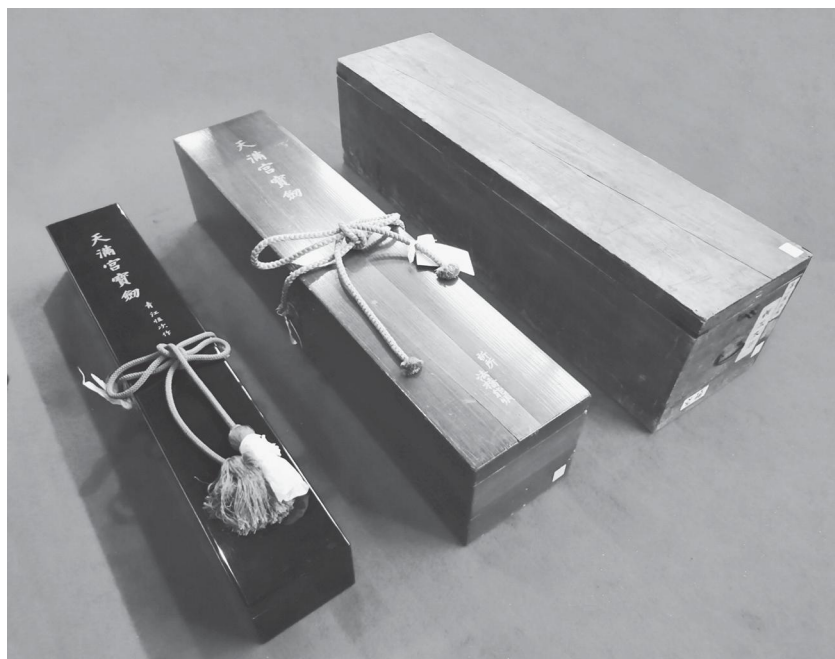
〔史料3〕にはより詳細な情報が含まれており、冒頭の傍線部には

奉納太刀の装飾が丁寧であること、宿坊の能順を仲介として二月二十

五日に加賀からの使者が代参したことなどが記されている。宮仕の能順は、神事奉行の松梅院に内陣へ入ることを許可するよう頼み、二十一日の秉燭（夕方）から潔斎することを条件に許されているが、宮仕が内陣に入ることは異例のことであった。内陣への太刀奉納は三月二十四日の未刻（午前十時頃）に行われ、松梅院の善右衛門・左近の二名、宮仕衆中からは能順・能東・能観・能什・能通・能玉・能作の七名、合計九名が夏堂に入ったが、内陣へは松梅院と能順の二名だけが入ることを許された。また、後半の傍線部に「能順が加賀守殿御奉納之御太刀青江老腰金具後藤細工也、彫物皆松と梅也金十枚ノ折紙添也」とあり、奉納された太刀は備前の刀工青江の作、細工は後藤家によるもので、彫物は松と梅で統一されており、金十枚の折紙（極書）が添えられていた。これらのことは前田家側の記録や現存する太刀の装飾と一致する。なお、加賀では三代利常の代から上後藤・下後藤の家が隔年交替で加賀の職人の指導にあたっていたが、寛文二年（一六六二）に幕府が後藤家に江戸定府を命じたため、両後藤家の加賀出張は廃止になった。そのため太刀「恒次」を奉納した頃は、後藤家の表向きの御用は水野源六家が代行するようになっていたが、加賀の職人たちが奉納太刀の製作に関与した形跡は見られない。

こうして能順を仲介として前田家から奉納された太刀「恒次」は、定期的に拭きを行いながら、太刀を収める箱「写真2」とともに今日まで北野天満宮で保管されている。外箱の蓋の裏面には「元禄十五年壬午年三月廿四日三日齋戒／蔵本社内陣／神殿大預神事奉行法眼禅覚

（花押）」という墨書銘があり、中箱の蓋の表面に「天満宮寶劔 祈所法橋能順」、内箱の蓋の表面に「天満宮寶劔 青江恒次作 老鞘」、内箱の側面に「祈所法橋能順」と金字で記されている。



〔写真2〕元禄15年（1702）800年御忌奉納太刀「恒次」の収納箱

(2) 八代重熙による太刀奉納

宝暦二年（一七五二）の八五〇年御忌に際しての太刀奉納については、北野社側の史料が確認できないため、前田家側の史料を中心に紹介する。

〔史料4〕加藩諸事雜記（一六・二八―七六） 森田良見編 自筆

一、寶暦二年二月廿五日八百五十年祭、御代拝人前田左門、御奉納太刀備前師光 代金廿枚、白銀二百枚、北野松梅院能作を以、百味并三二万燈被献、

右御奉納之太刀、御在江戸ニ付於江戸太刀之飾等被仰付、上箱銘等書付細工奉行久田清左衛門書之、御献納之白銀者銀子一枚宛封紙を以包之、上書者京都在住之御家人平田内匠書之、臺四ツニ銀子五拾枚宛積之云々、

〔史料5〕大野木克寛日記（一六・四〇―七八） 大野木克寛著

今日かね屋清四郎参出 是克成小つゝみの師也
最前は若村新右衛門三候
 新右衛門儀後当春と清四郎令稽古、
 清四郎京師より之書立の由にて、為見候に付左写之

覚

一、北野社頭真御太刀

一腰 備前師光

御馬代黄金

式拾両

御目錄

外御寄進料白銀

二百枚附臺

一、白銀十枚宛 各御目錄
附台

預玄院様・浄珠院様

一、御太刀金馬代御目錄

上総介様

一、白銀五枚宛附臺御目錄

楊姫様

御目錄

斐姫様

健次郎殿

一、白銀五枚宛、附台、御目錄

出雲守様奥方様

一、御太刀金馬代

松平備後守様

右之通ニ御座候、真太刀ハ江戸を当十七日到来、御徒横目山田甚兵衛、宰領足輕式人、持人小者六人ニ而到着、御認木地簍箱しめ縄はり、其内木地箱ニ入唐木綿白袷服紗包、内栗色御箱 浅貴打緒前田兵部殿封於御用所、両奉行・御徒横目立合上認取拂、左門殿江御渡、右栗色御筥之内白羽二重袷服紗包、内黒塗御筥、金粉ニ而献納之御書付有之、右者廿五日卯下刻、木地簍箱ノ儘木地わく臺ニ載之、御徒相添、北野ニ而御宿坊能作方ニおゐて、左門は布衣着用、熊谷半左衛門長上下ニ而社頭江同道御献納御飾相済候と、左門殿御名代拝有之候、

一、当十九日壹萬燈明御執行、大々百味御饗、御祈念有之候、此外

之儀追而可申上候、有増之儀別紙調入御覽申候、以上、

二月廿五日⁽²³⁾

〔史料6〕政隣記（一六・二八―二一） 津田政隣編^{つだまきつひ} 自筆

（二月十三日）

聖廟八百五十年御忌ニ付、京都北野江御代拝人持組前田左門被仰渡、
今月七日金沢立、三月五日帰、小松天神ニも万句之連歌執行ニ付、
御内々御代参御持筒頭御近習竹田金右衛門被遣、二月廿五日相勤⁽²⁴⁾
之⁽²⁵⁾、

〔史料4〕によれば、八五〇年御忌の藩主の代拝は前田左門孝情⁽²⁶⁾（三〇〇〇石）がつとめ、奉納品は備前師光の太刀、白銀二百枚で、松梅院・能作によつて百味（供物）と二万灯が献じられた。藩主重熙が江戸に在府中のため江戸から太刀の飾等について指示が出された。太刀の上箱銘等は細工奉行の久田清左衛門⁽²⁷⁾が書き、「御献納之白銀」は銀子を一枚ずつ封紙で包んで献上された。また、封紙の上書は京都在住の御家人平田内匠⁽²⁸⁾が書き、台四つに銀子が五十枚ずつ積まれた。「史料6」によれば、このとき北野社だけでなく加賀の小松天神（梅林院）でも万句の連歌が執り行われたという。

八五〇年御忌の太刀奉納の様子を最も詳細に記録しているのが、「史料5」である。大野木克寛が京都に滞在していた息子克成の小鼓

の師「かね屋清四郎」からの手紙の内容を記したもので、これによれば、江戸から送られた太刀は二月十七日に京都に届いた。三重の箱に収められた太刀は、御徒横目山田甚兵衛、宰領足軽二名、持人足軽六名の計九名で運ばれてきたという。三重の箱のさらに外側には「木地簍箱^{わさ}」（簍のある箱力）があり、注連縄をはつて体裁が整えられた。

外箱である「木地箱」には唐木綿白袷服紗包が入っていた。中箱である「栗色御箱」は浅葱色の内緒で前田兵部孝起⁽²⁹⁾が御用所において封をし、両奉行・御徒横目の立ち合いの上で注連縄を取り払い、前田左門に渡された。この「栗色御箱」の中には白羽二重袷服紗包が、内箱である「黒塗御箱」には金粉で献納の書付が記されている。箱は二十五日の卯下刻（午前七時頃）に木地簍箱のまま木地簍台に載せ、御徒を添えて運ばれた。北野の宿坊能作方で前田左門は布衣^{ほえ}を着用し、熊谷半左衛門は長袴で社頭へ同道し献納の飾りを行った。さらに、十九日には万灯会⁽³¹⁾が行われ、大々百味御飾を供え、祈禱が行われた。なお、藩主以外の奉納者は預玄院（五代綱紀の側室）、浄珠院（六代吉徳の側室、七代宗辰の母）、上総介（後の九代重靖、八代重熙の弟）、楊姫（六代吉徳の女、斐姫（六代吉徳の女、暢・操・偕ともいう）、健次郎（後の十代重教、七代宗辰の弟）、出雲守（富山藩六代利興^{としむね}）の方、松平備後守（大聖寺藩五代利道）である。

一町人がこれだけ詳細な情報を得ていることは注目すべき点で、京都屋敷に出入りしている町人が御忌の奉納品の調達に関与していたものと思われるが、史料に明確に見えないので可能性を示すにとどめて

おく。

以上の宝暦二年の太刀奉納過程の内容をまとめたのが、「表3-①」である。詳細な製作過程については不明であるが、江戸から指示を受けながら奉納太刀飾の準備が進められ、御忌の二十日前には藩主の代拝人が京都に向け金沢を出立し、太刀は御忌の八日前に江戸から京都にもたらされた。また、奉納太刀は「木地箱」、「栗色箱」、「黒漆塗箱」の三重箱に収められて奉納されたこと、「木地箋箱」に注連縄をはって九名で運ばれ、丁寧かつ厳重に取り扱われていたことなどが確認された。北野天満宮に伝わる外箱（木地箱）の蓋の表面には「寶劔／御宿坊能作」、蓋の裏面には「宝暦二年壬申歳九月十六日三日齋戒蔵／本社内二陣／神殿大預神事奉行松梅院法印禪深（花押）」という墨書がある。ここから、この時の前田家の太刀奉納を担当した北野社の宿坊（宮仕）が能作であり、九月十六日には三日間潔斎した松梅院禪深によって内陣に収められたことがわかる。

八五〇年御忌の奉納太刀の御用に携わった職人については、太刀の鐔の銘と「水野家文書」により知ることができる（「表4-①」）。太刀の鐔には「後藤久清（花押）・水野多光（花押）・桑村克久（花押）」・「寶暦二年／二月吉日」と両面に金字で陰刻されている。^②加賀後藤の家柄である後藤七兵衛久清、白銀師の三代水野源六多光、桑村家中興の祖とされる桑村源左衛門克久の三人は京都神護寺への太刀奉納にも携わっており、当時の加賀を代表する名工であった。このように、八〇〇年御忌の時とは異なり、八五〇年御忌の太刀奉納では、

加賀藩の職人育成策が功を奏してか、加賀の金工職人が中心的な役割を果たすようになった。八〇〇年御忌の奉納太刀と八五〇年御忌以降の奉納太刀とはデザインにも違いが見られる。例えば、大切羽に施された梅や松の表現が異なっており、八五〇年御忌以降は梅が八重梅になっているほか、鞘の部分が金梨地から金置平目地へと変化している。こうして加賀の職人たちによってつくられた八五〇年御忌の太刀の装飾デザインは九〇〇年御忌・九五〇年御忌へと受け継がれていった。その意味で、八五〇年御忌の太刀奉納は、加賀の工芸史を考える上で、一つの画期となろう。

(3)十一代治脩による太刀奉納

享和二年（一八〇二）の九〇〇年御忌の太刀奉納について、前田家側の史料を見ていく。

「史料7」政隣記（二六・二八―一） 津田政隣編 自筆

十二月廿九日

聖廟九百回御忌、来年二月廿五日就御相當ニ京都北野社江御代拝等之御使人持組前田橘三江被仰付

但、二月七日発足与翌正月廿九日用番山城殿被仰渡、則同日発足、且御獻納物ハ江戸ノ北野江被遣候ニ付、指副取傍御歩井關右平太、從金澤取傍為御用御歩中西八郎、橘三同日発足之事、附、各三月二日金沢江歸

〔表3〕北野社への太刀奉納過程

①850年御忌の太刀「師光」奉納

○宝暦2年（1752・申）

2月7日	前田家代拝人の前田左門が金沢を出立する
2月17日	真御太刀「師光」が江戸から京都にもたらされる
2月19日	万燈会 大々百味を飾り祈念する
2月25日	午前7時 木の隻台に載せられた太刀箱が御徒をそえて運ばれる。前田家の代拝人が北野の宿坊（能作）で装束を整え献納の飾りを済ませる。 * 同日、小松天神（梅林院）で万句の連歌が奉納される
3月5日	前田左門、金沢に帰る

（注）「大野木克寛日記」（史料5）、「政隣記」（史料6）により作成した。

②900年御忌の太刀「清則」奉納

○享和元年（1801・西）

12月29日	金沢で完成した太刀「清則」の拵が江戸表にもたらされ、藩主（11代治脩）に上覧する
--------	--

○享和2年（1802・戌）

2月4日	太刀拵が江戸表より東海道を通り京都へもたらされる
2月7日	前田家代拝人の前田橋三と御歩の中西八郎、京都北野社に向け金沢を発足する
2月25日	加賀前田家、太々百味と太刀・金銀などを北野社に奉納する。これにより、高辻大納言による奉幣も行われる。
3月2日	前田橋三ほか2名、金沢に帰着する

（注）「政隣記」（史料7）、「續漸得雜記」（史料9）、「宮仕記録」（史料10）により作成した。

③950年御忌の太刀「助守」奉納

○嘉永5年（1852・子）

2月6日	前田家御名代の前田監物が京都北野社に向け金沢を発足する
2月25日	前田監物、京都北野社で代参を勤める
2月28日	前田監物、京都を発足する
閏2月5日	前田監物、金沢に帰着する

（注）「續漸得雜記」（史料12）により作成した。

〔表4〕北野社奉納太刀の製作に関わった職人たち

①宝暦2年（1752）

No.	職名	職人名	備考
1	研師	勘兵衛	
2		高良五郎兵衛	
3		高良又六	高良五兵衛忒
4	白銀屋	（水野）源六	
5	白銀屋	源左衛門	
6	白銀屋	次兵衛	
7	柄巻師	弥助	
8	蒔絵師	市兵衛	

（注）「北野天満宮御献納御太刀相勤候人々書上」（「水野家文書」No.5）による

②享和2年（1802）

No.	職名	職人名	備考
1		森村平之丞	
2		高良又之丞	
3		水野源六	寛政三年（1791）12月病死
4		後藤清次郎	
5	白銀屋	甚助	源六病死のため加入
6	白銀屋	吉助	源六病死のため加入
7	柄巻師	弥助	
8	蒔絵師	市太夫	
9	蒔絵師	与右衛門	
10	飴屋	善兵衛	

（注）No.1～9は「北野天満宮御献納御太刀相勤候人々書上」（「水野家文書」No.5）、No.10は「真御太刀御金具
図り書」（「水野家文書」No.2）による

③嘉永5年（1852）

No.	職名	職人名	備考
1		水野源次	
2		駒井久次郎	
3	刃師	高尾太右衛門	
4	鞘師	高良政之丞	
5	鞘師	高尾甚左衛門	
6	柄巻師	河村忠右衛門	
7	柄巻師	北川長蔵	
8	白銀師	後藤七兵衛	
9	白銀師	後藤才次郎	
10	白銀師	水野源六	
11	白銀師	吉助	
12	蒔絵師	与右衛門	
13	蒔絵師	五十嵐長左衛門	
14	鋳師	久兵衛	
15	指物師	与助	伊勢屋（「水野家文書」No.7・16・22）
16	指物師	佐六	山田屋（「水野家文書」No.7・16・22）
17	指物師	左平	糠見屋（「水野家文書」No.7・16・22）
18	金具師	財田弥兵衛	
19	組屋	徳右衛門	京物（「水野家文書」No.16）
20	（呉服）	中嶋喜左衛門	普照寺屋（「水野家文書」No.7）、 呉服・呉服方（「水野家文書」No.16・22）
21	鋳師	横川屋久兵衛	「水野家文書」No.7 による

（注）「北野天満宮御献納御太刀拵方に付請書」（「水野家文書」No.6）、「（北野御献納）御太刀被仰付候二付罷出候様廻状」（「水野家文書」No.7）、「北野御献納御太刀打合日延期廻状」（「水野家文書」No.16）、「北野御献納御太刀御絵形通り治定二付廻状」（「水野家文書」No.22）による。

〔史料8〕加藩諸事雜記（一六・二八―七六） 森田良見編 自筆

一、享和二年二月廿五日九百年祭相當ニ付、北野御代拝人知行高二千五百石人持組前田橋三、御奉納太刀備前清則代金五枚、白銀三百枚御献納、世子筑前守様より白銀百枚御奉納、壽光院殿より白銀五十枚、正姫君并ニ松壽院殿よりも白銀五十枚宛御献納有之也、

〔史料9〕續漸得雜記（一六・〇五一六）

森田良郷著 前田家編輯方手写

一、享和二年二月二十五日天満宮九百回御忌ニ付、京都北野江相公様より前々之通り拵御太刀御献納被遊ニ付、備前國清則一鞘御國ニ而御拵出来之上、前年十二月二十九日金沢より江戸表へ被遣候、相公様御覽之上、二月四日江戸表より東海道通り京都へ被遣候、且又金沢方江戸表へ指添ニハ、割場附小頭老人、才領足輕式人、持参人割場附小者雪中故四十人ニ而罷越候、江戸表方京都迄指添人御歩耆人、足輕式人、小者八人、宿人足十六人、京都北野へ御名代前田橋三^{式千五百石、人持組}、京都御買手會所奉行岡田又右衛門、京御屋敷方北野迄、御太刀・御献納金銀入御長持七棹行^{つゝ}烈相立、跡方御用聞町人三拾余人、布上下着用ニ而御供仕候、北野御先詰ニ而御太刀等之御指圖ハ、高辻大納言御父子御三人御装束にて御詰被成候、前田橋三八烏帽子直垂に

て馬上、先乗りハ岡田又右衛門長袴にて馬上也、御献納之品々左ニ記、

御太刀一腰、金御拵^{備前國清則}、但御袋ハ唐にしき、御箱蠟色、内金平目梨子、上箱とも三重に入、其上篋入にしてしめ縄張、箱之蓋之裏に金の盛上にて左之通り有之、

享和二年歲次壬戌春二月二十五日奉納

参議正四位下行左近衛權中將兼加賀守菅原朝臣治脩

箱之蓋表に左之通有之

天満宮寶劔

備前國 清則

一鞘

御献納左之通

相公様方

御同人様方

一、五枚

判金

一、三百枚

白銀

筑前守様方

壽光院様方

一、百枚 同断 一、五拾枚 白銀
 正姫様方 松壽院様方
 一、五十枚 白銀 一、五十枚 同断
 大聖寺飛驒守様方
 一、五十枚 同断
 但、淡路守様御家督被遊候得共、御服中ニ候故御献納無之候事、³⁴⁾

「史料9」の傍線部に「備前國清則一鞘御國ニ而御拵出来」とあるように、九〇〇年御忌の奉納太刀も国元の金沢で製作されたことがわかる。享和元年（一八〇一）十二月、完成した奉納太刀は雪中のため割場付小者四十人で金沢から江戸まで運ばれ、十一代治脩に上覧した後、総勢二十七名の人足らによって東海道を通って京都へ届けられた。江戸に奉納太刀がもたらされたのと同日の二十九日、人持組で「御寺方御名代」の前田橋三に藩主の代拝が命じられ、翌年の正月二十九日には、発足日が二月七日に決定した。奉納品は江戸から送るため、御歩の井関右平太が添えられた。また金沢からも中西八郎が前田橋三に従った。御忌の日には、前田橋三と京都御買手會所奉行岡田又右衛門が加賀藩の京都屋敷より北野まで長持七棹の行列を組み、布袴を着用した御用聞町人三十余人がこれに御供した。北野には、御太刀等の指図のため、高辻大納言親子三人が装束を着て先に詰めていた。前田橋三は烏帽子直垂を着て馬上、先乗の岡田又右衛門は長袴を着て馬上であった。こうして、二月二十五日の九〇〇年御忌の代参を終え

た前田橋三らは三月二日に金沢に帰着している。以上の奉納過程をまとめたのが、「表3-②」である。なお、藩主以外の奉納者は筑前守（十代重教の次男、十二代齊広）、寿光院（十代重教の正室、千間）、正姫（十一代治脩の室力）、松寿院（十代重教の次女・頼、保科容詮の室）、飛驒守（大聖寺藩、八代利考）で、淡路守（富山藩、九代利幹）は服喪のため献納しなかった。
 次に、北野社側の史料を掲げる。

「史料10」 宮仕記録 享和二年二月二十五日条

廿五日 晴 一万燈宿坊成乗坊

（中略）

一、今日加州太守方太々百味献上ニ付、未明方各出勤、早朝備可申処、松梅院義朝出勤ニ而太々ニ加り可申西之□ニ付、乗成坊方者不相頼旨申之、松梅院者先年も罷出候故、配膳可致申之処、宿坊之了簡次第ニ而候義申聞不相頼、依之松梅院祠官中一所ニ拝殿へ参法事を始、役者能正へ申有之、小百味を正面御机ニ如先年為飾候ニ付、正面御机塞有之ニ付、法事相済迄相待候義もいか、故、一先銘々下宿致支度等相調、五ツ半時亦々各出勤之上、太々御供如例奉備暫相待候内、加州御代参布衣着ニ而長上下之侍兩人夥敷供廻りニ而参詣、御奉納物例之通、真ノ御太刀一腰、臺黄金其他御内室御隠居御子等一統ニ御初尾銀臺乗色色ツ、中檀ニ而乗成坊へ被渡、其度々大床正面ニ飾、扨乗成坊舩

ニ而奉幣有之、祠詞相済各休息、此間ニ神酒神供代参へ為戴候、右ニ付高辻大納言参詣ニ而中檀ニ而奉幣御勤有之也、加州殿江之挨拶と被存也、夕方各出勤ニ而神供徹之、

北野社側の記録からは、九〇〇年御忌の一部始終を知ることができ、二月二十五日には、加賀前田家より太々百味^{④⑥}が献上されるため、北野社の宮仕たちは早朝より出勤したが、松梅院ほか祠官中が拝殿にて法事を始めたため、宮仕は一旦下宿して準備を整えた^{④⑦}。五ツ半時（午前九時頃）、宮仕は再び出勤し、太々に備えてしばらく待つと、布衣を着た前田家の代参が長袴の侍兩人と夥しい供を連れて参詣し、例のとおり太刀・金銀などを奉納した。これらの奉納物は中檀にて宿坊の乗成坊が受け取り、大床の正面に飾られた。乗成坊は軾（半畳）にて奉幣し祠詞をあげ、その後休息している間に、前田家の代参へ神酒・神供が渡された。さらに、高辻大納言が参詣して中檀にて奉幣を行った後、前田家へ挨拶し、夕方には宮仕が出勤して神供が下げられた。こうして、九〇〇年御忌に奉仕する宮仕たちの長い一日がようやく終わった。

九〇〇年御忌の太刀奉納から史料に登場する高辻家は、北野社では「菅家公家衆」^{④⑧}などと称されていた菅原姓の公家で、五代綱紀の頃より前田家と「同姓」の家として親しく交際するようになり、前田家の法事で一定の役割を果たす一方で、同家から助力金（米）を受けていた^{④⑨}。また、高辻家は加賀藩領内で雷除けの札守を配る活動を行ってお

り、前田家を後ろ盾とした経済活動も展開していたことが確認できる^{④⑩}。北野社での太刀奉納に高辻家が関与する背景には、こうした前田家とのつながりが前提としてあるが、古い由緒を持つ公家と結びつくことは前田家を権威づける上で必要であり、前田家・高辻家双方にとって有益な関係、相互補完的な関係であったといえよう。

さて、九〇〇年御忌の太刀奉納については、奉納太刀の製作に携わった職人たちの動向をわずかに知ることができる（「表4-②」・「表5-①」）。いつから製作にとりかかったのかについては不明であるが、寛政十年（一七九八）に藩は高良又之丞^{④⑪}ほか十一名に誓詞神文を提出させているので、寛政十年には製作が始まっていたものと思われる^{④⑫}。奉納の前年にあたる享和元年二月二十八日には太刀拵の図面が提出されたようであるが、図面は現存していない。さらに、同年四月以降、職人と表御納戸方との間で金具製作にかかる費用の調整がなされた。この勘定書によれば、太刀の金具・焼金買上請取高は五十八匁六分で、その内訳を列記した部分には朱筆で改められた部分が多数あり、金具の仕様と費用が製作過程で変化したことがうかがえる^{④⑬}。

太刀の鐔には「後藤清明（花押）・駒井元甲（花押）・高尾金敦（花押）／享和二年二月吉日」と両面に陰刻されているが、金字ではない。さらに、九〇〇年御忌の奉納太刀については、享和二年に水野源六・高尾吉助が表御納戸方へ提出した太刀の図面が残っている（「写真3」）。図面には金を用いる部分に黄色の彩色が施されており、太刀の金具の意匠や技法・素材が細かく記載されている。また、図面の奥書

[表5-①] 享和2年（1802）奉納太刀「清則」の製作過程

○享和元年（1801・酉）

2月28日	太刀の絵図（現存せず）を表御納戸方へ提出する
4月	後藤清次郎ほか2名、表納戸方へ太刀の金具にかかる費用の見積を表御納戸方に報告する
6月	白銀屋後藤清次郎ほか3名、太刀の金具にかかる費用の見積を表御納戸奉行の井口勇次郎・井上靱負に報告する
11月	白銀屋後藤清次郎・甚助・吉助、奉納太刀の金具にかかる費用を表納戸方に報告する

[表5-②] 嘉永5年（1852）奉納太刀「助守」の製作過程

○嘉永3年（1850・戌）

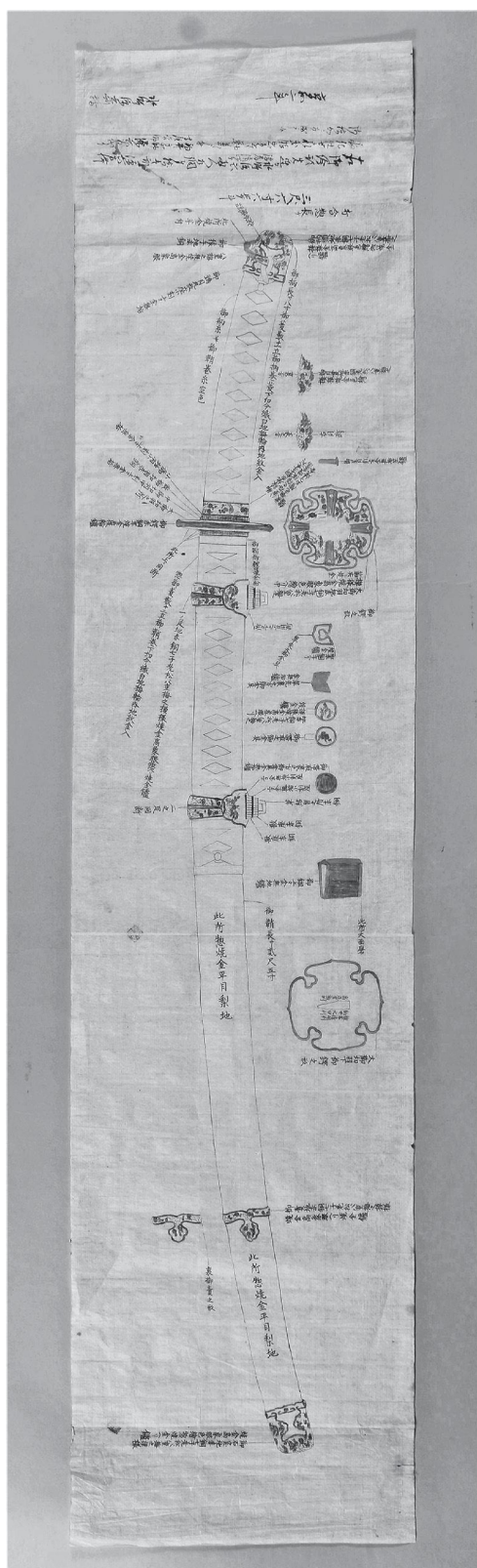
6月14日	表御納戸奉行の中村長三郎・吉野半次、硯師高尾太右衛門ほか16名に表納戸方への出仕を命じる
6月	水野源次ほか19名、表御納戸方役所へ御用の請書を提出する
8月	水野源六ほか4名、表御納戸方へ手間料・雑用銀として中勘の支払いを願い出る
	水野源六ほか5名、表御納戸方へ手間料・雑用銀として中勘の支払いを願い出る
	水野源六ほか3名、表御納戸方へ新たに手間料などが生じたため中勘の支払いを願い出る
9月	水野源六ほか3名、表御納戸方へ入用金銀・手間料などの中勘の支払いを願い出る

○嘉永4年（1851・亥）

2月16日	表御納戸奉行の石川栄左衛門・井浦理三郎、高尾太右衛門ほか16名の職人たちに打ち合わせ日の変更を伝える
4月4日	表御納戸奉行の樋口芥吉・石川栄左衛門、硯師高尾太右衛門ほか16名の職人たちに打ち合わせ日を伝える
4月16日	表御納戸奉行の樋口芥吉・石川栄左衛門、硯師高尾太右衛門ほか17名の職人たちに打ち合わせ日の延期を伝える
4月	白銀師水野源六、表御納戸役所へ「光」の字を用いて奉納太刀の鐔に「光和」と名彫することを願い出る
5月	5月11日から翌年の正月晦日までの太刀の刀身を預かる人々の名前と期間を定める
6月17日	蒔絵師与右衛門、風邪で外出できないため水野源六に「一貫三百七拾貳匁」の領収証を代理で（表御納戸役所へ・筆者注）提出するよう依頼する
6月24日	表御納戸方役所、太刀拵方の請書を作成し持参するよう諸職人に命じる
6月28日	表御納戸奉行の中村長三郎・吉野半次、駒井久次郎に水野源六とともに表御納戸役所へ出仕するよう命じる
—	白銀師源蔵ほか3名、当年より「定式御用」に加えられる
9月	表御納戸奉行の樋口芥吉・中村長三郎、太刀が絵形通りに完成したことを硯師高尾太右衛門ほか15名に伝える
10月12日	表御納戸奉行の樋口芥吉・中村長三郎、高尾太右衛門ほか15名に中勘銀を渡すため明後日14日四ツ時に表御納戸役所へ出仕するよう命じる
11月28日	表御納戸奉行の樋口芥吉、硯師高尾太右衛門ほか11名に打ち合わせ日時を知らせる
12月11日	水野源次ほか4名、表御納戸方御用へ金具の細工割を提出する

* 「水野家文書」により作成した。

【写真3】 享和二年北野へ御献納太刀拵図（「水野家文書」No.4）



によれば、製作途中で白銀師水野源六が病死し、また源六の息子は服忌につき御用をつとめるのが難しかったため、駒井甚助・高尾吉助の二名が源六の代わりとして急遽加わり、御用をつとめることになった。なお、外箱の蓋の裏面には「御師 順承」という墨書銘があるが、松梅院が奉納に関与したことを示す墨書は九〇〇年御忌以降確認できなくなる。

以上が九〇〇年御忌の太刀奉納過程であるが、太刀を北野社に奉納した直後の翌三月、十一代治脩は齊広に家督を譲り、隠居した。

(4) 十三代齊泰による太刀奉納

嘉永五年（一八五二）の九五〇年御忌の太刀奉納については北野社側の史料は現存しておらず、前田家側の史料のみが残っている。

〔史料11〕加藩諸事雜記（一六・二八―七六）

一、嘉永五年二月廿五日九百五十年祭相當ニ付、北野御代拝人知行
高三千石人持組前田監物、御奉納太刀備前助守外白銀等、前々
之依旧例御献納有之也、

〔史料12〕續漸得雜記（一六・〇五一―六）

京都北野江、御名代前田監物 孝連人持組三千石 二月六日発足、二
十五日御代参相勤、途中行粧等享和二年御献納之通、同二十八日
彼表発足、閏二月五日帰着也、右御遠忌ニ付少将慶寧公御詠歌、

天満てる神のなかれを汲し身のいかてか梅をよそに詠めん

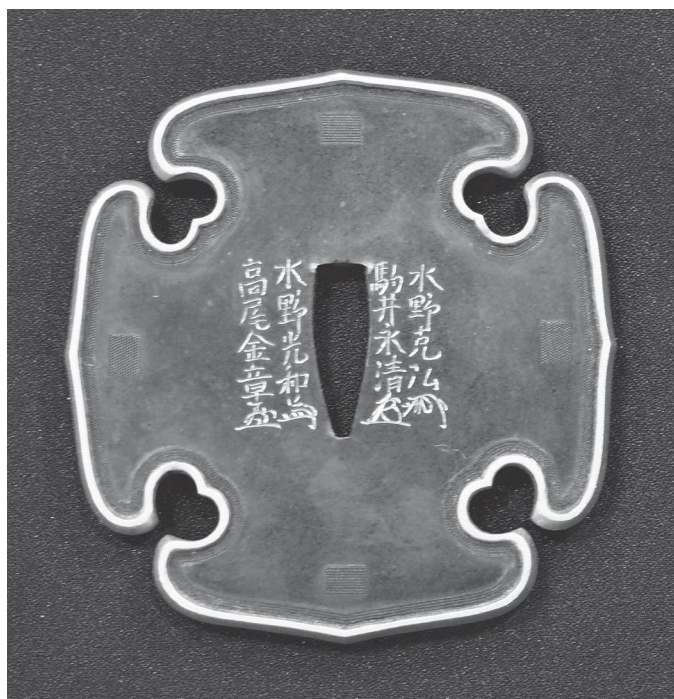
〔表3―③〕に示した通り、九五〇年御忌の太刀奉納は、これまでの先例にならって行われ、代拝人は前田孝連であった。外箱の蓋の表面には「御太刀／御師順承」、裏面には「御師 能作家」という墨書銘があり、八五〇年御忌以降の前田家の太刀奉納を担当した宿坊がいずれも能作家であったことが確認できる。

以上の史料からは北野社への太刀奉納の進め方に大きな変化は見られないが、九五〇年御忌の太刀奉納については、「水野家文書」に奉納太刀の製作過程を伝える史料がある程度残っている（表5―②）。嘉永三年（一八五〇）六月、表御納戸方から職人たちに御用が申し付けられ、刀身の押型が製作されるとともに、製作のための打ち合わせや費用の調整が行われた。〔表4―③〕にあるように、白銀師のほか鞘師や柄巻師、蒔絵師といった二十一名の職人の名前が確認でき、これらの職人たちを統括していたのが水野源六であった。太刀の細工割〔表6〕も残っており、刀身は嘉永四年（一八五二）五月十一日から翌年正月晦日まで高尾太右衛門・高良政之丞・高尾甚左衛門・水野源六の四名がおよそ二週間おきに交代で預かり、一ヶ所で長く保管することがないようにしていた。江戸時代の奉納太刀のうち師光以外の太刀については、本阿弥家の折紙（極書）が折紙箱とともに北野天満宮に現存しており、こうした高価な太刀が紛失することがないよう厳重に管理されたものと思われる。

〔表6〕 助守の金具細工割

No.	職人名	製作を担当する金具
1	水野源次	御大切羽式枚共 御星目釘
2	駒井久次郎	御縁頭共 御革紋両方共
3	白銀師吉助	御鍔并御切羽共 御鋤 御鞘責 御革先御金具 御猿手御鷺目
4	白銀師後藤（改）才次郎	御帯取二ノ分 御石突 御革紋裏具

〔注〕嘉永4年（1851）12月11日、水野源次ほか4名がに「表御納戸御用」へ提出した「御献納御太刀御金具細工割」（「水野家文書」No.25）により作成した。



〔写真4〕 嘉永5年（1852）950年御忌奉納太刀「助守」の鍔

太刀の鍔には「水野克弘（花押）・駒井永清（花押）・水野光和（花押）・高尾金章（花押）／嘉永五年壬子二月吉日」と両面に金字で陰刻されている「写真4」。水野克弘は本家筋にあたる水野源次家の職人であるが、水野源六光和は嘉永四年（一八五二）四月に家元の後藤家の通り字である「光」の字を名乗ることを藩の表御納戸役所へ願い出て許されている「史料13」。

〔史料13〕北野御献納御太刀拵方に付光の字名乗り願書

乍恐奉申上候

一、今般私義

北野御献納御太刀御拵方

被為仰付、冥加至極難有仕合

奉存候、就夫御鏝三名彫被為

仰付候ニ付、私義光和与相名乗申候所

光ノ字相改申候様被為仰渡、奉得

其意候、右光ノ字并乗ノ字之義ハ

彫物元祖後藤祐乘以来於家元

白銀職徒者

通り字御座候ニ付、免シ無之候而者難

前々々

名乗御座候、然所私方江者被免置候間、

代々光ノ字を以相名乗申候、則

宝暦年中 御献納御太刀被為仰付候節も

多光^{マサミツ}与名彫仕候、右之仕合御座候間、

恐多奉存候得共、何卒光ノ字

御免被為仰付被下候義者相成

申間敷哉、乍恐此段奉願上候、

右願之趣^通被為仰付被下候者

難有仕合ニ可奉存候、以上

亥

四月

白銀師

水野源六

表納戸御役所

右御聞届ニ付光和与名彫仕候事

加賀後藤の家と家元の後藤家との間には、さまざまな取り決めがなされていたのであるが、水野家は家元の後藤家より「光」の字を名乗ることを許され、八五〇年御忌の際にも先祖が「多光」と名乗った先例を引いて藩の表御納戸方を説得している。ここに、金工の後藤家の正統な流れをひく職人であるという水野源六の主張が垣間見え、興味深い。

(5) 奉納太刀の箱について

最後に、太刀を収める箱や折紙箱について簡単にふれておきたい。

「加越能文庫」には、北野天満宮奉納太刀を収めた箱についての情報を伝える史料が二件確認できる。一つは、九〇〇年御忌と九五〇年御忌の奉納太刀の箱の文字の輪郭を写したものである「写真5」。

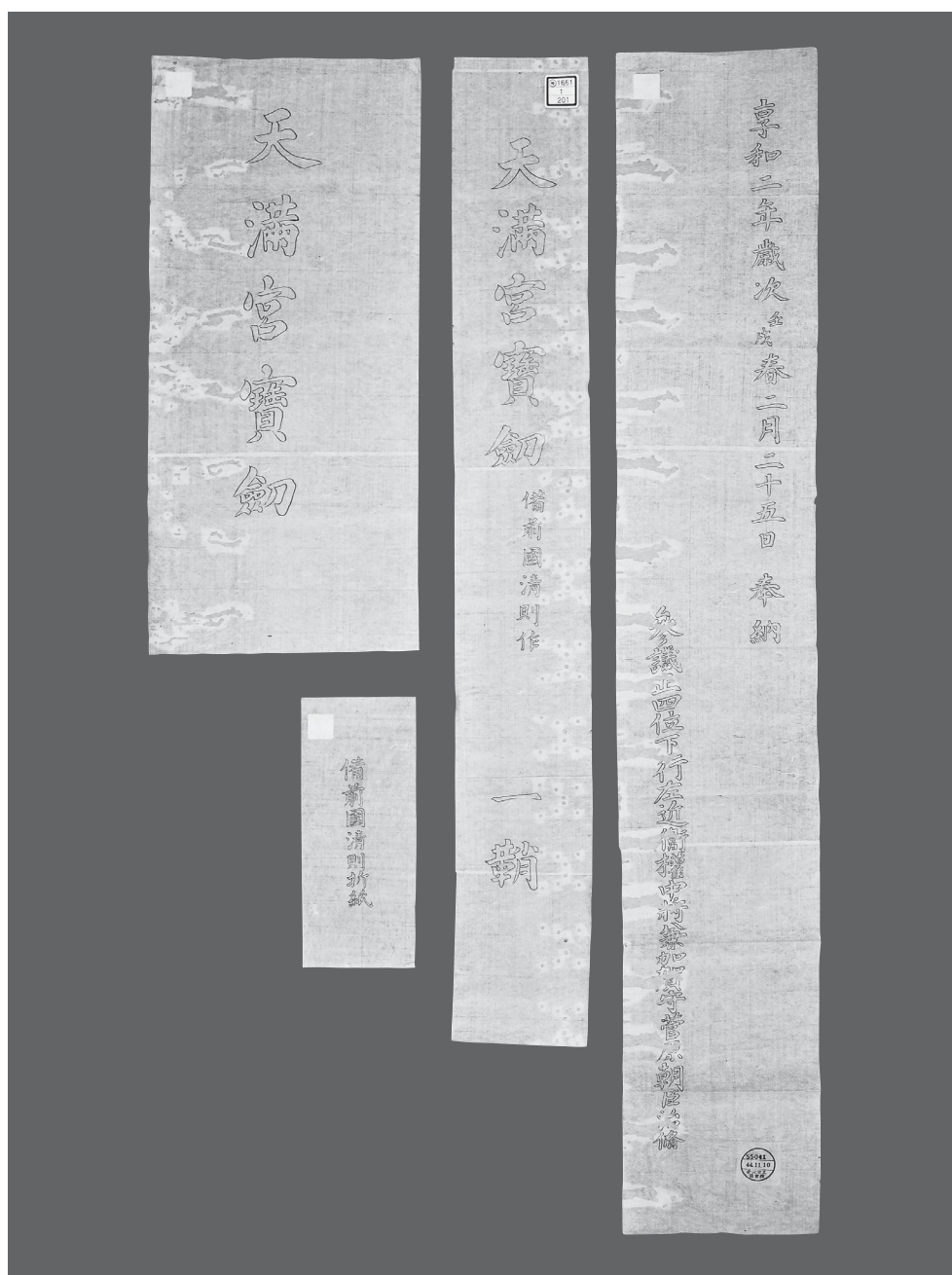
もう一つは、九五〇年御忌の奉納太刀の箱の製作を担当した五十風

長左衛門・蒔絵師与右衛門が、嘉永三年（一八五〇）に藩の表納戸役所へ提出した箱の仕様・見積書で、彼らが「真之御太刀御鞘」と「御太刀箱」・「御中箱」・「御折紙箱」の三箱および箱の文字を高蒔絵で仕上げる役目を担っていたことがわかる。その金額と仕様をまとめたのが「表7」であるが、総額は二貫九〇四匁であった。鞘は「平目梨子地」、太刀箱の仕様は全体が「黒蠟色」、内側と太刀掛二つが金梨子地（濃梨子地とも）、木丁面縁廻は「金紛色付」、中箱は内外ともに「すき溜塗」、折紙箱は外が「黒蠟色」、内が「黒塗」であった。このように、太刀拵だけでなく、太刀を収める箱についても豪華かつ丁寧なつくりであったことが確認できる。

〔表7〕奉納太刀「助守」の箱製作および文字の仕上げにかかる費用

No.	項目	費用	仕様
1	真之御太刀御鞘	726匁	中塗、渡は極上焼黄金平目置詰、鯉口は上々焼黄金粉に仕上げる
2	御太刀箱	1貫576匁	木地より製作し、惣布きせ上々堅地外蠟色仕上げ、箱の内裏・太刀掛二つを惣地焼金梨子地とし、木丁面縁廻り、焼黄金粉色付に仕上げる
3	御中箱	170目	渡・内外ともにすき溜塗に仕上げる
4	御折紙箱	57匁	木地より製作し、惣布きせ上々堅地外蠟色内黒塗、縁上々焼黄（金粉の二字脱力）色付に仕上げる
5	文字の仕上げ	375匁	太刀箱・中箱・折紙箱に入れる文字大小62字ばかりを上々焼黄金粉高蒔絵極上仕立に仕上げる
計		2貫904匁	

（注）嘉永3年（1850）に表納戸役所へ提出した「北野天満宮御宝剣御箱等御図り書」（16.61-200）により作成した。



[写真5] 天満宮宝劔箱書文字・折紙題箋等写（部分）

おわりに

加賀前田家による北野社への太刀奉納過程とその歴史的意義について、前田家側・北野社側の史料、太刀製作に携わった白銀師水野家の史料を用いて考察を加えてきた。本稿で明らかになったことをまとめて結びとしたい。

元禄十五年の八〇〇年御忌に際し、五代綱紀が宮仕の能順を仲介として北野社に太刀を奉納した。この時はあくまでも北野社で行われる御忌に合わせての奉納であったが、しだいに前田家は北野社でも菅家と認識されるようになったようである。⁶⁵そして、五〇年後の八五〇年御忌、さらに五〇年後の九〇〇年御忌と奉納の回数を重ねていく中で、同姓（菅原姓）とされる高辻家との交際を深め、前田家の太刀奉納は北野社の御忌を構成する一行事として恒例化していった。太刀奉納にあたっては、天神に敬意を払い、太刀を収めた三重箱の上に注連縄を張った箋箱を設け、威儀を正した代参の長い行列が組まれた。大勢の御供を連れて参拝する前田家の行列は人目を驚かせたであろう。藩主の代拝人である「御寺方御名代」は人持組の前田家（菅原姓）から選ばれ、藩主に代わって前田家一族からの金子・銀子等とともに百味・太刀を献上する儀礼を行い、万灯の献上を行う役目を負っていた。このように、御忌に際して藩主が北野社に参詣することはなかったが、太刀や金銀を北野社に奉納し、家や領国の繁栄を祈ることは、歴代藩主が政治を行う上で心のよりどころとなったものと思われ、そ

の意味では前田家の統治の根幹であったといえる。

第二に、奉納太刀の製作過程や体制、藩の指示系統、金工の家元である後藤家と加賀の職人との関係について、以下の点が明らかになった。まず、奉納太刀はいずれも折紙付きの名刀で、八五〇年御忌以降は藩の表御納戸方を通じて発注を受けた加賀の職人たちが、分業体制で拵や箱を製作した。とりわけ、金具の細工は当初家元の後藤家が主導していたが、八五〇年御忌以来、加賀が誇る名工たちによる装飾デザインが確立し、継承された点が注目される。奉納太刀製作に携わる職人たちを統括する立場にあったのが白銀師の水野源六家で、太刀の装飾や細工割、藩の表御納戸方との折衝などにおいても中心的な役割を果たした。「水野家文書」の一連の史料から、表御納戸方と職人たちが先例をもとに綿密な打ち合わせを重ねながら準備を進めていた様子が見えてくる。職人名が彫られた太刀の鐔からは、優れた仕事を後世に残そうとした職人たちの思いが伝わってくる。前田家による北野社への太刀奉納を通じて見えてくる奉納品の製作体制や家元の後藤家との関係については、加賀の工芸史を考える上でもさらに深めるべき課題であるといえよう。

第三に、北野社への太刀奉納過程の分析を通じて、前田家の京都における社会的関係の一端を垣間見ることができた。千葉氏が指摘されたように、京都屋敷の規模・機能は必要最低限のものであり、京都詰人の権限も限定されたものであった。それゆえに、天神御忌に関与する京都詰め藩士や町人は、京都屋敷を拠点に担当する職務の一つと

して、天神御忌のための書付作成や物品購入を行っていた。また、先に述べたように、前田家は能順・順承（能承）ら北野社の宮仕（宿坊）や公家の高辻家との関係を築くことにより、北野社の天神御忌の行事に参入することに成功した。前田家が北野社へ太刀を奉納するためには、このような京都での交際、京都詰人と江戸や国元の藩士との連携、物品を調達する町人の存在が必要不可欠であった。

最後に、前田家が太刀奉納等を通じて北野社（天神）との関係を保ち続けたことの意義について、見通しを述べたい。小松に隠居した三代利常は、「寛永諸家系図伝」において前田家が菅原姓であることを公式に主張し、五代綱紀はその流れを受けて北野社へ太刀を奉納することにより、天神との結びつきを強め、その慣習は歴代藩主に受け継がれた。そして、加賀藩領内の天神信仰は、家臣や領民を連歌会や御忌の祭祀に参画させることにより、個別の大名家の先祖という枠をこえ、前田家の家臣・領民をあげて祀る象徴的存在として広がっていった点に特徴がある。^⑤ こうした点をふまえると、前田家は盛大に天神御忌の行事を行うことにより、近世大名としての前田家の権威を高め、あるいは対外的に広めることを意図したものと思われるが、現時点では筆者の推測の域を出ないので、加賀藩領内における天神信仰の展開や前田家の由緒形成、他の大名家との比較などを通じて、検証する必要があると考えている。

註

（１）加賀前田家がいつから菅原道真（天神）を意識し、菅原姓を名乗っていたのかについてははっきりしないが、初めて明確に菅原姓であることを主張するのは、寛永十八年（一六四一）に江戸幕府が諸大名に提出させた系譜をもとに編纂した「寛永諸家系図伝」（完成は同二十年九月）においてである。

（２）現在の北野天満宮（京都市上京区馬喰町）。菅原道真を主祭神とする神社で、天暦元年（九四七）に北野の地に建立された。本稿では、歴史用語としては「北野社」の語を用いる。

（３）前田家の奉納太刀のうち、恒次・師光・助守の三振は図録『北野天満宮神宝展』（京都国立博物館・東京新聞、二〇〇一年）に図版掲載されている。前田家奉納太刀の史料紹介については、藤井讓治「歴史の一齣 前田綱紀奉納の太刀―青江恒次―」（『北野天満宮社報』第三四三号、二〇〇二年）、同「歴史の一齣 前田重熙奉納の太刀―備前師光―」（『北野天満宮社報』第三四六号、二〇〇二年）、同「天満宮 歴史の一齣 加賀前田家十六代前田利為奉納の太刀」（『北野天満宮社報』二十一号、二〇一九年）がある。

（４）現在の小松天満宮（小松市天神町）。明暦三年（一六五七）、三代利常によって小松城の鬼門に建立された社で、小松天神、梯天神とも呼ばれた。

（５）玉泉寺（時宗）に隣接して祀られていた天満宮（現在の泉野菅原神社）。玉泉寺は、元和三年（一六一七）に前田利長夫人の玉泉院（永）が、天神を祀っていた越中国の浄禪寺を勧請し、寛永六年（一六二九）に玉泉寺と改め玉泉院の位牌所とした。其阿南水比丘を開山とし、法楽のために月次連歌を催し、連歌料として毎年米十二石が寄進され、江戸時代には金沢を代表する天満宮の一つであった。

- (6) 「開帳旧記」(加越能文庫、一六・六一―二六〇)。例えば、寛延四年(一七五一)正月八日に小松梅林院が寺社奉行の多賀宇兵衛に提出した文書によると、元禄十五年の八〇〇年御忌の際には前年に前田家から連歌千句と灯明会を執行する旨が仰せ渡されたという。奉納連歌の巻頭は作代、巻二からは年寄衆の発句が収められ、人持衆もこれに加わった。
- (7) 田畑勉「加賀藩財政と産物方政策の動向」『加賀藩社会経済史の研究』(名著出版、一九八〇年)。

- (8) 黒川威人『金沢金工師 水野源六家史料 江戸期金沢工用職人の創造の原点』(橋本清文堂、一九九六年)によれば、元祖は摂州大坂の人で水野源次好栄という豊臣家の武士であったが、徳川の時代となり武士を捨てて京都で白銀師を志し、後藤光乗に入門、長乗にも師事した。慶長年間には二代利長の御用をつとめるようになったことをきっかけに五人扶持を頂戴して金沢へ移り住んだ(正保三年(一六四六)に屋敷地を拝領して以来、水野源六家は代々高岡町に居住した)。

初代源六は寛永元年(一六二四)に分家独立し、寛永年中に三代利常より五人扶持を賜り、白銀職御用を命じられた。年頭のお目見や参勤交代の見送り・出迎えに出ることを許され、武器の製作など数々の仕事を藩から受けている。後藤悦乗が江戸に帰る際、水野源六に白銀職頭取の役目を託したといわれ、信頼が厚かったことがうかがえる。北野社への奉納太刀製作には、三代源六多光(八五〇年御忌)、四代源六光政(九〇〇年御忌)、七代源六光和(九五〇年御忌)が関わっている。なお、水野家は(源次家・源六家ともに)、後藤理兵衛家とのつながりが強く、水野源次家由緒の初代の部分に「江戸表理兵衛弟子」とあり、源六家の古文書である「水野家文書」にも理兵衛家とのやりとりを伝える文書が含まれている。以下、加越能文庫の「先祖由緒并一類附帳」(金沢市立玉川図書館蔵、一六・三一―一六五)は「先祖由緒」と略す。

- (9) 目録は、黒川威人「加賀金工、水野家史料(二)―全史料見出し」『金沢美術工芸大学紀要 第四十号』金沢美術工芸大学、一九九六年)に掲載されている。これによれば、「水野家文書」の総点数は五八三点、内訳は「金工業職務関係」二二五点、「扶持・相続・訴願」一〇一点、「後藤勘兵衛関係書簡」二十四点、「後藤理兵衛関係書簡」七十六点、「絵形紋型図案」四十九点、「家事」六十五点、「趣味蔵書その他」四十三点である。関連する研究として、同「水野源六家と加賀金工(一)」『金沢美術工芸大学紀要 第三十五号』(金沢美術工芸大学、一九九一年)、同「幻のデザイン都市―白銀師・水野源六家の歩みを通して」『ホワツトイズ・金沢』前田印刷株式会社出版部、一九九二年)、同「水野源六家と金工(2)」『金沢美術工芸大学紀要 第三十七号』(金沢美術工芸大学、一九九三年)、同「加賀金工、水野源六家史料(二)―扶持相続訴願関係(1)」『金沢美術工芸大学紀要 第三十九号』金沢美術工芸大学、一九九五年)、黒川前掲書(註8)等がある。

- (10) 石津裕之「近世における神社伝奏に関する一考察―北野社を素材として―」『日本史研究』六三七号、二〇一五年)、同「近世僧位僧官の叙任経路に関する一考察―北野社を素材として―」『史林』第九九巻第五号、二〇一六年)、同「神社・門跡・社僧―宮寺としての近世北野社―」『日本史研究』六六六号、二〇一八年)。

- (11) 千葉拓真「加賀前田家における公家との交際―「通路」と家格をめぐる―」『論集きんせい』三三三号、二〇一〇年)、同「京都をめぐる加賀前田家の儀礼と交際―そのシステムの担い手を中心に―」『加賀藩研究』第一号、二〇一一年)、同「加賀藩京都藩邸に関する一考察―その成立と構造を中心に―」『東京大学日本史学研究室紀要』第十六号(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本史学研究室、二〇一二年)、同「加賀藩京都藩邸の構成員と機能―その職務規定と業務報告を通じて―」

『加賀藩研究』第三号、二〇一三年。

- (12) 千葉氏前掲論文「京都をめぐる加賀前田家の儀礼と交際」(註11)では、前田家が京都の紫野大徳寺芳春院と酬恩庵へ助力米を出した事例が紹介されている。前田家ゆかりの寺院への定期的助力と五十年に一度の先祖祭祀である天神御忌とでは性格が異なると考えるので、本稿ではこうした観点で前田家による太刀奉納について検討する。なお、前田家の先祖祭祀に関する研究として、谷口眞子「加賀藩における先祖祭祀と司法業務への影響―「行政」と「司法」の分離の芽生え―」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』二号、二〇一四年)がある。谷口氏は、加賀藩で歴代將軍や歴代加賀藩主とその正室の忌日には死刑・拷問・吟味が禁止されるという司法上の弊害を抑えるため、藩が忌日を整理していたことを明らかにされているが、分析の対象は藩祖利家の時代までであり、菅原道真(天神)の忌日については忌日一覧に示されているのみである。

- (13) 北野天満宮の史料調査では、当館館長藤井讓治、同学芸主幹北春千代の協力を得た。また、刀劍の取り扱い等については、日本美術刀剣保存協会石川県支部副支部長の小浦宗五郎氏にご指導を賜った。

- (14) 奉納太刀の柄の鯉口の部分に「金工／古市口謹作」とある。

- (15) 江戸時代の修造は、①寛文七年(二六六七)～同九年、②元禄十三(一七〇〇)～同十四年、③享保二十年(一七三五)～元文二年(一七三七)、④明和五年(一七六八)～同七年、⑤文化四年(一八〇七)～同九年、⑥嘉永五年(一八五二)の六回で、社殿の修造はおおむね五〇年おきに行われている(竹居明男「菅原道真と北野天満宮―「北野」の磁力」『北野天満宮信仰と名宝 天神さんの源流』京都文化博物館、二〇一九年)。なお、社殿の修造は幕府からの社領と援助、畿内五ヶ国を対象とした五十年間の勅化によって賄うことになっていた。

近世北野社の修造については『北野天満宮史料 遷宮記録一・二・三』(北野天満宮、二〇〇〇・二〇〇一・二〇〇三年)を参照。

- (16) 前田知頼は、禄五〇〇〇石の加賀藩士(人持組)。太刀奉納の三年後にあたる宝永二年(一七〇五)に若年寄、同四年に家老、享保元年(一七一六)に小松城代をつとめた。

- (17) 山本基庸は、通称源太郎・源右衛門。延宝五年(二六七七)、書物役を命じられ、元禄七年(二六九四)父の遺知一〇〇石を受け、正徳三年(二七一三)二〇〇石を領し、享保十年(二七二五)六十九歳で没した。

- (18) 近世の北野社は、曼殊院の支配下にあり、法体(僧形)の「祠官(松梅院・徳勝院・妙藏院)・「宮仕」・「目代」、西京に居住する俗体の「神人」によって構成されていた。このうち宮仕とは、神事をつとめ賽銭の支配をしていた人々で、宮仕の一藤である預は、北野社の別当であった曼殊院門跡より法橋の位に叙された。

これまでの研究では、近世にはおよそ三十家、七十人前後の宮仕家が北野社に奉仕していたとされている。「宮仕記録」寛文九年(二六六九)三月五日条『北野天満宮史料 宮仕記録』北野天満宮史料刊行会、一九八一年、二〇五頁、以下『宮仕記録』・『宮仕記録・続一』のように略す)によれば、松梅院を訪ねた宮仕衆中は六十人あまり(このときの衆中は九十三人であったが、病氣・外出・隙入などを理由に不参)であった。貞享三年(二六八六)に公儀の調査のために書き上げた宮仕衆中の家数は四十六軒、長屋(表裏あわせて)は三十軒、屋敷は二ヶ所であった。同五年(二六八八)七月の宗旨改では、家数四十八軒・惣人数二三人(うち法師が七十五人)、借屋敷の宮仕中の家数が二十四軒・惣人数六十一人(うち坊主七人)であったことなどが確認され(同、五二一～五二四頁)、北野社の宮仕の身分や宗旨、存在形態を詳細に知ることができる。また、享保四年(二七一九)八月十三日条によれば宮仕の家

数は公儀へ届け出た「宮仕中家数四拾九軒」から増減があつてはならな
いとされている(『宮仕記録・続六』二〇一四年、二〇五頁)。

- (19) 能順は三代利常に招かれ、加賀小松の梅林院の初代別当となった。小松
天満宮と能順については、『小松天満宮誌』(小松天満宮、一九八二年)、
『加賀 小松天満宮と梯川―小松天満宮専門調査報告書―』(小松天満宮
専門委員会、一九八六年)、『新修小松市史 資料編九 寺社』(石川県
小松市、二〇一〇年)、『新修小松市史 資料編十二 美術工芸』(小松市、
二〇一五年)、綿拔豊昭『小松天満宮と能順』(小松天満宮社務所、二〇
一六年)等の研究がある。

- (20) 承応二年(一六五三)の七五〇年御忌に際して代拝人が太刀を奉納した
ところ、雷鳴振動が起こるといふ奇瑞があり、八〇〇年御忌の際もやは
り雷鳴振動したという記述(『史料2』傍線部)があるが、七五〇年御
忌の奉納太刀は北野天満宮に現存しておらず、前田家側にも代拝人など
の詳細情報を伝える史料は確認できない。また、「加藩諸事雑記」(加越
能文庫一六・二八―七六)に「一、承應二年二月廿五日七百五十年祭御
代拝人姓名未詳、御奉納太刀銘等不知」とあるが、実際に太刀の奉納が
行われたかどうかは疑わしい。

- (21) 「後藤家旧記」(一六・六二―二四)所収の「先祖由緒書」(明治三年提
出)に、八〇〇年御忌にあたる元禄十五年(一七〇二)に後藤勘兵衛達
乗が金沢に召されたという記載があるが、その御用が北野社奉納太刀に
関するものであったかどうかは不明である。

- (22) 「宮仕記録」宝永三年(一七〇六)七月六日条『宮仕記録・続三』一九
九九年、三四九頁)に「一、松平加賀守殿奉納之御太刀拭二来也」とあ
り、実際に奉納太刀の拭いを行ったことが記されている。

- (23) 「大野木克寛日記」は、加賀藩士大野木家に伝わった大野木克寛(一六
五〇石、通称左膳、隼人、新蔵)の公務に関する日記で、享保元年(一

七一六)〜宝暦四年(一七五四)までの三十二冊が現存する。克寛は大
小将となった後、小松城番、奏者番を勤め、宝暦四年(一七五四)に没
した。

- (24) 竹田昌忠。表小将番頭のち大組頭(『諸士系譜 三』石川県、二〇一〇
年)。

- (25) 「政隣記」は、津田政隣(七百石)が天文七年(一五三八)から文化十
一年(一八一四)までの加賀藩の歴史を編年体にとめた記録(全三十
一冊)である。政隣は、治脩・斉広に仕えて、大小将番頭歩頭、町奉
行、大小将組、馬廻組、宗門奉行を歴任し、文化十一年に五十九歳で没
した。

- (26) 前田孝情は、前田対馬守家の五代孝行の弟孝和(知)の子。太刀奉納の
二年後の宝暦四年(一七五四)に小松御城番、同七年(一七五七)に御
留守居をつとめ、同十一年(一七六一)に三十四歳で没した。

- (27) 久田清左衛門篤敬(三百五十石)は、延享四年(一七四七)八月朔日に
組外表御納戸奉行から細工奉行に任せられ、宝暦四年(一七五四)五
月四日に組外御番頭となった(『諸頭系譜 上』金沢市立玉川図書館近
世史料館、二〇一三年)。

- (28) 平田家は、代々加賀藩の有職方(在京役人)をつとめた家。千葉氏が検
討された加賀藩の家督相続時における禁裏・仙洞への献上儀礼では、平
田内匠が目録以下の書付を作成している。また、加賀藩の有職方が江
戸・京都の二名体制だったことも明らかにされている。千葉拓真「近世
における武家領主の家督相続儀礼と朝廷―加賀藩前田家を中心に―」『東
京大学日本史学研究紀要 別冊「近世政治史論叢」』東京大学大学院
人文社会系研究科・文学部日本史学研究室、二〇一〇年。

- (29) 前田孝起は、前田利家の五男利孝(七日市藩祖)の流れの家に生まれ、
享保十年(一七二五)四月に定火消、延享五年(一七四八)に御近習御

- 用、寛延二年（一七四九）に御家老兼若年寄、同三年に年寄中加判となり、四〇〇〇石（うち一〇〇〇石は与力知）を賜った『諸士系譜 四』石川県、二〇一一年）。宝暦十三年（一七六三）、小松城代となり、明和六年（一七六九）に三役とも除かれた。なお、享保十四年（一七二九）五月に「御寺方御名代役」に任じられたという記述がある（先祖由緒、「前田兵部系図帳」（一六・三一―一九五））。
- (30) 江戸時代の武家の礼服で、絹地無文で裏のない狩衣『日本国語大辞典』小学館、一九九七年、初版は一九七五年）。
- (31) 菅原道真の薨去後に行われてきた式年祭。五十年毎に行われるものを「大萬燈祭」、二十五年毎に行われるものを「半萬燈祭」という。
- (32) この他、八五〇年御忌の太刀に関する史料として『加賀金工大鑑』（日本美術刀剣保存協会石川支部、一九八三年）の付録「北野天満宮御献納御太刀御絵形」（複製）がある。これは太刀の拵の図面で、享和元年（一八〇一）三月廿二日に輔師高良又之丞ほか五名が表御納戸方に提出したものである。しかし、原本の所在は今のところ不明である。
- (33) 『加賀藩御細工所の研究（一）』（金沢美術工芸大学美術工芸研究所、一九八九年）など。
- (34) 森田良郷（一七九〇―一八五七）が、祖盛昌の「漸得雜記」にならって、文政から安政四年迄に採録したもの。明治二十一年までの記事がある第三十一本以下は、良郷の子良見が増補したものとされる（『加越能文庫目録 上巻』（金沢市立図書館、一九七五年））。
- (35) 前田橘三恒友（二五〇〇石）は、のち才記孝弟と名乗った。享和二年六月十一日小松御城番、文化十三年（一八一六）御算用場奉行兼御預地方、文政二年（一八一九）に役を除かれた（『諸士系譜 四』石川県、二〇一一年）。また、「先祖由緒」には「（前略）享和元年三月御寺方御名代之儀被 仰渡相勤申候、聖廟九百年御忌二付、北野江之御使同年十月二月被 仰渡、同二年二月御国発足仕、右御「^虫」享和二年^虫□月罷帰申候（後略）」とある。
- (36) 北野社における太々百味の献上については、享保期の記録に多く見える。例えば、享保三年（一七一八）には宮仕能音の旦方による太々百味献上が北野社内内で問題となっている（「宮仕記録」享保三年六月二十五日条、『宮仕記録・続六』六五―六六頁）。ここで問題となっているのは、①旦方が講中を結び九十人余で掛銀を行っていることが奉加のようであること、②供物の菓子献上方法が古法と異なる上、水茶屋がこれを勧めること、③音楽などを交えて献上するなどの演出を加えること、である。太々百味は元禄十五年二月の天神御忌の時に三度献上されたが、このような「異形」の仕形で行った例はないので、「御神ノ御為」世間の取り沙汰よろしき様に行うよう、松梅院らによって吟味がなされている。新しい方法の導入を勧めたのは、下水茶屋の「なつきよ」という人物であったとされており、その背景には宮仕の勝手不如意という経済的な問題があった。天神御忌の太々百味献上の古法を改め、集客が見込めるような形に変える動きが北野社門前の水茶屋との交渉の中で生まれたという点は、近世北野社の性格を考える上で興味深い。以上のことから、太々百味は天神御忌という特別な行事で献上されたものであったが、享保期には神事の内容に改変を加えて一般の旦方向けの神事へと展開する動きがあったことが確認できる。
- (37) 九〇〇年御忌の当日、宮仕が早朝から太々を献上しようとしたところ、松梅院がこれに加わると言い出した。今回の神事を担当する宿坊（宮仕の乗成坊）の裁量で松梅院に参加を求めないことにしたが、松梅院以下祠官家の人々がこれまでの先例にならって拝殿で法事を始めたため、正面の机の上が供物で埋め尽くされ、宮仕衆中は太々献上の神事を行うことができなくなってしまった。法事が終わるのを待つのもどうかと思

い、宮仕衆中は一度下宿したという。九〇〇年御忌当日の一連のやりとりからは、北野社内の秩序の混乱、松梅院ら祠官家と宮仕衆中との一種の緊張関係がうかがえるのであるが、本題から逸れるので指摘するにとどめておく。

- (38) 例えば、「宮仕記録」正徳四年（二七一四）十一月十五日条に「一、菅家公家衆へ明年方年始相勤可申、扇子三本入一重くり台扇子三本物、勿論其外之付届無之者也」と見える『宮仕記録・続五』二〇一〇年、九五頁。高辻家をはじめとする菅家の公家は、北野社松梅院の僧位の執奏をつとめた（石津氏論文「近世における神社伝奏に関する一考察」、前掲註10）。公家にとつて執奏料は重要な収入であった。

- (39) 千葉氏論文「加賀藩前田家と公家との交際」、同「京都をめぐる加賀前田家の儀礼と交際」、いずれも前掲註11。なお、「松雲公採集遺編類纂」（一六、〇三一）の「系譜部」に五代綱紀が蔵書の内容について高辻家とやりとりした書簡の控が写されている。

- (40) 「自他国寺庵宝物并法談願旧記」（一六・六一―二五九）。安永四年（一七七五）、高辻家が天満宮の秘札（雷除けのお守り）を前田家の領国に広めるため、金沢の波着寺（真言宗触頭）から寺社奉行を通じて年寄衆の許可を得て、十四日間活動した。ところが、収入が少なく御社造宮の助成としては不十分であったため、さらに七日間の日延べを願い出たが、これは許されなかった。

- (41) 高良又之丞は輔師で、三人扶持または二人扶持を給され、下近江町に居住した。『稿本金沢市史 工芸編第一』（復刻版は名著出版、一九七三年、初版は金沢市、一九二五年）。以下、『市史・工芸編一』とする。

- (42) 『市史・工芸編一』二〇八頁の史料を以下に引用する（返り点、注は省略）が、出典は不明である。山崎次郎兵衛は、十一代治脩の近習をつとめた『諸士系譜 四』石川県、二〇一一年。

以手紙得御意候、各様弥御勇健被成、珍重之御事ニ候、然は来月八日役人禁詞神文見届被申渡候間、四ツ時方同半迄之内、御越候様致度候、是等之趣、私共方可得御意旨、次郎兵衛申付候間、如斯御座候、以上

午四月廿八日

山崎次郎兵衛内 高橋幸左衛門

高良又之丞様

輔師甚右衛門様

同 御子息様

鐘屋九郎次郎様

研師平兵衛様

同 御子息様

白銀屋甚助様

同 御子息様

柄巻屋吉□郎様

白銀屋長左衛門様

同 御子息様

外二白銀屋源六様

次第不同

- (43) 「真御太刀御金具金目勘定書」（「水野家文書」No.3）。

- (44) 駒井家は、小松に居住していた駒井小右衛門が、小松に隠居した三代利常の命を受けて刀装具を製作して以来、藩の御用をつとめた彫金職人の家。二代元甲甚助は、後藤久清に学び、勝木氏喜、のち後藤光晴に師事し、その技を磨いた。居住地は桶町であったという（『市史・工芸編一』）。

- (45) 順承（能作房）は北野社の宮仕であつたが、嘉永六年（一八五三）より十三年間小松梅林院の七代住職をつとめた。慶応二年（一八六六）に京都に戻り、明治十九年（一八八六）十月十七日に八十一歳で没した『加賀 小松天満宮と梯川』前掲註19。享和二年（一八〇二）の天神九〇〇年御忌の年には、まだ順承は生まれていないので、後に順承が木箱に書き入れたものであろうか。
- (46) 前田孝連（監物）は、前田利家の五男利孝（七日市藩祖）の流れの家に生まれ、文政十年（一八二七）に幼少につき半知千石を賜り、同十二年に残知あわせて三〇〇〇石（うち一〇〇〇石は与力知）を賜った『諸士系譜 四』石川県、二〇一一年。天保六年（一八三五）から嘉永三年（一八五〇）までは、小松城番をつとめた『諸頭系譜』上。
- (47) 「旧藩御用太刀図面」（「水野源六家資料」、金沢美術工芸大学蔵）。右上に「嘉永三年六月十四日被為仰付候」、左下に「備前助守御太刀御身正写図也」とあることから、本図が嘉永五年の九五〇年御忌の太刀奉納のために製作された図面であることが知られる。本図には、刀身のほか、鐙や大切羽、鐔、切羽、革先金具、猿手、責金具といった金具の押型がおさめられている。
- (48) 江戸時代に前田家が北野社に奉納した太刀のうち、助守以外の太刀の切羽は両面とも金の色付がなされているが、助守の切羽は片面だけに色付が施されている。藩の表納戸奉行と職人との費用に関するやりとりから、藩が製作費用を抑えようとしていたことがうかがえるので、財政的な理由により色付がなされなかった可能性もあるが、その理由は定かでない。
- (49) 「御太刀御身預人々書上」（「水野家文書」No.17）。以下、翻刻を掲載する。

一、御太刀御身御預人々
友

五月十一日方
高尾太右衛門

同月廿九日迄

六月朔日方
高良政之丞

同十五日迄

六月十六日方
高尾甚左衛門

同廿九日迄

七月朔日方
水野源六

同月十五日迄

七月十六日方
高尾太右衛門

同晦日迄

八月朔日方
高良政之丞

同十五日迄

八月十六日方
高尾甚左衛門

同廿九日迄

九月朔日方
水野源六

同月十五日迄

九月十六日 同晦日迄	高尾太右衛門
十月朔日 同十五日迄	高良政之丞
十月十六日 同廿九日迄	高尾甚左衛門
十一月朔日 同月十五日迄	水野源六
十一月十六日 同晦日迄	高尾太右衛門
十二月朔日 同十五日迄	高良政之丞
十二月十六日 同廿九日迄	高尾甚左衛門
子 正月朔日 同十五日迄	水野源六
正月十六日	高尾太右衛門

同晦日迄
以上
右之通り操々仕御預り申候、
此段御達シ奉申上候、以上

亥
五月
高尾太右衛門
高良政之丞
高尾甚左衛門
水野源六

表御納戸

(50) 太刀に付属する極書について、恒次は元禄十五年(一七〇二)正月三日付・代金子十枚、清則は享和二年(一八〇二)正月三日付・代金子十枚、助守は明和八年(一七七二)六月三日付・代金子十五枚である。

(51) 田中喜男『金沢金工の系譜と変容』(国際連合大学、一九八〇年)。田中氏によれば、文政十三年(一八三〇)八月、後藤七兵衛清恒は京都の後藤東乘に起請文を提出し、①加賀後藤の代替わりごとに上・下後藤家に後藤姓の許可願を提出すること、②上・下後藤家、その門弟に対し後藤姓は名乗らない(後藤姓は藩領のみで用いる)、③分家や弟子には後藤姓を遣わさない、④上・下後藤家伝統の「光」「乗」は号・実名ともに使用しない、⑤加賀後藤では家紋として瓜のなかに唐花紋を用いているのでお届けする、⑥上・下後藤家が来沢の際は、接待はすべて加賀後藤がとり行う、⑦上・下後藤家の仕法・彫物は勝手に使用しない、という七ヶ条の約束を交わしている。

(52) 「天満宮宝剣箱書文字・折紙題箋等写」(一六・六一―二〇一)。全七点のうち、「天満宮寶劍備前國清則作 一鞘」、「享和二年歲次壬戌春二月二十五日 奉納／參議正四位下行左近衛權中將兼加賀守菅原朝臣治脩」、「備前國清則折紙」、「天満宮寶劍」、「天満宮寶劍備前國助守作 一鞘」、「嘉永五年歲次壬子春二月二十五日 奉納／參議從三位行左近衛權中將兼加賀守菅原朝臣齊泰」の六点は天神御忌に際して作られたものである。残りの一点は五三桐と梅鉢の紋が螺鈿や高時絵で表現された薙刀の柄と鞘の図であるが、北野社への奉納品であるかどうかは不明である。

(53) 五十嵐家は、寛永年間に三代利常が京都の五十嵐道甫(忠三郎)を招いて以来、加賀前田家の御用時絵師をつとめた『市史・工芸編一』。長左衛門(祐甫)は、明治期の系譜「五十嵐家系」(一六・六二―一五)によれば、藩の時絵御用をつとめた人物で、嘉永五年十二月二十八日に町会所より毎年十五貫文充頂戴し、慶応三年(一八六七)七月には一人扶持を加増された。嘉永四年、表納戸より命じられた「北野へ御献納之御太刀御用」をつとめ、銀五両を拝領し、同年十二月二十八日には銀三枚を拝領した。この他、慶応二年に螺鈿御太刀御用をつとめた際には銀三両を拝領し、明治十年(一八七七)十一月に没した。与右衛門も五十嵐派の職人と考えられるが、詳細は未詳である。

(54) 「北野天満宮御宝剣御箱等御図り書」(一六・六一―二〇〇)。五十嵐長左衛門と時絵師与右衛門が、太刀の鞘・太刀箱・中箱・折紙箱の製作および文字の仕上げにかかる費用、製作に必要な金の目形(重さ)について、仕様を明記しながら藩の表納戸方へ報告したものである。

(55) 享保五年(一七二〇)、五代綱紀が上京することを伝える記事に、前田家の宿坊能作の使である能的から「北野社中より前田家への祝儀は無用」との申し入れがあったことが確認できる。これを受け、宮仕衆中は「定而菅家之儀ニ候故、北野方祝儀ニ出向候儀も可有やと為心得申参候や

らん、其訳不知候、先年ケ様ニ格式も無之事ニ候故何も相談之上其通り仕置也」という対応を取っている。宮仕衆中は、前田家に祝儀に赴いた例がないので、相談の上、祝儀に出向かないことに決めたが、この頃には北野社が前田家を菅家として認識していたことがわかる。「宮仕記録」享保五年四月四日条『宮仕記録・続六』二七六頁。

(56) 加賀前田家の天神信仰についての研究として小倉学「加賀藩主前田家の天神信仰の一考察」『石川郷土史学会々誌』第十八号、一九八五年、江戸時代の金沢における天神信仰を概観したものとして「天満宮の諸相」(『金沢市史 資料編13 神社』金沢市、一九九六年)がある。かつて筆者も小松梅林院の金沢出開帳について調査し、その盛況ぶりと信仰の広がりについて紹介したことがある(石川県立歴史博物館平成二十八年年度秋季特別展・展示図録『城下町金沢は大にぎわい!』石川県立歴史博物館、二〇一六年)。

(付記)

本稿は、当館の平成三十一(二〇一九)年度秋季特別展「加賀前田家と北野天満宮」にかかる調査の過程で明らかになったことをまとめたものである。貴重な史料の調査をお許しくださった北野天満宮、小松天満宮、金沢市立玉川図書館近世史料館、金沢美術工芸大学美術工芸研究所の職員の皆様、水野旺氏に心よりお礼申し上げます。

加賀藩領内の廻船問屋と「北前船」北ルートの研究

濱 岡 伸 也

はじめに

「北前船」というと、どうしても大坂―蝦夷地を結ぶというイメージが強く、廻船問屋の船はすべてそのルートに就航していると考えられがちである。しかし、実際には持ち船ごとに航行ルート、経営形態、母港などが細かく設定されており、すべてが同じ動きをしているわけではない。また、船籍についても、なんとなく北国籍をはじめとする日本海側の諸国というイメージに引きずられているが、客船帳を見れば、その訪問は全国各地からとなっている。そうした船はどこで冬囲いを行っていたのか？大坂はもちろんであるが、郷里をはじめ、越後新潟、出羽酒田、羽後秋田など、東北地域の日本海側に多く見られている。こうした様子は、実際の資料にあたることでようやく浮か

び上がってくる。

筆者は、歴史博物館が所蔵する「加藤家文書」の分析から「加賀藩産物方御用船 威徳丸の「航跡」¹⁾」を示し、加州本吉の廻船問屋加登屋が持ち船の一部を羽州酒田に置き、東北から北海道さらには江戸へと乗り回している資料を紹介した。本論では、この視点から「宮林家文書」に含まれる廻船資料を紹介し、廻船問屋が持ち船をどのような形で運用し、交易活動を行っていたのかを描き出してみたい。その結果が、これまでの「北前船」研究と相まって、廻船の果たした役割がオーバーラップし、停滞気味の研究が活性化することを目指している。

一、越中放生津綿屋彦九郎の蝦夷地交易

歴史博物館では、大鋸コレクションに含まれている古文書についてまとめたものから古文書目録を発行してきた。その中に、『大鋸コレクション 古文書目録（一） 宮林家文書目録』²がある。綿屋を名乗った宮林家は、もとは砺波郡にあつてわら製品の綱や網を販売していたが、その縁で一八世紀初頭には放生津に引越し、網元に成長したという。同時に、土地の集積も多くなり、定置網の網元で大土地所有者であり、町役人や新田裁許、算用聞役などの任につく傍ら、廻船業にも参入して幕末期には越中を代表する廻船問屋に成長していた。

天保一二年（一八四一）、綿屋は、高岡町の井林屋伊左衛門から七五〇石積の弁才船を買い入れた。³綿屋が積極的に廻船業に参画する資料は、宮林家文書の中ではこれが最初である。また、この時、放生津の卯尾屋栄蔵も四八〇石積の弁才船を三日曾根村の善右衛門に売却しており、綿屋はほどなくこの弁才船も入手したようである。⁴そこから積極的に廻船業に参入した。四八〇石積の恵吉丸が持ち船として運用されており、七五〇石積の買入船は神速丸と考えられる。綿屋は、この恵吉丸や神速丸を運用して廻船業に参入していた。

幕末の神速丸の動きがわかっている。万延元年（一八六〇）五月二六日には越中伏木を出帆し、二九日には能登小木へ。そこから越中放生津を経て、佐渡小木へと到着した。さらに、津輕深浦へと向かい、六月五日に到着している。同一二日は金ヶ沢に行き、七月二日に松前

に到着した。また、七月二五日には出羽飛嶋に着き、改めて江差や松前の相場について問い合わせを行っている。その後、一〇月に入つて、佐渡二見から能登七尾を経て、一〇二八日に放生津へと戻ったことが見えている。⁵

さらに、翌文久元年（一八六三）とみられる二通の書状は、前章の加州本吉湊の加登屋利兵衛の活動と合わせ、幕末期の北国廻船問屋の交易の実態を物語る資料と考えられる。

まず、八月一三日付、神速丸船頭彦次郎から旦那様（綿屋彦九郎）宛の書状である。⁶

「（端裏書）

酉八月十三日

・
・
・
・

濱屋善右衛門殿便り二付

一筆啓上仕候秋冷相催候所

先以其御地

御家内様

珍重御義と奉存候次二私船中

無事二而罷在折申候乍憚御休意

思召可被下候先月廿日吉岡湊へ

入船仕候而諸方聞合候得者箱

立方割合宜敷相場相聞得

申候二付廿三日箱館罷下り候得者

下り船一度二入船在之荷物不足
二而直段高直二相成り就夫箱立
晦日二仕立仕候而当地へ当朔日
罷出直様買附仕候唐太粕
ト印廿壹貫三百匁替ホ印廿壹貫
六百目替二而半分手当仕候尤
上方届ケト印三拾七匁ホ印卅六匁
乗二御座候残荷物右割合二而
宿元二而手当仕候当分船玉
箱立方廻り日和無之二付漸々
昨十二日二当地へ相廻り直様荷
物積入可仕候為其廿日頃二手仕
舞仕度等奉存候尚又慥成義
重便二可被上候
一、先月廿三日当地午未風之
大地他二而破船拾六艘痛メ船
式拾艘斗御座候其後当四日
夜中頃方五日暮迄大地他二而
八艘破船二相成り痛メ船十七八艘
在之場所并地方辺二も多分
難船御座候誠二気毒二奉存候尤
越中建稲積屋伊右衛門船当地二而

破船渡辺屋八三郎船同断江差
二而も湊屋長九郎破船外船々
拾七八艘并痛メ船式拾艘斗
御座候様申来候桶屋徳左衛門義
南部ヲコツヘイ濱二而破船之様子
相聞得申候誠二気毒二御座候
当地居合船繰合与三右衛門綱取
二式拾壹両而雇人ヲ以様々相請
湊屋八三郎同断橋舟破船外船二
綱取二百式拾両迄二相雇人ヲ以
取凌可申候誠二近年珍敷大風
二御座候越中二場所登船多分
御座候得共未タ相訳り不申候
一、神楽丸義江差表罷下り
之様子相聞得申候得者何之事も
相しれ不申為其手仕舞二而地他
後二上方へ罷登り相察可申候
一、大乗丸義箱立入船様子相
聞得申候越後方米少々積
下り之趣聞及候
一、福重丸義も大体江差表へ
罷下り所相察申候得共相訳り

不申尚又湊々委敷事重便

ニ可申上候先二右申上度如此

御座候已上

西 神速丸

八月十三日 彦次郎(印)

御旦那様

一

神速丸の動きと、直前にあった大風の被害状況、綿屋持ち船の動向などが報告されている。神速丸は、七月二〇日に箱館の東に位置する吉岡湊へ入津した。そこで、箱館の相場がよくなっていると聞き、二三日に吉岡湊を出帆して箱館に移った。ところが、そのニュースが広まって、箱館には下り船が多く集まって荷物不足の状況となっていたため、七月晦日に箱館を出帆し、八月朔日松前に移動した。松前で、二種類の唐太粕を購入することとなった。「ト印」が二一貫三〇〇匁替え、「ホ印」が二二貫六〇〇匁替えとなり、半分は自ら買い入れた。そのうち、上方回漕分は「ト印」三七匁増し、「ホ印」三六匁増しで買い付けた。残りの分は、同等の相場で松前の宿元が買い入れた、と報告している。これが、買い積みと運賃積みの混載と考えられるが、詳細は語られていない。この買い入れに従い、箱館から船玉を廻送して積み込みしようとしたが、天候が悪くて延期され、昨一二日ようやく到着した。これから積み込みを始めるので、二〇日ころに完了する見込みであると伝えている。また、綿屋所有の神楽丸は、江差へ向かったが詳細がわからない。無事であれば上方へ向かうと思われる、

とする。大乘丸は、箱館に入津している。越後から少々の米を運んできたと聞いている、とする。福重丸は、江差へ向かったと思われるがわからない、と伝えた。このころ、七月二三日には松前周辺で南寄りの大風が吹き、破船一六艘・被害船二〇艘余という大きな被害があった。また、八月四日から五日未明にかけて再び大風が吹き、松前では破船八艘・被害船一七〇一八艘を数えた。同郷(越中?) 船の被害は、松前で稲積屋伊右衛門船と渡辺屋八三郎船が破船した。江差でも破船一七〇一八艘・被害船二〇艘余を数え、湊屋長九郎船が破損。南部ヲコツヘイ浜で桶屋徳左衛門船が破船したと伝えている。持ち船が活動しているこの時期に北海道西南部地域で台風と思われる大風の被害が大きかったので、綿屋の主人・彦九郎にわかる限りの情報をもたらしただけであった。

この後、神速丸は大坂へ航海し、船頭彦次郎から主人・彦九郎と善右衛門(親族か?)に宛てた書状が一一月六日付で出されている。^⑦

〔端裏書〕

酉十一月六日

.....

一筆啓上仕候向寒之節二

御座候処先以其御地

御家内様御雪徳可被遊御座

喜悦至極二奉賀候随而私船中

無異変罷在居申候乍憚御休意

思召可被下候殊二積登荷物

兵庫二而先月廿七日売払左二

リイシリ粕 四拾八匁七分

ハヽモツヘ 四拾七匁七分

唐太分

ソヲヤ 四拾八匁

右之直段二而売払仕候就而ハ

利合三百拾六両斗御座候

且又船玉之義ハ一昨日当地ヘ

相廻り折申候為其一兩日中二

巻揚次第手仕舞二而帰国

仕度候間此段御承引可被下候

一、^ハ粕直段先達而三貫九百

七八十匁

方三五拾迄二少々取様御座候

此之節兵庫表二滞船

仕候ニ付買入不仕候当時相場

三貫九百匁位之申建候得とも

操々商内無御座候為其にも

御差直段出来仕候得者御差

図丈ケ之^ハ粕買入申度候

一、松前物当時之処兵庫

表并当地も松前物一統二

高直どれ二而商内無御座候

兵庫表私渋屋八三二郎殿等

商内談五分方直下ケ二而直入

可致候様相聞得居申候扱又

当地ハ一切直入不仕候就而ハ

大乘丸積来之元揃昆布

も未タ直入無御座候為其近日

直入御座候得者誰々古働キ

之上売払申度候尚又重便

しゆ之様子可申上候

一、米之儀兵庫表一兩日前方

少々気配ニ立直り越後新米

百拾六匁位柴田古米二而

百三拾五匁之取極相聞得申候

左候得共当用口二而式三百石

しゆニ御座候為其瀬戸内

新米之登り切候間二御座候

様子二相聞得折申候

一、江戸表先月廿六日来状

四斗八九斗等本来之高文

御勘考之上御取引可被下候

追々相きまり義可申上候

一、金子御地へ持参候様御

申越被下承知仕候就夫御地

為替相尋候得共慥成候為替

無之候二付為其帰国之節

船中一同持参可仕候是又

御承引可被下候先ハ問一札

御案内申上度候頓首以上

神速丸

十一月六日 彦次郎

御旦那様

善右衛門様

—

先の書状で八月二〇日頃に積み込みが完了したとすると、その後出帆し、どこをたどったかは不明であるが、一〇月二七日には兵庫に入津している。そこで、リイシリ（利尻）粕を四八匁七分替え、ハゝモツへ粕を四七匁七分替え、ソフヤ（宗谷）粕を四八匁七分替え、ハゝモツへ払い、三一六匁の儲けを得たとする。その後、大坂へ向かい一二月四日に入津した。兵庫も大坂も高直が続き売り捌くのが困難である。兵庫では渋屋八三二郎が値下げに応じてくれたため、商売が成立したが、大坂では成立しなかった。大乗丸が積んできた昆布も同様であったが、近日中には捌ける見込みも出てきたという。自分たちは、今日・明日（六日・七日）中には冬囲いの準備を終え帰国したいと記し

ている。

神速丸の彦次郎は、その名乗りから綿屋一族と考えられ、主人・彦九郎の下、綿屋の廻船のまとめ役として直乗りをしていたとみられる。先の書状の冒頭に記されている「濱屋善右衛門」は、二通目の宛名に連なる「善右衛門」と同一とみられ、綿屋の廻船業に関わる商人と考えられるが、詳細は分からない。

もう一艘の恵吉丸（船頭甚吉）は、津軽深浦を拠点に、綿屋の北方交易の実務を担っていた。明治三年（一八七〇）には津軽藩・津軽商社の仕事を受けて北海道へ行き、津軽商社が管理する各地場所から海産物を津軽や大坂へ輸送している。明治三年四月、津軽深浦を拠点としている綿屋の恵吉丸・船頭甚吉は、深浦の越後屋喜兵衛を問屋、中田屋発藏を仲立ちとして、弘前の津軽商社（野村常三郎・武田熊吉・今村九左衛門）と輸送の契約を結んだ。⁽⁸⁾

「 売約定証文之事

一、増毛場所荷物 三百石目

此鋪金九百両

右ハ於爰元ニ取組前書之金子慥ニ受取申候
通船次第荷物相渡可申候若荷物不都合節ハ
長谷川与兵衛支配場所方都合相渡可申定
尤直段之儀ハ城下立相庭ヲ以残深浦鰯
ヶ軽両所ニ於受取可申定
一、自然場所不漁ニ而空船登り申候節ハ外船

手振合を以江差出張野村常三郎方相渡
可申定

一、風合と寄候而茂深浦鰯ヶ軽江不寄場所方
直登り致候節ハ為違約金帆用春運賃
之上残金割増ニ而受取可申定

一、帆用之儀ハ是迄之振合も有之候得者諸
事御改革今ニ何ニ茂治定無之ニ付て定
之処ニ而萬事外船の並合ヲ以取下物候定
右之通約定致候処相違無之候萬々一
海上有之節ハ荷郵敷金損之定為念
一札如件

明治三庚午 野村常三郎印
武田熊吉印

四月 今村九左衛門印

越中放生津恵吉丸
綿屋甚吉殿

問屋 越後屋喜兵衛殿

仲立 中田屋発藏殿

積送状之事

一、鯡ノ粕 貳百廿七本

此惣目形

六千七百七貫貳百目

石数

百六拾七石六斗九升五合

一、数乃子粕 貳拾本

此惣目

五百八拾貫目

石数

拾四石五斗

ノ百八拾貳石壹斗九升九合

右之通恵吉丸甚吉船江為積登指
送り申候間其表着岸次第相改御請
可被成候仍而送状如件

利尻郡

明治三庚午年 津輕商社出張所

七月廿日 大橋弥兵衛印

恵吉丸

甚吉殿

前書之通積登り候ニ付其御表着岸
次第改御受取指引決算可被成下候以上
小樽内出張

八月十一日 金澤英助印

今村九左衛門殿

武田熊吉殿

為替手形之事

一、金貳百両也

右ハ越中放生津恵吉丸甚吉船江於利

尻表ニ金三百五拾兩為替取組候内於小樽

内二百五拾兩相渡殘金書面之通此手形

を以請取向次第無相違御渡可被下候為

替手形仍如件

小樽内出張

明治三庚午年 金澤英助印

八月十一日

今村九左衛門殿

武田熊吉殿

税金目録

高百貳拾本

目形三千三百六拾匁

一、鰯鱈粕九拾六本

目形貳千六百八拾六本

此石六拾七石貳斗

百石ニ付永貳拾貳貫文

税永拾四貫七百八拾四文

高貳百四拾九本

目形六千九百七拾貳貫目

一、鰯鱈粕百九拾九本貳分

目形五千五百七拾七貫六百目

此石百三拾九石四斗四升

百石ニ付永貳拾七貫文

此税永三拾七貫六百四拾文八分

追斷

高貳拾九本五分

目形八百拾三貫四百匁

一、鰯鱈粕貳拾三本貳分四厘

目形六百五拾貫七百拾匁

此石拾六石貳斗六升八合

百石ニ付貳拾七貫文

此税永四貫三百九拾文

三分六厘

税ノ五拾六貫八百拾五文

壹分六厘

此金五拾六兩三分壹朱

永拾貳文六分三厘

右之通別紙差引ニ入受取此表相済

申候以上

手宮

八月七日 問屋会所

恵吉丸甚吉殿

差引

一、五両貳分貳朱 五人乗利尻行

永拾五文 石役

一、貳両壹分 入掛物

永五十文 目録表

一、五拾六両壹分壹朱 税金

永拾貳文六分六厘 目録之表

一、三拾四両三分 出掛物

永拾七文三分九厘 目録之表

一、五両貳分貳朱 当湊出帆

永拾五文 石役

百五両貳朱

永四拾七文五分壹厘

内

九両壹分三朱 受取

永三拾六文五分

指引而

九拾五両貳分三朱

永拾壹文壹分壹厘

右之通御座候以上

午

八月七日 問屋会所印

恵吉丸甚殿

(吉 脱)

掛物目録

一、鯨鰯粕 九拾六本

目形貳千六百八拾八貫目

直段拾六貫五百文

代貳千百拾貳貫文

一、鯨粕百九拾九本貳分

目形

五千五百七拾七貫六百目

直段拾九貫四百五拾文

代五千百六拾五貫九百貫文

追断

同 貳拾三本貳分四厘

目形

六百五拾貫七百拾文

直段拾九貫四百五拾文

代六百貳貫六百九拾壹文

代百七千八百八拾貫六百拾壹文

此掛り物

一、貳百三拾六貫

右口銭

四百拾八文

三分

此金 三拾四両三分

永拾七文三分五厘

右之通別紙差引ニ入此表相渡申候以上

八月七日

問屋会所印

恵吉丸甚吉殿

覚

一、恵吉丸甚吉様行金札貳拾両慥ニ

受取預り置申候間相届可被下候以上

午九月三日

越後屋

庄兵衛

神速丸

又次郎様

津軽商社が管理する利尻郡増毛場所から「荷物三〇〇石」を津軽や

大坂へ輸送するもので、敷金として九〇〇両を前払いした。弘前商社では、「漁の良・不良により不足が生じた場合には長谷川与兵衛支配の場所から補填し、差額が生じた場合は深浦と鰺ヶ沢で調整する。どうしても空船となった場合は江差にいる野村から返金させる。風の都合といつても、深浦と鰺ヶ沢を素通りした登り船は違約金を取る。荷主の旗などは近年の例に倣い不要とする。」など細かな取り決めを行

い、「海の都合で損害が生じた場合は保証しない」とした。この契約によって、越中の廻船問屋綿屋は、津軽商社の仕事を受け、同社が北海道で所有している増毛「場所」から、鰺ヶ粕や数の子粕を積み入れ、小樽内を経由して、津軽や大坂へ輸送した。一旦、恵吉丸甚吉が買い取りのような形で代金を入れ（着手金、保証金のようなもの）、深浦に入津すると越後屋庄兵衛の仲介で津軽商社が買い取る形で取引が成立していたようである。津軽商社からは、商品代のほか小樽の手宮問屋会所（明治四年には手宮海官所となる）に先行して支払われた各種税金や運賃も支払われた。この手宮問屋会所が北海道から積み出される「荷物」（おもに海産物・海産加工品）の管理を目的とした各種税金などの徴収に加え、販売先などの管理も行っていた。明治三年の恵吉丸は、荷物積み込みのため津軽から利尻に向け北上した時は五人乗りで許可を得ていた。⁹ところが、荷物を積んで南下した際、手宮では水主三人が増員され、八人乗りとして大坂行きの許可が下りていく。¹⁰

明治四年の場合にも、手宮海官所の出津許可証には、増毛場所から積出した鰺ヶ粕などを大坂へ輸送することが記されている。¹¹

このように、越中の廻船問屋である綿屋は、津軽の問屋を介して、津軽のみならず北海道との交易に関わり、北国から運んだ米やわら製品などの販売と、木材や海産物の買入や委託輸送などを行っていたのである。

二、建築用材の確保と領内米の販売、海産物の輸送

北国、特に加賀藩領内では建築資材としての良質・大量の木材や鉄、鉛、銅などの金属を南部や津軽に求めてきた。その輸送手段として船は不可欠のものであり、早くから自国の廻船問屋による輸送や積み荷となる商品の確実・安定的な調達が求められてきた。それは、廻船がオンシーズンとなる三月下旬から一月初旬に集中して行われるため、船の効率的な運用が必要であつた。加賀藩領内と、大坂、津軽・出羽を区分けし、持ち船をそれぞれの地域で冬囲いしていたのである。これにより、各地の船宿との関係を築くことができ、荷捌きの情報や売買取引の円滑・迅速化が図られた。この方式は加賀藩領内に限らず、他所の廻船問屋でも確認される。さらに、この方法を後押ししたのが日本海側を治める幕藩領主たちであつた。とくに北国から東北にかけての地域は、早くから米どころとして良質の米が多く収穫できる地域として知られていたが、米の収穫が行われ年貢皆済が終わるところには、廻船がオフシーズンとなり、大坂回漕はもろろん、領外への輸送も不可能となっていた。加賀藩では年貢米が蔵入りとなると「蔵締り」と称して米の売買輸送を制限し、翌春彼岸を過ぎて廻船がオンシーズンになった時に「蔵解き」と称して解禁していた。ところが、米の売却が行われなければ藩や藩士が現金を手にすることはできない。そこで藩は廻船問屋を中心に米の買い取りをしてくれる商人を捜す。一定量の蔵入米を大坂へ輸送して売却することとし、大坂相場

で見積もりして現金化し、輸送費を支払うという契約で、年内の現金化を求めるものであつた。これは、商人からしたら保証のない貸付けであり、大坂相場が翌春の「蔵解き」以降に保証されているものではないことや、輸送旅程での海難などのリスクの読み合いを盾に妥結金額の交渉を行っている¹²⁾。これは、大坂廻米という名の「買取」であり、廻船問屋の場合は、藩と交渉する一方でより高値で売り捌くことができる地域・湊を模索していた¹³⁾。

こうした条件が重なり、寒冷地で稲作があまり盛んではない北日本への米の輸送と副次的なわら製品の持ち出しが注目され、その帰り便で木材や金属材料、金肥を持ち帰った。廻船が盛んになると一往復では効率が悪く需要に追いつかないなどから、下りと登りを同時に行う現地定繋の廻船が不可欠となったものと考えられる。

一九世紀に入ると蝦夷地や北日本を中心に、各地の沿岸部にまで外国船の出現が多くなり、漁業でのトラブルも増えてきた。幕府も対策に乗り出し、箱館を直轄化するとともに蝦夷地の西海岸に砲台や監視の役所を設けることとし、津軽藩や秋田藩などに命じた。その結果、蝦夷地交易の拠点となる「場所」の管理をしてきた松前藩の領域が狭められ、箱館奉行所が東部や南部を統括し、小樽以北では津軽藩の管理場所も広くなった。こうした時代背景も¹⁴⁾北国の廻船問屋を後押しした。定繋地とした出羽酒田や津軽深浦を中心に、国元の船が運んでくる荷物の売り捌きや、戻りの積み荷の確保、蝦夷地や東北から瀬戸内を経て大坂までの輸送、蝦夷地からの海産物を江戸へ輸送など、さま

ざまな関係を築きながら、国元の本店を拠点に幅広い廻船事業を展開していたことがわかる。もちろん大坂への登り荷については売買のシステムが完備されているため、細かな書類を必要とせず、仕切書のみで十分だったのかもしれない。それに比べて北方での取引はシステム自体が構築されておらず、契約ごとの相対的な状況だったためか、具体的な状況を記した資料が多く残されている。

一 買仕切

一、鯡^ベ粕 貳百廿七本

此目形 六千七百七貫八百目

此石数 百六拾七石

六斗九升五合

五百五十五両かへ

代 九百三拾兩分

永七拾匁七分式厘

一、数の子粕 貳拾本

此目形 五百八拾貫目

此石数 拾四石五斗

四百三十両かへ

代 六拾貳兩

永三拾五匁

合金

^ベ九百九拾三兩

永五匁七分式厘

外者

一、三拾九兩分

右口錢

永七十式匁

并仲立ス九

二分式厘

とも四分

惣^ベ千三拾貳兩分

永七拾七匁

九分四厘

右之通代金当ニ引受

此表出入無御座候以上

未七月廿九日

越後屋

庄兵衛(印)

綿屋甚吉殿

これは翌年の仕切書であるが、これのみであれば、越後屋が綿屋から買い入れをしたということ以外読み取るのは難しい。商品が鯡^ベ粕や数の子粕であることから、綿屋甚吉が北海道で仕入れた商品を、南下する途次、津軽深浦(庄兵衛の下にある印から読める)で売り捌いたと推察するくらいである。ところが実際には右で確認してきたように、津軽までの輸送に加えて、大坂までの輸送も委託されていること、北海道取引の複雑さの一端を示す格好の資料であることがわかってきた。

こうした長年の交易によるノウハウの蓄積と、現地に入り込んで得た信頼が、同時期から盛んとなる北海道移民の入植と、それぞれの地を繋ぎながら輸送業や漁業に転化して成功を収めた明治期の廻船問屋へと受け継がれた感がある。

その傾向は、先に示した別稿¹⁶⁾における加州本吉の加登屋における次男甚兵衛の活動と同様であった。

結びにかえて

ここまで資料を挙げてみてきたことは、これまでの「北前船」という一般的な概説では、見過ごしてしまうような出来事であったかもしれない。しかし、領内の米の消費地を確保し廻船経営の安定化を目指す加賀藩領内の船持ちたちは、北日本の各地に拠点を置き、地元との関係を円滑にして、販路の拡大や輸送業務の確保に努めた。実際には持ち船の一部を新潟、酒田、秋田、深浦など、日本海側の拠点湊に置き、各湊の船宿らと業務提携を結んで、参加していった。¹⁷⁾

この比率がどういったものかは現時点で示すことができない。しかし、別稿および本論で取り上げた二例は、いずれも船主の息子や兄弟が着任しており、廻船問屋の事業として重要視されていたものと想像される。そうした事例の積み上げによって、一九世紀における廻船の実働を描き、船籍（北国籍か否かといったこと）や経営形態（買い積みか運賃積みかなど）、航路（西回り航路、大坂と蝦夷地を一往復な

ど）に規制されることなく読み込んで行くことが重要となる。いま、北日本から蝦夷地へ行き、その後江戸、あるいは国元（北国）、国元を経て大坂へなどのように、いったん蝦夷地へ向かった後、各地に向かうルートを「北ルート」とし、拾い出せた船宿とみられる商人名を図示したものを示しておく。資料探査の道しるべとして利用され、資料の蓄積が進んでいくことを期待している。

〔追記〕

年貢米が藩の御蔵や商人たちの町蔵に収まる十二月、「蔵縮り」と称して封印され、現米は動かせなくなる。その時から蔵米の売却について、藩と商人たちが交渉を重ねる。秋に大坂米市場が公表した米相場を基準としている。交渉では、運賃までが議論されるが、この段階で現米が動くことは無い。¹⁸⁾ この行為を「大坂廻米」とする。この時期から実際に廻船が動き出す三月彼岸過ぎまで、領内の蔵宿や米仲買は、手持ちの米切手の交換をしながら、高直で取引される地域米や輸送費の負担が少ない近隣米を集積していく。この取引では、切手に記された米の等量交換であった。彼岸が過ぎて三月下旬から廻船が動き始めると、「蔵解き」と称し、年貢米収納の蔵から、切手により現米が買い取られ、実際の輸送・販売が行われた。「大坂為御登米」と表されるものは、現米を大坂市場に運び入れることとして用いられていたとみられる。

大坂廻米、大坂為御登米の用語に関する規定や、米切手を中心とする「現米が動かない」米取引に関しては、筆者の長年のテーマであり、いずれ稿を改めて論じていくこととする。

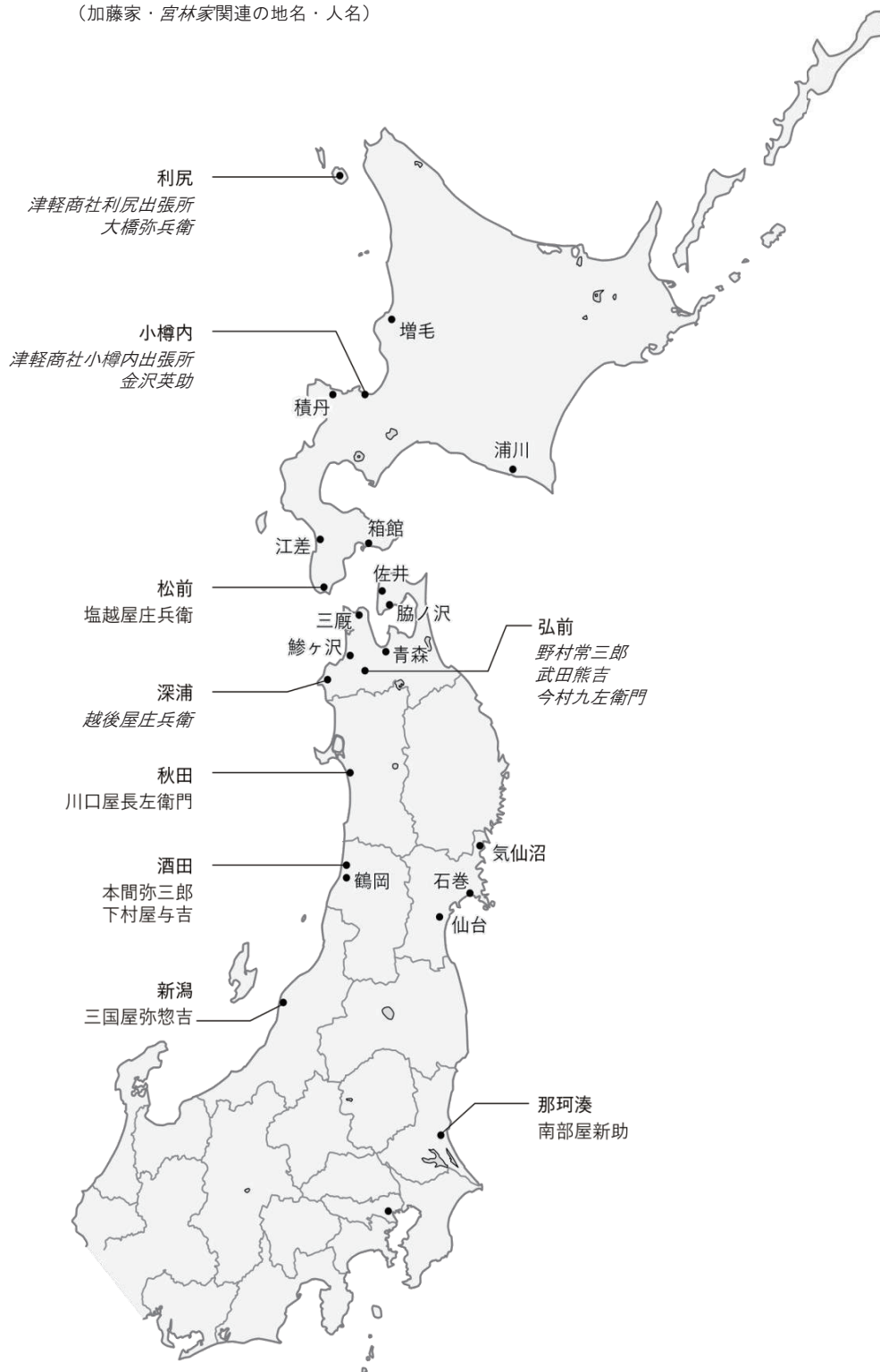
註

- (1) 拙稿「加賀藩産物方御用船 威徳丸の「航跡」」(今石みぎわ編『海を渡ったイナウーアイヌと和人の文化交渉史の研究』(独立行政法人国立文化財機構、二〇一九)所収)。
- (2) 『大鋸コレクション古文書目録(一) 宮林家文書』(石川県立歴史博物館、一九九三)。
- (3) 同右書所収、No.一二三二「船買請証文」及びNo.一二三三「船売渡証文」。
- (4) 同右、No.一二三四「船買券状」及びNo.一二三五「船売渡状」、No.一二三六「恵吉丸売渡」。
- (5) 同右、No.一二四九「神速丸雑用帳」。
- (6) 同右、No.一二五六「函館湊にて航海便り」。
- (7) 同右、No.一二五七「高内情況等報告書簡」(高内は、商内の間違い)。
- (8) 同右、No.一二三七「売紙定証文」(紙定は、約定の間違い)。
- (9) 同右、同右。
- (10) 同右、No.一二三三「渡海船手形」。
- (11) 同右、同右。明治四年の書類は、前年に「問屋会所」が行った手続きを、手宮海官所が追認する形となっている。
- (12) 能州黒嶋の廻船問屋濱岡屋弥三兵衛と森岡屋又四郎が、富山藩と交渉を展開した「松平出雲守様御米引請代金并月割納金御預所御引請儀定諸書上証文等留牒」(石川県前町「新修前町史 資料編1 海運」所収、黒島 森岡家文書)が詳しい。

- (13) 年貢米を御蔵に納めた後に行われる「蔵縮り」から廻船が動き出す来春の「蔵解き」の期間、実際の米が動くことは無く、切手での取引が行われていた。(文末に記す「追記」を参照)。
- (14) 表1「幕末の蝦夷地関係年表」参照。
- (15) 註(2) 目録所収、No.一二〇九「仕切書」。
- (16) 註(1)に同じ。
- (17) 図1「幕末から明治初頭の北ルート」参照。
- (18) 高槻泰郎『大坂堂島米市場―江戸幕府VS市場経済―』(講談社現代新書、二〇一八)から、多大な学恩を得ている。

【図1】江戸末～明治初頭の北ルート

(加藤家・宮林家関連の地名・人名)



【表1】幕末の蝦夷地関係年表

『見る・読む・調べる 江戸時代年表』（小学館、2007）より抜粋して作成

年号	西暦	月日	項目
享和2年	1802	2月23日	蝦夷奉行設置
		5月11日	箱館奉行に改称
		7月24日	東蝦夷地を上げ知
文化元年	1804	8月4日	津軽・南部両藩に東蝦夷地警備を命じる
文化4年	1807	3月22日	西蝦夷地を上げ知、蝦夷地すべてが直轄地
		10月24日	箱館奉行廃止、松前奉行に
文化5年	1808	1月	仙台・会津両藩に蝦夷地警備を命じる
		12月18日	津軽・南部両藩に蝦夷地警備を命じ、加封して家格をあげる
文化6年	1809	1月	松前・津軽に烽火台
		6月	樺太を北蝦夷地と改称
文化9年	1811		東蝦夷地で場所請負制度実施
文化10年	1812	12月22日	南部藩に、蝦夷地警備費1万両を貸与
文政4年	1821	12月4日	南部・津軽両藩の蝦夷地警備を廃止
		12月7日	東西蝦夷地を松前藩支配に戻し、松前奉行廃止
天保2年	1831	10月29日	松前藩主松前章広を万石格とし広域警備を命ず
嘉永2年	1849	7月10日	松前崇広（松前藩）と五島盛成（福江藩）に警備のための新城築城を命ず
嘉永6年	1853	6月3日	ペリー浦賀来航
		9月15日	幕府、大船の製造を許可
嘉永7年	1854	3月3日	日米和親条約 下田・箱館開港
		6月30日	箱館奉行 再置
		8月23日	日英和親条約
（安政元）		12月21日	日露和親条約
安政2年	1855	2月22日	松前城周辺以外の蝦夷地を直轄に
		3月27日	仙台・津軽・南部・秋田・松前各藩に蝦夷地警備を
		10月14日	蝦夷地移住を許可、開拓を命じる
		12月4日	松前藩に、陸奥・出羽のうちに替地を（転封）
		12月27日	日蘭和親条約
安政4年	1857	閏5月4日	松前・箱館・蝦夷地用通貨「箱館通宝」を铸造
安政5年	1858	6月19日	日米修好通商条約
		7月	日蘭、日露、日英、日仏修好通商条約 5か国条約
安政6年	1859	1月13日	長崎、箱館、神奈川へ出稼ぎ・移住・自由売買を許可
		6月2日	神奈川、長崎、箱館 5か国との自由貿易解禁
安政7年	1860	1月13日	咸臨丸出港
（万延元）		閏3月19日	5品江戸廻送令 雑穀・水油・蠟・呉服・生糸
		6月17日	日葡修好通商条約 ポルトガル
		12月14日	日普修好通商条約 プロイセン
元治元年	1864	9月5日	5品江戸廻送令廃止
慶応2年	1866	6月21日	ベルギーと通商条約
		12月7日	デンマークと通商条約

初代石川県令内田政風

— その事績の検討 —

はじめに

明治四年（一八七一）の廃藩置県により旧藩主前田家は東京へ去り、薩摩出身の内田政風が本県の初代長官として着任したことは広く知られている。しかしながら、その人物像や事績についてとなると認知度は高いとは言えないのが現状であろう。そこには、歴史的研究の蓄積が決して多いとは言えない石川県地域の明治初期に関する成果が、近年、ようやく新たな進展をみせてきたことにも遠因があるのではないだろうか^①。

平成三〇年（二〇一八）は、内閣官房「明治一五〇年」関連施策推進室によるキャンペーンもあり、各地で幕末・維新时期をあつかった展覧会が盛んに行われ、当館でも春季特別展「明治維新と石川県誕生」

を開催した。

本稿では、展覧会に際して行った内田に関する史料調査で分かったことに加えて、展覧会後の県内史料の再調査で内田自筆による履歴書類の存在が判明したこと^②から、彼の事績と生涯について検討を加えることを通して、幕末から明治初期という時代を考える手がかりを探ってみたい。

石 田 健

一 幕末期薩摩藩の政治活動における内田政風

1. 内田政風の出自と家格

内田政風（通称仲之助）は、文化一二年（一八一五）二月二日、薩摩藩士内田仲蔵政為の二男として鹿児島城下新照院通町に生まれ、

兄（政徳）に継子がなかったため内田家を継いだ。ちなみに、ここで確認しておきたい点は内田の生年である。内田が終生仕えた薩摩藩の最高権力者であった島津久光より二歳年長である。また、より注目したいのは、幕末政局で活躍した薩摩藩士西郷隆盛より一二歳年長、大久保利通よりは一五歳年長という点である。長幼の序が現代よりもはるかに厳格であった時代であり、薩摩藩特有の藩士育成教育（いわゆる郷中教育）においても徹底して年長者を敬うことが教え込まれていたため、内田と西郷・大久保は対等な関係ではありえなかった。実際、内田政風の死去が報じられた新聞記事（明治二十六年（一八九三）一〇月二二日付の朝野新聞）においても、「南洲（西郷の号）、甲東（大久保の号）の先輩として、また直言極諫の士として、薩摩隼人に畏重せられたる」と内田を紹介している点は見逃せない^③。

内田の直筆履歴書類によれば、先祖は藤原鎌足の孫・左大臣武智麻呂であるという。元弘年間（一二三〇年代初）日向国宮崎郡の代官となるも、伊東氏により掠奪。足利尊氏の九州下向の際、兵糧を募った功により日向国宮崎郡の代官に返り咲いた。元龜年間（一五七〇年代初）に島津家に臣従し、慶長一六年（一六一一）、鹿児島城下の新照院通町に移り代々居住した。内田の家格については、「政風力家ハ小番（他藩の馬廻役）ノ家格ニテ」、「目見以上ノ上士トス」とあり、「軍場ニ臨メハ従者十人ヲ召連、主従十一人騎馬ニテ出陣スル制タリ」と自ら記している^④。

内田は、天保八年（一八三七）に大阪藩邸の蔵吏、同一〇年には江

戸藩邸留守居添役となっているが、「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類」には記載がない^⑤。さらに興味深い点は、内田自筆の履歴には、名君の誉れ高く死後は「順聖院様」として崇敬の対象とされた島津斉彬が藩主の時代についての記載が一切無いことである。前掲の新聞記事にも、内田が「勤王家の巨擘」として藩主斉彬公に抜用せられ、もっぱら財政の事を掌り、藩財政の再建に功があったとの記載がある^⑥。内田直筆の履歴に斉彬が藩主の時代についての記載が無い事情からは、明治期に旧主島津久光と西郷や大久保が激しく対立し、後述のように久光側近として活動した内田の久光へ対する尊敬の念が読み取れよう。

2. 島津久光の「国事」運動と内田政風

周知のごとく、嘉永六年（一八五三）のペリー来航を受け、徳川幕府はそれまでに前例のない外様も含めた各大名に対する政治諮問を行った。当時、老中首座であった阿部正弘は、公論衆議の要素を幕政運営に組み込むことで難局の打破を試みたが、結果としてそれは有力な大名の幕政参画という形態となった。つまり、大名領国内支配（藩治）のみならず、領国を越えた業務が生じてきたというわけである。当時これを、藩内業務を超えた国家レベルの施策への対応として「国事」と呼んだ。大名家において「国事」は、通常の一般業務としての「藩治」とは別の次元で発生し、家老より形成される藩治業務の政務系統とは別系統の業務となった。そのため、「国事」に携わっていく

者は、大名や久光のような大名にかわる権力者に近侍する者に多いのはこのためであり、実際に薩摩藩でいえば、西郷や大久保は、本来的な藩治行政の職としてではなく、久光の御側から出てきた政治主体であったと指摘されている⁽⁷⁾。さらに、久光の「国事」運動で指摘される点は、久光が目指したものが、島津家中が宗家主体に運営しうる体制（挙藩一致の体制）で、「国事」を周旋（国政に参画）することであり、藩主ではない久光にとっては、藩内統治で功績を上げることよりむしろ藩領の外でインパクトのある政治を展開し、これを理由付けとして家中における権威を獲得しようという点であった。その方法として選択されたのは、外向きには徳川幕府の政治体制の改編を主張し、家中に対しては「斉彬の遺志」に沿うものと説明されている。また、久光は自身の判断、決断によって「国事」対応をおこなう意思が強かった点が指摘されている⁽⁸⁾。

具体的には文久元年（一八六一）、薩摩藩主島津忠義から実父の久光に対して「国父」の称号が付与され、久光が藩の実権を握る立場となった。そして翌年、幕末史に劇的な転換をもたらした大事件と評価される久光の率兵上京が実行され、勅命を奉じての幕政改革を幕府首脳に承諾させたのであった⁽⁹⁾。

内田はこの久光の率兵上京のため、文久二年六月九日、「江戸留守居添役」から「物奉行ニテ大坂詰金方勤」となり上方へ出て、同月二六日、「京都留守居」となった。そして内田はこの文久二年以来、一貫して幕末政局の中心地・京都に居続けることになる。慶応元年（一

八六五）閏五月一日に「側役格留守居勤勝手掛」、同年六月二八日には、「勝手掛側用人」と進み、在京薩摩藩邸の実務を取り仕切る要の人材となっている。実際に内田が薩摩藩を代表するかたちで京都で政治活動出来た人物といえる史料は、県内でも散見される。例えば、慶応元年と推定できるものであるが、幕府の長州征伐に反対し、長州藩の復権を大藩が協力して実現しようとする内田が発給した文書の写しが現存する⁽¹⁰⁾。

当時、薩摩藩は長州再征に反対し、諸大名を召して「衆議」により方針を決めるべきとの立場をとっており、同じ慶応元年七月には長州藩の井上馨・伊藤博文が、薩摩藩の幹旋でグラバーから武器を購入するといういわゆる「薩長同盟」の布石となった出来事も起きている。内田ら薩摩藩士の政治活動の結果、翌慶応二年七月一八日、広島・岡山・徳島三藩主が連署して幕府・朝廷に征長の非と解兵を請う建言書も提出された。この第二次征長問題は、同年八月二一日、徳川一四代将軍家茂死去のため停止の沙汰書が朝廷から出されて終息するが⁽¹¹⁾、前述の国持クラスの諸大名間の連携した反征長への動きは見逃せないと考えられる⁽¹²⁾。また、先に見たように「国事」専管といえる久光の政治スタンスを貫くためにも、久光自身に加え、在京の家老の常時滞在を想定した屋敷の獲得が進められた。文久二年より開始された相国寺内二本松の地への屋敷造営がそれであり、その屋敷造営掛として内田仲之助（政風）の名前が相国寺文書内に散見される⁽¹³⁾。

以上のごとく、幕末期の内田は薩摩領内の民衆支配にかかわるよう

な藩の正規業務を担う者ではなく、権力者久光の「御側」で久光と直接的関係を持って活動し⁽¹⁴⁾、在京薩摩藩邸の実務を取り仕切る要の人物といえる。

3. 戊辰戦争から廢藩へ至るまでの内田政風

慶応三年（一八六七）一〇月の大政奉還と、一二月の王政復古クーデターを新たな政府の樹立時期とするにしても、その実体が確立させられるには翌年一月の鳥羽・伏見の戦いからはじまる一年半にわたる戊辰戦争が不可避であった。この間、島津久光は脚氣からくる体調悪化のため鹿児島で保養に勤めており、藩政にすらタッチしえない状況であった。王政復古クーデター時点で、幕府を倒すことまでは視野に入れていなかったといわれる久光が、政争の中心地である京都にいなかったことは西郷・大久保らの挙兵討幕活動をやりやすくさせた⁽¹⁵⁾。

慶応四年（明治元）五月、薩摩藩兵をひきいて東征軍に参加せよとの勅命を得ていた藩主島津忠義の出征が急遽中止された。内田自筆の履歴によれば、「西郷隆盛奥州白川表ヨリ昼夜兼行」上洛して朝廷へ「奏聞」したことによって「朝議俄二変シ」差し留められたとある。

西郷が藩主の出征を止める行動に出たのは、新政府軍の中で薩摩が突出する事が諸藩の嫌疑を招き、反薩摩感情を高めることにつながるのと西郷の深謀遠慮からであったと指摘がなされているが、国元鹿児島では疑惑の声もあげられた⁽¹⁶⁾。この時内田は、大小荷駄奉行を命ぜられ藩主忠義に先発して大津へ至ったが、中止により奉行を免ぜられ

て京都へ戻った。また同五月、内田に新政府から刑法官事試補の辞令が下るも依願免官した。この免官の背景は、藩主の許可が得られなかったためという⁽¹⁷⁾。

戊辰戦争への従軍を免れた内田であったが、同年九月、江戸表への出張を藩から命ぜられ、薩摩藩兵の凱旋手続き事務の「総裁」となった。これは、凱旋兵の恩賞の根拠となる戦功記録に関わる実務の責任者であり、職務の遂行には厳正と清廉が求められる重要なポストと考えられる。また、凱旋将兵は勝ち軍に誇り節度を乱しがちであったが、内田が藩規を守らせて兵士を統率したという⁽¹⁸⁾。内田直筆履歴には、凱旋兵の振る舞いに苦慮したことは記されていないものの、凱旋手続き事務の「総裁ノ任」が特筆されていることは見逃せない⁽¹⁹⁾。

それは、翌明治二年（一八六九）三月七日に内田が、薩摩藩の参政に就任したことに関係していると考えられるからである。この参政とは、明治元年一〇月、新政府により布達された藩治職制に基づくポストである。当時、諸藩でまちまちだった職制の統一を図ったもので、藩主の下トップが執政（のち大参事）、次が参政（のち権大参事）であり、藩政の首脳である。さらに内田は参政と、藩を代表して政府の招集に応じて藩論を陳述する公議人という役職をも兼務した。公議人兼務の背景は、先述のごとく文久二年以来、一貫して政局の中心地・京都の藩邸留守居だったことが評価されたのであろうが、内田が藩政の首脳に拔擢された背景は他の理由も考えられる。つまり、凱旋将兵への抑えとしての役割である。

あまり知られていないが、戊辰戦争後の薩摩藩は凱旋将兵によって混沌とした状況を呈しており、内田もかつて京都留守居の下役であった宮内権大丞・新納立夫へ宛てた書簡で鹿児島状況の嘆息を述べている⁽²⁰⁾。

凱旋将兵らは、藩治職制に基づく政府からの改革指令に便乗するかたちで、藩の要職を占めながら王政復古や戊辰戦争になんらの貢献すらしていない門閥衆の排除を久光・忠義父子に求めた。明治二年二月には凱旋した隊長たちが、藩主忠義の面前で実弟の島津久治を拳兵討幕に反対したと詰問し、家老職辞職に追い込んだ⁽²¹⁾。また、伊地知貞馨や奈良原繁ら久光の側近も藩政から排除された⁽²²⁾。こうした状況

に苦慮した久光・忠義父子は、明治元年（一八六八）秋以来、新政府にも藩政にも関わらず悠々自適の生活を送っていた西郷に、凱旋将兵の跳梁跋扈について対策を講じることを期待し、明治二年二月、湯治先に藩主忠義がじきじきに西郷を訪ねて藩政に関わるよう要請した。

これはさすがに拒みきれず、西郷は再び新政府に復帰する明治四年まで、参政ついで顧問、大参事として藩政改革に取り組んだ。しかし、内田も含めて西郷をしても凱旋将兵らの要求を拒むことができず、西郷の改革は、それに対する場当りの対応がめだつものとなった。その内容は、門閥の徹底的打破、私領の返上、世禄の改定の三点であるという。これは、戊辰凱旋の下級士族を特に優遇するもので、この改革によって旧門閥層は禄高を大幅に削減され、それが藩兵の軍拡費用に充てられていた。すなわち、下級士族を中心とした藩政クーデターとみなされている⁽²³⁾。

西郷による藩政改革と同時進行したのが、新政府の中央集権化策としての版籍奉還である。公議人を兼ねていた内田は、版籍奉還についても関わっている。

すでに明治二年一月、薩長土肥四藩主は版籍奉還を朝廷に上奏していたが、同年五月、新政府の行政を総攬する三条実美が、薩長土肥四藩の公議人を招いて具体的な意見（藩論）を徴した。これに対して内田は、藩地鹿児島へ報告して久光・忠義父子の意見を求めた後で奉答すべしと述べた。三条からの報告を受けた大久保利通は、内田がすすめようとしている「御国許へ懸合」が薩摩藩側の遅延につながることを指摘し、長州藩との連携を重視して在東京の薩摩有志によって藩の答申を作成する⁽²⁴⁾。各藩の公議人に求められた役割は、藩論を表明する代表であることであり藩論と公議人の意見が不一致となることは禁忌であったが、内田の意識では公議人Ⅱ従来からの留守居トップの座という認識であった。それは同年六月に、内田が吉井幸輔へ宛てた書簡で「朝廷方御沙汰御座候ハ、兎角御元江申上報知次第否可申上と御答申上ル所二取究度」と認めたことから分かる⁽²⁵⁾。以上から、内田が薩摩藩にとって、就中、久光・忠義父子にとっては、その意を奉じて活動する実務家として欠くべからざる家臣であったといえる。

版籍奉還は同二年六月一七日から勅許され、各藩主は藩知事に任命されたが、鹿児島では更なる混乱を招いた。それは、久光が新政府の中央集権化策と、藩主をトップとする藩の身分秩序を崩した藩政改革

への不満をあらわにしたからである。すでに藩政と藩主の家政は区分され、藩政を司る知政所（藩庁）と家政を担当する内務局が組織され、藩主忠義は鹿児島城の本丸を去り、本丸内に知政所が置かれた。そして版籍奉還で藩主は地方官となり、家禄も藩の歳入の一割と定められた際の鹿児島（鹿兒島）の状況を、内田の書簡から見てみたい。

「此節も例之大傷主（久光のこと）とお知政所争ひ鹿兒嶋中忽ち名高き事ニ罷成候よし承赤面至極、（中略）何もかも十分一として地頭被仰付置候得ハ、序も乱れ（中略）都之城など苦情申立候処、奉せぬ心得ならいか様二もいたせ兵隊を以処置可致²⁶」
混乱ぶりがうかがえて興味深いが、内田は同書簡で更に次のように認めて、旧主の意向と中央集権化政策の板挟みとなっている（藩臣）身分から（朝臣）化への異動希望をあからさまに述べている。

「王政復古と申ものハよきか上ニもよきものとのミ樂居候処、扨々案外至極なるものニ而様々の弊出纔一年余ニ而如斯世態ニ罷成候付、十ヶ年も仕候ハ、如何罷成可申哉歎息之極ミニ御座候、兼而朝廷江罷出候儀は心の欲せざる事ハ御咄も申上置候而節を曲ケ候儀ニ相当申候得共、余り飽ミ果て之工夫ニ付親友之御好ミニ尊兄之思召何卒東京江御飛ハし被下候様乍御手数奉願上候²⁷」

その後内田は明治三年三月二十七日、弁官に任じられ従五位に叙される。晴れて新政府の官員となった訳であるが、翌年の廃藩置県に伴う官制改革で弁官は廃止となり、七月二十四日に御用滞在を仰せ付けられた。

二. 地方官としての内田政風

1. 廃藩置県の断行と内田政風赴任の経緯

明治四年（一八七二）七月一日、廃藩置県の詔書が發布され、廃藩が断行された。廃藩前後の金沢藩知事前田慶寧の動向を確認すると、同年四月に「天機窺」のため東京へ上ったが、約二ヶ月の滞在後の七月三日、東京を離れ金沢へ向かった。その道中で一日を迎え、金沢帰着は一七日であった。その後一九日、東京からの早飛脚で知藩事免官辞令が金沢へもたらされた²⁸。廃藩発表の一日前からの帰藩については、廃藩置県に伴う措置であったと見る向きもあるが、周知のように廃藩置県は政府首脳部のごく少数者（西郷・木戸・大久保ら）による短期間の密議の後に決行されており、前田慶寧が事前に廃藩を知っていたとはいえない。そして、廃藩断行後の地方改革（府県の長官人事や統廃合など）の構想は、七月の段階では決まっていない²⁹。一〇月末ようやく大蔵省による府県区画改革が発表され、全国規模での地方長官任命は、一一月に本格化する。しかし金沢藩は巨大藩であるため、混乱防止を念頭にいち早く地方長官として内田が任命された。

内田自筆の履歴によれば、同年八月一日、金沢藩大参事に就任し、同年一一月二〇日に金沢県参事、翌五年八月二十七日に石川県権令、翌六年二月二二日に石川県令へと昇進した。当時、県令または権令が欠員の際は参事がその県令を代行する事になっており、本県を

含め多くの県で令欠員・参事のみ任命されたことは、内田が県令代理として任命された事になる。つまり、内田は明治八年三月三十一日に県令を依願免官となるまでの約三年七ヶ月（途中、太陽暦への改暦あり）の間、本県のトップの座を占めたのである。

ここで、二つ確認したい点がある。一つは、内田の地方官最初の官名である。実は、戦前の『石川県史』⁽³⁰⁾や『石川県史料』⁽³¹⁾などでは、明治四年八月一日に任命された内田の官名が金沢県大参事となっている。そのため、本県の通史をあつかった書籍なども、金沢県大参事と記されるのが通例である。しかしながら、内田自筆の履歴のような本県の編纂史料以外の史料を検討すると、金沢藩大参事が妥当である⁽³²⁾。ちなみにここで気になるのは、廃藩置県後、いつの時点まで「金沢藩」が暫定的にしても存続したのかであるが、布達など諸史料の不足からはっきりした日付は分らない。なお、同四年九月五日付で大久保へ宛てた内田書簡の署名は「金沢県内田大参事」⁽³³⁾となっていることから、九月初めまでには金沢藩の名称は無くなっているといえよう。この事實は、旧金沢藩をそのまま継承した金沢県が、同四年一月二〇日付で富山県・大聖寺県ともども廃止されて加賀一国を管轄する新しい金沢県が設けられ、内田が参事に任ぜられるよりも前のことである。

二つ目は、内田の在職期間である。当時の各府県長官在職期間の傾向を示せば、明治五年まででは任期一年以上に達する者は半数以下であり、翌六年に至っても在職三年未満の者が全体の七九パーセントを

占めている⁽³⁴⁾。廃藩後の府県草創期には統廃合も続いており、各府県長官の地位が不安定であった。その克服のため、明治九年に「県官任期例」が出され、以後は短期間の任用者が減っている。つまり、内田県政の時代は全国的に見ても長期間であったといえるとともに、内田がお飾り的な存在の人物ではなかったという点があげられる。

次に、内田が金沢へ赴任することになった背景について、金沢士族と鹿兒島士族双方の回顧談を紹介したい。まず、金沢士族による招聘運動は以下の通りである。旧金沢藩士族の陸義猶や杉村寛正らが、廃藩置県後参議となっていた高知出身の板垣退助に掛け合い、その板垣の紹介で佐賀出身の左院副議長江藤新平に会い、江藤の斡旋で実務派として評価の高かった鹿兒島出身の内田政風に白羽の矢が立ったという⁽³⁵⁾。

もう一つは、旧薩摩藩士有馬純雄が回顧録の中で記したものである。廃藩置県後の明治四年八月、内田へ西郷が命令的口調で金沢県の大参事になって行く様にとの内命を伝えたところ、剛直で有名であった内田は断固拒否した。窮した西郷は、有馬しか人材がいなしとして有馬の赴任を要請する。この事態に有馬は、以下のごとく内田を説得した。「今の私（有馬）では学問が不足している。この力量では、県令はとても務まらない。私を助けると思って金沢への赴任を承諾してほしい」と。必死の説得に対して、内田が赴任を受け入れたというものである。この回顧録は、石川ルーツ交流館開設のための調査で初めて県内に紹介され、ルーツ交流館発行の書籍にも記述の一部分が引用

されている⁽³⁶⁾。

以上の事実から、地元側の運動もあつたろうが、陸が私淑していたとされる西郷や桐野利秋らとは、同じ鹿児島士族でも明らかに異なる人脈に位置する久光側近の内田が選ばれたことについては、やはり維新以前の京都での実績や、廃藩置県以前の新政府での地位が新政府とは微妙な関係にあつた巨大藩・金沢の新統治者に相応しいし、また官制改革を名目とした政変で、政府の中枢から退けられた内田の処遇としても妥当だと、政府首脳部が考えた結果と指摘されている⁽³⁷⁾。つまり、内田の人事は左遷に近いという評価である。しかし、有馬の回顧録を再検討すると、上記の西郷・内田・有馬のやり取りの後に「一体内田さん斗りでなく、維新当時の鯁骨漢は大抵落伍者と為つて仕舞つた。内田さんなどは両島津公爵家から、叙位の御申出でが有つたに拘らず、どこか知らん中途で揉み消されたとのことを確聞して居るが、ソー迄意地悪く維新の功臣を葬らなくても宜さそうなものだ」との記述があり、内田赴任の話は維新の功臣を体よく葬つた事例として紹介されているのである。

有馬の内田に関する回顧談には、別の史料もある。有馬が政風の息子政彦に宛てた大正二年（一九一三）の書簡で、前掲の内田政彦「我可父乃佛」に綴られている⁽³⁸⁾。その書簡でも内田の県令赴任の顛末を政彦に書き送っているが、内田の人となり伝えることを目的に記されている。要約すると、内田は薩摩藩出身者の年長者として西郷、大久保と頭角を並べていた。西郷・大久保は新政府の立役者である

が、内田は政府の人というより薩摩藩の人であつたと評価している。

西郷は時に無礼な振舞いをする⁽³⁹⁾ことがあり、剛直な内田とは時に大衝突した。それに比べて、大久保は注意深く内田と接していたという。注目したいのは、内田の県令赴任の顛末で、先の回顧録に未記載の部分が確認できる。それは、明治四年に長谷川準也、陸義猶ほか数名の金沢士族が上京し、陸軍少将桐野利秋と面談。鹿児島士族のうちで実務に明るい県令適任者として、岩下方平と内田政風二人の名前がある。陸らは、この二人の内一人をぜひとも県令に任じてほしいと西郷に懇請する。しかし、岩下はすでに大阪府大参事となつており、内田しかいないとなつたという。その後の顛末は回顧録と大差ないが、有馬が県令となつて旧大藩を治めきれない事態となつては、王政復古・廃藩まで成し遂げた新政府の中心である薩摩の名折れとなる⁽⁴⁰⁾ことが強調されている点は見過ごせない。

この書簡からは、廃藩後の政府の中で旧薩摩藩出身の人材、就中、実務家としての人材が不足していたことが読み取れる。また、先に見たように、内田自身が〈藩臣〉身分から〈朝臣〉化を希望していたことも併せて考えると、久光側近の内田を「左遷」したとする見方は、慎重を要すると思われる。後述するように、久光が現政権の大臣排斥を求めて盛んに政治活動をする明治七、八年の状況を先取りしすぎているようにも考えられる。

2. 石川県の成立過程

ここでは石川県の成立過程について、内田が中央政府とやり取りした公文書から見てみたい。金沢県は、内田が赴任した直後の明治四年一月二〇日付で管轄替えが行われ、加賀一國を管轄することになり、能登國全域と越中国射水郡が新設の七尾県の管轄となった。これを受けた内田は、一二月に県庁所在地の移転を政府（太政官の事務局である史官）へ願ひ出た⁽³⁹⁾。

上記の管轄替えによつて、「元來金澤ノ儀ハ加越能三州總轄ノ折、据置候政廳」であるため金沢を離れたいと記す。内田は、当時の金沢の状況を次のように記した。「数多ノ士族卒モ群居シ其給祿等ノ潤澤ヲ以、十二七八ハ無産ノ人民、身ヲ勞セス活計相營、自然輻輳ノ地ト相成候ヘトモ、既ニ分縣相成候上ハ授産ノ方法ニヨリ追々士族卒モ各所ヘ移散シ、市中自然衰微ニ趣（赴）キ不日貧民苦情ノ処分ニ困難ヲ生スルコト目前ニアリト雖トモ、従前奢侈ノ舊習一時洗滌不致テハ、愚民ノ方向ヲ転セシムルコト甚タ難シ」い状況である。そのため、「金澤ハ加賀一圓ノ中央ニ無之候故、布令宣諭ノ都合モ不宜、幸ニ移廳シテ衆庶ノ便ニ就キ、且、安逸ノ遊民ヲ振起シ他日ノ苦情無之様仕度」との希望を述べ、候補地を「能美、石川兩郡ノ際、手取川ノ下流、美川町」とした。その理由は、「海岸ニ在テ右川ヲ挟ミ港形ヲナシ管下中央ノ地ニテ、布令ノ説諭四方ノ通信運輸共ニ其宜ヲ得、且、上ハ越前、下ハ能登諸浦通舟等、地理十分ノ場所」であるからとした。そして、「速ニ此地ヘ転シ、名モ美川縣ト改稱セハ可然儀ト奉存候。然ル

上ハ金澤・大聖寺ノ二カ所ニ出張所ヲ置キ事務取捌」き、混乱が発生しないように進めたいとの意向も添えていた。

内田の移庁願ひは、地方行政を管掌していた大蔵省での検討をへて、翌五年一月二八日、以下の答申が出された⁽⁴⁰⁾。

そこでは、「金澤縣參事願ノ趣參考仕候処、將來彼地衆庶ヲ按撫スル都合モ宜シク可有之、且、運輸ノ便モ得可申候間、願ノ通移廳相成可」と内田の移庁理由に賛意を表している。しかし、県名の提案には同意を示さず、「美川縣ノ稱ハ不都合ニ付、石川縣ト改稱致シ可然」とした。不可となった最大の理由は、町の境界調査で不都合が生じるためとした。具体的には、「美川町ノ儀ハ、石川郡元本吉村ト能美郡元湊村ヲ合併シ、去末（明治四年）三月ヨリ相唱候儀ニテ、一市兩郡ニ互リ、境界取調等ノ節、不都合之廉モ可有之」としたものであった。そのため、「石川郡ノ分ノミ美川町ノ稱ヲ存シ、能美郡ノ分ハ依舊湊村ト相唱可」との町の区画と名称についての行政指導も付け加えて出している。そして、政府が発給する御布告案として、「金澤縣、石川縣ト改稱之事。但、縣廳ハ美川町元本吉村ニ被置、能美郡美川町依舊湊村ト相改候事」という文章を付加している。

以上のように、美川町へ移庁願は認められるものの、美川県という県名は不許可となった背景に、内田の願書の趣旨をすんなり通させない政治力学が大蔵省内で働いた可能性が指摘されている⁽⁴¹⁾。当時の大蔵省（大蔵卿大久保は外遊中で不在）は、長州閥の大蔵大輔井上馨のもと、薩摩出身の大蔵少輔吉田清成や大蔵権大丞松方正義が実務を

指導する体制で、久光・忠義父子に近い立場の内田とは異なる政治路線集団といえることも加えて指摘できる。しかし、当時の府県統廃合の基本方針として原則県名については県庁所在地の郡名をとるとしている点から考えると⁽⁴²⁾、深読みの感もあるうと思う。

ここで、廃藩置県後の府県統廃合と県名について、石川県以外の事例も含めて検討したい。その時よく出される説が、維新の際、朝敵藩や日和見だった藩には、旧藩の名称や城下の名称を採用させない方針を政府が持っていたとする説である。しかし、この説は明治大正期に活躍したジャーナリスト・宮武外骨の著述を根拠としており⁽⁴³⁾、再検討が必要であると考ええる。

明治四年十一月、府県の統廃合が行われ、それまでの三府三〇二県が一挙に三府七二県となった。この統廃合の過程には、王政復古やそれに続く版籍奉還、廃藩置県に際して功労のあった有力大藩への配慮と妥協がなされている。例えば、同年八月に参議の木戸孝允が、鹿児島藩を三つ、山口藩を二つ、金沢藩を三つにそれぞれ分割する区画案を提示し、それは大久保や西郷も同意していた。その後、九月に大蔵省が三府七三県とする原案を作成し、閣議でさらなる修正が加えられた。その過程で、鹿児島藩を三分、山口藩を二分するという企図は、木戸自らの出身藩においてすら実施できず、それは有力大藩への配慮と妥協が存在したからである。例えば、山口県は当時全国最大の八九万石の大県となっている。また、三三万石と縮小した鹿児島県ではあるが、長官は旧薩摩藩士大山綱良が勤めている⁽⁴⁴⁾。この指摘に異存

はないが、さらに付け加えるならば、金沢藩が木戸の区画案通り三分割されたことを重視したい。この時、政府は府県の区画については、①三〇〜四〇万石程度の規模、②長官人事は他府県出身者、③県名は県庁所在地の郡名という原則を持ちながらも、規模・長官人事・県名という要素をたぐみに組み合わせ、統治の「実験」をしたのではないかと考えられる。先ほどふれた八九万石の山口県であるが、長官は長州出身者ではない（旧幕臣、静岡県土族の中野梧一）。また、越前福井藩出身の村田氏寿が長官を勤めた福井県では、「福井」の名前が残されたにもかかわらず、同地出身の村田からわざわざ郡名である足羽県への変更が出願されている。東北の大藩であり、かつての奥羽越列藩同盟の盟主であった仙台では、栃木県土族の塩谷良翰が長官であったが、仙台県から郡名を用いた宮城県への変更が出願された⁽⁴⁵⁾。以上のごとく県名の変更は、旧藩の影響力をできるだけ排除しようとする政府の意図が存在するとともに、同時に諸事一新を推進しようとする地方官側の願いを反映したものであったと見ることができる。そもそも、明治初期の地方統治や戸籍編成、地租改正などの諸事改革については、新政府において当初からプログラム化されていたわけではなく、政策の実施過程を通じての選択がかさねられて進んでいることもあわせて考慮すれば⁽⁴⁶⁾、維新の際の朝敵・日和見藩への懲罰的措置説は後年のものと言えよう。

こうして明治五年二月、加賀国一円を管轄する石川県が始動していくことになるが、直面した課題は、やはり旧大藩がかかえていた元武

士である士族への対策であったと考えられる。この点は、翌六年に着手された地券調査に際して、内田の名前で石川県が発行した和紙製の市街地券（いわゆる壬申地券）の現存史料からもうかがえる。その明治六年の市街地券の交付された地所が藩政期には武士の組地となっていた土地のものばかりであることや、通常なら県令印が捺される地券に内田の実印が捺されており、県令印の作成を待たずに交付が進められていたのである⁽⁴⁷⁾。つまり、士族対策が優先されているのである。

廃藩置県により、士族・卒族の家禄の支給が諸府県の事務とされていた。廃藩直後に金沢県が管轄していた士族は七〇七七名、卒族は九四七四名であったが、翌五年には、旧大聖寺県（同四年一月二〇日、金沢県に合併）から引き継いだ者を合わせて、士族は七四五二名、卒族九八八六名に増える。しかしながら、管轄区域の石高は一〇二万二七〇〇石から四六万四〇一〇石と半分以下となっている⁽⁴⁸⁾。

これでは県の財政が立ち行かないはずである。やはり、藩政期のように城下町金沢をささえるためには能登・越中の生産力を背景とせざるをえないといえよう。それを示しているのが、明治四年一月二〇日に設置された七尾県が一〇ヶ月後の五年九月二七日付で廃止となり、能登国が石川県へ編入されたことからもうかがえる⁽⁴⁹⁾。諸事一新とは名ばかりで、朝令暮改との誹りを免れない状況であるが、さらに同五年、内田は政府に対して県庁の金沢再移転を願ひ出る⁽⁵⁰⁾。

そこでは、やはり七尾県廃止・能登国編入の件をもって、「増管轄

等相成候ニ付テハ融通ノ道大ニ開ケ」と記して、大きな変化としてあげている。そして現県庁の美川は、「加能両州ノ中央ニハ無之（中略）県庁ヲ石川郡金沢ニ復歸仕度奉伺」と記した。次いで、先年の移転については、金沢が「凡十有余万口ノ人家稠密ノ土地ニ候処、廃置県三分ノ際、従来三州ノ人民輻輳ノ氣脈相絶」えていたため、「一洗ノ為、無抛移庁ノ策ニ相及候」と説明している。そして、金沢への再移転のもう一つの決め手は、政府各省が主導した近代化政策であり、「大学校本部並裁判所」の設置を求められたためである。「殊ニ大学校等ヲ被置候ニ就テハ金沢其地位ニ可有之、且裁判所ト県庁ト懸隔候テハ百事不都合ノ儀モ可有之」と記していることからうかがえる。当時、官衙・裁判所などの建物は、矢継ぎ早に出される改革指令にその営繕は追いつかず、藩政期の役所などを利用して仮庁舎でスタートするしかない状況であった⁽⁵¹⁾。この内田の再移転願は政府・大蔵省も認めざるを得ず、約八ヶ月間（実質移転からは半年）の美川県庁時代が終焉した。なお、この伺に県名の金沢復旧については盛り込まれていない。

3. 中央政府・内田県政・金沢士族

ここでは、県令時代の内田が政府要人へ宛てた書簡から、その県政をうかがってみたい。

まずは金沢へ赴任して間もない明治四年一〇月五日付で、西郷隆盛並びに大久保利通、得能良助、伊集院直之助（兼寛）に宛てた書簡で

三メートルにも及ぶ長文のものである⁵²⁾。なお、当時大久保は大藏卿の地位にあり、得能・伊集院はその下僚として大藏省に出仕していた旧鹿兒島藩士である。内田は金沢の状況を以下のように記し、「人物少くいまた半開ニも不至」と報告している。

「二林遊墮ニ而進テ事を尽候人氣ニ無之哉ニ被察申候、畢竟是迄平士卒ニ至ル迄各藩ニ比候へハ過禄ニ而官禄ヲ不仰候而も銘々活計出来申処方踏込勉勵スルもの無之（中略）是等ハ天下之大藩ニ而内のミ知り各藩と親ミヲ不付、所謂井蛙論故ニ事情を不知ものと相見得申候」

更に内田は、上記のような状況に対して思い切った対処を怠ってきた藩庁、就中、旧藩主へ対して、「百万石之知事さへ今日如キヲ不知、おのれか活計のみヲ心配今日之形勢ヲ不弁ハ志之小なる方起候儀ニ而此末沸騰ヲ醸候而も程之しれたる事坎、実は一笑すへき事無申迄不便といふへき坎ニ御座候」と記して批判を加えている。

続いて本題の一つ目は、県官人事について大きな入れ替えを行ったことを報告している。

「然は過日申上候通当県其後判任以下之黜陟、追々相始り登庸之面々は兼而実着之向取調相成、（中略）此度出仕之坪之内金吾（坪内全吾）、藤勉一（杉村寛正）之兩人、権大参事江 宣下県庁方申上候付速ニ被命候様御願申上候、小参事等之儀彼は吟味ニ相成候処、是迄大属ハ不残免職ニ相成、新ニ登庸相成候処いまた日数も不立内亦其内方小参事等ニ願立候而ハ人氣折合ニも関係いた

し、只名目のミ相替事実上方すへ而は有名無実ニ付、暫時少参事ハ欠キ置、追而人選可致方ニ談相成申候」

権大参事に就いた杉村・坪内らは、旧金沢藩兵の下士官・将校であった。先に見た、内田の招聘運動の際にも登場した陸義猶らとともに⁵³⁾、彼らが内田を奉戴して県政の刷新をめざしたが、そのモデルとしたのは門閥の徹底的打破からはじまった下級士族中心の藩政クーデターと評価される鹿兒島藩の改革であった。内田の書簡にも、「此度ハ有志之面々憤発兵隊之取仕立等ハ感心之訳ニ御座候、明六日は惣調練有之筈ニ而未明より俱々出張之賦御座候」とあり、内田が軍事訓練を視察している。

本題の二つ目は、経済問題である。江戸時代には三都に次ぐ人口規模を誇った城下町で大消費都市であった金沢の経済状況が思わしくなく、旧藩以来の「米券（米切手）」発行もしくは同額の公金拝借を認めてほしいと記し、説明のため県官員を東京へ派遣するとしている。

「三宅幹（金沢県平民）過日出仕被仰付候人ニ御座候、此度出府（中略）必至之県難下民目今難済する之情難捨置儀、夫等大政府之洪沢を仰ン為ニ御座候ハ、元来当県ニ從來金六万石之米券ヲ年々七月方十月迄ニ割合出シ、夫レヲ以テ私幣ヲ引占メ県内平均之大策ヲ立、夫ニ而諸色釣合ヲ仕置候（中略）当年は御主意ヲ奉シいまた一粒之米券出さる方県下追々米相場下落ニ相成、四民甚難済実ニ救ふへからさるニ立到り此末何様之難到来も難斗、依之冀くは常年通施行御聞濟若無御免候得は、右六万石ニ応し公金拝

借願両様之一ツハ是非とも免許不相願而ハ瓦解可致」

藩政時代は各藩が年貢の米を見込んで米商人に米切手を発行して財政赤字を補っていた。しかし、新政府は正規通貨の流通の妨げになるとして、すでに同四年四月四日の太政官布告で米切手の発行を禁じている⁽⁵⁴⁾。禁止されたことをあえて復活させてほしいと嘆願するほど、県の財政が逼迫していたことがうかがえる。

三つ目は内田自身の近況報告であるが、故郷鹿兒島や京都・東京とは異なる北陸の風土に困窮している様子がわかる。

「昨四日僕偶居相渡引移申候、元来当所之家作雪を防ヲ専といとし、軒端分外ニ突出故何方も暗室東京辺と大ニ趣キ相変居不居馴儀ニ而甚難渋（中略）空さえ相見得不申位罪なくして配所之月をミるとやら夫さえ出来さるハ何之罰ニ可有之哉と甚困窮此事ニ御座候」

次にこの書簡の一〇日ほど後の一〇月一六日付で、内田が大久保並びに得能、伊集院、松方正義に宛てた書簡を見てみたい⁽⁵⁵⁾。

本題の一つ目は、引き続き「国弊（米切手）一条」、つまり経済問題である。

「然は国幣一条切迫之事情も御座候、過日三宅幹（金沢県平民）出府ニも縷々申上候通ニ御座候、何卒亘敷御含御仁慮被成下度偏ニ奉願候」

二つ目は、大久保ら政府要人への面会希望の仲介である。「今度陸（義猶）大属是ハ正廟（県庁）ニ相勤ル人ニ而矢張正義之巨魁とも可

申仁ニ御座候、出府之主意ハ兎角 闕下（朝廷）之事情親敷見聞」したいため、「先生方（大久保ら）江も罷上り伺度との談方被罷出候付御用閑ニは拝謁被仰付御教諭ヲ蒙り度含ニ付御繁務中ニは可被為在候得共、をして御願申上候」と記している。内田は赴任の経緯もあつてか、陸を「正義之巨魁」と称賛している点が興味深い。

また、この書簡でも自身の近況報告は記されているが、北陸の冬場に向かう天候にはかなり困惑している。

「大方雨残ニ而不遠水雪降り寒ニ近ク相成候得は、積雪山ヲうすむ処ニ無之、人通も絶候事も有之よし、老三月甚困窮都愁しく三十六計逃ルヲよしと承申付（中略）何の罰ニ候哉独り夜陰より老之寢覚ニ煙草ヲくゆらし申候得は、稍発興之萌シなきにしもあらず己レ年ニ似合ぬと頭ヲ叩キ寝セ候もおかし御一笑可被下候」

最後は、一〇月二三日付で内田が大久保へ宛てた書簡を検討したい⁽⁵⁶⁾。もともとは年付けの無い書簡だが、文中にある石川県官吏の草薙良平（尚志）の東京出張所詰が明治六年一〇月のことなので、同六年の書簡と判明した⁽⁵⁷⁾。大久保に対して、上京する草薙との面談を仲介した書簡であるが、当時の政治状況を勘案すると非常に興味深い書簡である。

実は内田がこの書簡を認めた翌日が、いわゆる「征韓論政変」で西郷が政府を去った日である。内容は、今後政府の中心になるであろう大久保に対して「此上之御美政、管只奉渴望」と記している。そして追伸部分では、「人之望と申ものハ様々ニ而我々式之及候処ニ無之、

本人之願甚御氣毒奉存候以上」と記し、朝鮮使節としての派遣を強く望んで敗れた西郷の事を「甚御氣毒」と評している。金沢にあつても、内田の下に政治情報が集まっていたこともうかがい知れよう。

翌七年には、士族授産事業の一つとして金沢製糸会社が設立されているが、注目したいのはその資本金三万円の内、二万円が内務省から、五〇〇円は石川県から給付された士族授産資金であつたことである。この資金提供は、内田が同郷の大久保の主導で設立された内務省に働きかけたことにより実現したと考えられている⁽⁵⁸⁾。

以上、ごく限られた史料からの検討ではあるが、廃藩置県直後の旧城下町金沢の具体的状況の一端を知ることができよう。その中で内田は、中央政府の官僚の一員である地方長官として太陽暦の導入なども含めた政府の開化政策を遂行しつつも、権限の許される範囲で旧慣に基づいた地域性に依拠して県の行政を行つたと見ることができ。このことは、中央政府と地方政府（県）の政治力学の双方向性、もしくは、地方の相対的自立傾向としてとらえることができ、明治初期固有の中央―地方関係を示しているといえる。

三、県令辞任後の内田政風

1. 内田政風の県令依願免官と明治八年の政変

内田は明治八年（一八七五）三月三十一日、石川県令を依願免官となり、同日付で御用滞在を仰せ付けられた。この際の御用滞在は、同年

一月一九日に免ぜられているが、内田の県令辞任の背景には旧主島津久光の動向があつたと指摘されており⁽⁵⁹⁾、実際に御用滞在が解かれるまで、内田は久光の中央政府での活動を補佐している。ここでは、中央政府での久光の動向を先行研究によつて簡単に確認するとともに⁽⁶⁰⁾、内田の役割についても見ていきたい。なお、内田が突如果令を辞したことから石川県庁内の人事にも影響がおよんだ。先にも見たように内田の与党であつた忠告社幹部の多くが県官吏でもあつたわけであるが、忠告社は内田の後任の権令桐山純孝と対立し、稲垣義方を除きほとんどが県官吏の地位を去つた。加えて、当時県政の重要政策であつた地租改正事業が停滞、混乱する事態も起こっており⁽⁶¹⁾、「明治八年石川県政変」と呼ぶことができるような様相であつたことも看過できない。

さて中央政府へ目を転じると、同八年二月に政局の大変化が見られた。いわゆる「大阪会議」である。明治六年の征韓論をめぐる対立で西郷隆盛、板垣退助らが下野し、さらに台湾出兵をめぐる意見の分かれた木戸孝允が政府を去つて、政権の中心は大久保が担うことになった。政府首脳の補強策として同六年末には久光が内閣顧問として迎えられたが、さらなる補強措置が伊藤博文、井上馨らによつて画策された。伊藤らの周旋で同八年のはじめ、大久保・木戸・板垣が大阪で会談した。この会議によつて木戸、板垣が再び政府に復帰し、政府の方針として立憲政体の導入が合意事項になったのである。しかし、明治七年四月には左大臣に任命されていた久光の意向は、この合意と

はかけ離れた位置にあったのであり、あろうことか久光は政府に復帰した板垣と連携して大久保を中心とした現政府に揺さぶりをかける。

そのため、久光は幕末期以来の自身の忠実な側近であった内田を東京へ召喚したといえる。先にも見たように、明治二年の段階ですでに新政府の政策に不満をあらわにしていた久光であったが、廃藩後には鹿児島県令就任を望んで旧鹿児島藩士大迫貞清を上京させるなどしたが、失敗に終わっている。当時の久光の周囲には、久光自身よりも年長であり、政治力を持つ人材は内田以外にはいなかったようである。

内田自筆の履歴書類によれば、「島津久光十四ヶ條建言御採用無之朝議頗ル紛紜」とある。そもそも久光の「十四ヶ條建言」とは、廃藩置県後の明治五年、久光の不満を慰撫するために行われた明治天皇の鹿児島巡幸の際、久光が天皇に差し出した意見書であったが⁽⁶²⁾、

以後久光の信条・政治方針の核として堅持され続けている。内容は、西洋化した服制・兵制の復旧、税制の復旧、暦の復旧などを強力に主張したものである。当時の久光は、新政府の政策に対する不満を持つ全国の士族ら不平分子の有力な代弁者と目され、彼のもとには各地から多数の建白書が届いていた⁽⁶³⁾。興味深いのは、久光が特に服制にこだわっている点である。実は、服装は単なる装いの問題や久光の懐古趣味の問題ではない。新政府にとって服制改革は、外見から身分制を払しょくする「四民平等」政策の一環であり、久光にとっては、先に見た戊辰戦争凱旋兵士たちの無秩序な振舞いと下級士族による鹿児島藩政クレーダーの記憶につながるものであった⁽⁶⁴⁾。つまり、久光

にとって現政府の「文明開化」政策は、わが国固有の美風とみなしている国体を破壊し、共和政治に転ずる危惧をいだかせたのである。廃藩で殿様がいなくなったわけであり、殿様の次は皇室も危うくなるという危機感を持っていた。これは、久光のみが持った危機感ではなく、当時公卿や旧大名からなっていた華族層にも共有されるものであった。

内田は、現政府へ不満と危機感をもつ宮家（有栖川宮熾仁親王など）、旧大名（松平慶永、伊達宗城など）らを久光の元老院議長兼任や建言採用の方向へ動かすべく周旋した⁽⁶⁵⁾。久光はすでに明治七年五月、

「意見書」と「人撰書」を政府へ提出して自らの建言実現を要求した。大久保が建言の実現を阻止した場合、新政権を組織しようと計っていたという。「久光公人撰書」によれば、久光が排斥の対象としたのは大久保だけではなく、大藏卿大隈重信（肥）、大藏少輔吉田清成（薩）、外務卿寺島宗則（薩）、租税頭松方正義（薩）らであり、現政権の中枢にある内務・大藏両卿及び大久保に連なる鹿児島出身官僚の排斥にあった。久光は彼らに替わる者として伊藤、当時石川県令であった内田を大蔵省に任用し、副島種臣（肥）を外務卿に任命、さらに西郷、板垣を参議に復職させようとしたが果たせなかった⁽⁶⁶⁾。

明治八年一〇月、久光は太政大臣三条実美を百官統括の術に乏しいとして、三条の免職を願い出た。最終的には同月二二日、罷免し難しとの勅諭が下され、即日久光は板垣とともに辞表を提出、二七日に受理された（明治八年一〇月政変）。しかし政府は久光の帰鹿を許さず、

一月二日に宮中の名譽職である麿香間祇候を命ずる。久光はこれを辞そうとしたが許されなかった⁽⁶⁷⁾。この背景には、西郷と私学校党が県と密接な関係を持つて権勢を誇っている鹿児島で、帰県した久光までもが合流すれば反政府の一大拠点となるおそれがあるからである。

明治九年二月、内田は久光の意向を受けて帰県し、西郷と会談する。西郷の政府復帰と、久光を補佐して政府改革を進めるよう打診をしたが、西郷は同意しなかった⁽⁶⁸⁾。政府側が提携失敗の動きを把握していることは不明であるが、帰県の許可が出て同年三月二日⁽⁶⁹⁾、久光は東京を去る。内田は随行を許され、同船して鹿児島へ帰った。

2. 島津宗家家令としての内田政風

明治九年七月一五日、内田は久光・忠義父子の命によって島津宗家の家令となり、同一七年四月、「事故（理由）有之辞職」までこれを勤めた。内田の家令任用については、島津宗家と鹿児島県が対立する事態が生じたことに原因があった。つまり島津家は、県が支援する私学校にその資産が流用されるのを嫌ったのである。県令大山綱良と西郷の私学校党が牛耳る鹿児島県において、県か島津宗家か所有が曖昧であった資産・事業（鉱山、工場、会社、銀行など）について、内田が県令時代の経験・知識を活かして法令に違反する点を次々と指摘した。結果、鉱山と第五国立銀行が島津宗家の所有であることを認めさせ、その他の会社などの経営権返還も県へ迫ったが、解決しないうち

に西南戦争が勃発した。この西南戦争に際して、大山県令から第五国立銀行に対しても出金命令が出たが、内田が出金を断固拒否したという⁽⁷⁰⁾。

西南戦争は、同一〇年二月一五日、西郷ら私学校党が政府へ尋問の筋ありとして率兵上京の途について勃発したが、政府はこれに軍事的にも政治的にも迅速な対応で臨んだ。政府は三月八日、勅使・柳原前光を鹿児島に派遣して、久光・忠義父子に西郷軍に荷担する意思がないことを確認した。これに対し久光・忠義父子は、勅使派遣の御礼のため京都の行在所（京都御所）へ久光は島津珍彦（久光の四男）、忠義は島津忠欽（久光の五男）を正使として派遣する。内田はこの際、副使として忠欽とともに四月一日、京都へ向けて鹿児島を出発し、「今回戦争ノ原因ヲ公正ナル裁判ニ附シテ解決」するべきであるという「久光公意見書」の内容を陳述した。そして翌五月七日、無事に鹿児島へ帰り、久光らへ復命している⁽⁷¹⁾。五月二日には久光・忠義父子が桜島に避難し、西郷軍に投じなかった鹿児島士族一〇〇〇名以上が集まり護衛にあたっており⁽⁷²⁾、当時の鹿児島県内が西郷・私学校党一色というわけではなかったことが興味深い。

さて、いわゆる不平士族による最初の大規模反乱となった明治七年の佐賀の乱以降、政府は警察組織や情報機関を整備して情報収集を盛んに行ったが、金沢の状況を報告した書類も残されている⁽⁷³⁾。それは、歩兵第七連隊に密偵として送り込まれた高橋維則大尉が西南戦争中の様子を報告したものである。内容は、内田が県令を辞してから士

族結社忠告社の勢力が衰え、多数の党派に分裂していることを報告し、注意すべき党派に「嶋田何某の徒」と記して石川県士族嶋田一郎らの存在をあげている。西南戦争の翌年、政府の中心であった大久保を暗殺した嶋田らを政府がすでに不穏な人物として警戒していたことがうかがえるものであるが⁽⁷⁴⁾、金沢の士族の一部が「夙ニ西郷桐野篠原内田ヲ奉戴シ屢々通謀シテ義ヲ同フシ皆西郷以下ヲ信仰スル恰モ神ノ如シ」と記しており、西郷ら私学校党とはあきらかに異なる人脈にある内田の名前があがっている点は看過できない。これは密偵の誤報などではなく、当時の内田は実際に監視対象とされ、その私信は検閲を受けていた。明治十一年五月三十一日に警視局権大警部奥村陟と警部補木村定勝が出張先の石川県から、内務省警視局大警視（今の警視総監）川路利良に送った報告書には、内田と同県不平士族の連携について、「内田政風え之音信方も探索仕候共（中略）既に昨十年春来頃日迄之郵便書も委く相調候処、当県士族共より鹿兒島表え指出有之書状拾五六通有之候処、何れも嫌疑可致文通更に無之候」とあり、郵便検閲が持続的に行なわれていたのである⁽⁷⁵⁾。

その後明治一六年、島津宗家が所有する鉱山事業が暗礁に乗り上げ、事業の近代化のため政府から拝借していた資金の返済のめどが立たなくなった。この事態に島津宗家がとった策が、大胆にも大蔵卿の現職にある旧藩士松方正義（当時伯爵）に相談をもちかけるといふものであったが、当然それは大幅な家政改革を伴った。すなわち、内田は翌一七年四月、「事故（理由）有之」家令職を辞職、以後、現職の

まま松方が島津家顧問となって改革が進んだ。以後内田は、島津宗家が筆頭株主である「第十五国立華族銀行世話役」を勤めることとなる⁽⁷⁶⁾。当時、島津宗家の政府からの拝借金の大半は返済不能となっていたが、政府にとつても完済させなければならぬ事情があった。それは、同一九年に施行された「華族世襲財産法」である。この法律は、島津家に限らず当時困窮する多くの華族を救済し、「皇室の藩屏」としての華族を存立させるための財産保護法であるが、島津宗家の予定されていた登録財産に第十五国立銀行の株券があった。しかし、あろうことか株券が鉱山資本拝借金の抵当になっていた。筆頭株主である島津宗家の株券が登録できない事態となつては、お話にならないからである⁽⁷⁷⁾。世襲財産法施行の一ヶ月前に、島津宗家の拝借金は無事返済が完了しているが、政府から特別な措置が施されたものと考えられる⁽⁷⁸⁾。

なお、内田の家令辞職の経緯について、政風死去時の新聞記事に以下の記述がある。内田は「島津公の家令となり、爾来同家の財政上に力を効すほとんど十年、島津公その恪勤を悦び、往々將に頼る所あらんとせしに、たまたま某伯等暗に同家家政に容喙し、私に翁を中傷す。翁慨然として曰く、ああ我が事止むと」⁽⁷⁹⁾。この記事中にある「某伯」とは、松方正義のことを暗示しており、内田と松方との間に確執が生じたことをうかがわせる記述となっている。内田は明治二五年七月二十七日、第十五国立銀行世話役も辞し、同年九月二十八日、故郷の鹿兒島へ戻った⁽⁸⁰⁾。

3. 内田政風爵位請願、恩典追願

内田は、第十五国立銀行世話役を辞職する直前の明治二五年五月、東京の丸木利陽写真館において肖像写真の撮影をしている。この肖像は、戦前の『石川県史』に掲載されているものであり一般によく知られている画像であるが、撮影時期や場所は当館所蔵の内田政風肖像写真の裏書によって判明した。内田が七八歳の時であり、まさに最晩年の肖像である。現在、この画像以外の肖像は県内でも確認されていないが、なぜ最晩年になっての撮影を行ったのか。その理由は、爵位請願準備のためだったのではないだろうか。

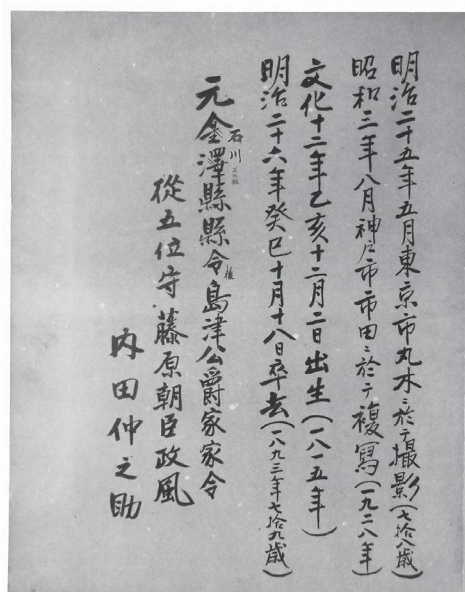
宮内庁宮内公文書館所蔵の「從五位内田政風勲功上申書〔明治二六年〕」によれば⁽⁸¹⁾、内田の爵位請願は、同二五年一月に提出予定であったものが遅れて翌二六年九月一四日に提出された。島津両公爵（宗家忠義・玉里家忠済、久光は二〇年一二月死去）の証明書と、黒田清隆（伯爵）・黒田清綱（子爵）・伊集院兼寛（子爵）・岩下方平（子爵）・大迫貞清（子爵）・仁礼景範（子爵）・海江田信義（子爵）・本田親雄（男爵）の連署で宮内大臣土方久元宛に上申するも、授爵は却下となつてしまった。上記のごとく、当時すでに授爵していた同郷のお歴々が先輩の内田を推挙したのであったが、なぜか松方正義の名前はない。

すでに内田は同二六年一月には「中氣症」を患っており、爵位請願の翌月である一〇月一八日没した⁽⁸²⁾。七九歳であった。

内田没後の明治三十一年一月から三月にかけて、政風への恩典追願も



内田政風肖像写真
(石川県立歴史博物館所蔵)



写真裏書

行われた。なお、この前年の一二月には、島津忠義も死去している。追願は、岩下方平（子爵）・海江田信義（子爵）・黒田清綱（子爵）・本田親雄（男爵）の連署で半官的な修史事業を行っていた史談会の副会長東久世通禧・池田茂政へ上申し、東久世・池田から宮内大臣田中光顕宛に上申されたが、再び却下となったようである⁽⁸³⁾。

おわりに

内田政風が石川県のトップの座を占めたのは、廃藩置県から大阪会議に至る約三年七ヶ月の期間であった。この時期は、立憲政体の導入が「国是」となる以前であり、国制改革の方向が確定していなかった。そして、この時期の府県は確かに中央政府の出先機関にすぎない側面もあったが、中央との関係は、上意下達の一方通行的なものではない場合もあったと指摘されている⁽⁸⁴⁾。内田の県政が、明治初期における中央政府と地方政府の関係において、地方官は形式上あくまでも「官」でありながら、地方の実情を鑑みた意識としては「官」と「民」の接点として自らを位置付け、中央政府に対して相対的な自立を試みようとする双方向性を帯びていたといえよう。また、県令辞職後の内田が生きた時代は「明治国家」の成立期であり、帝国憲法や議会の導入にそなえて政府組織や地方制度の改革や、のちに「皇室の藩屏」と呼ばれた華族の位置づけの再編成が行われた時代にあたる。すなわち、内田政風の生涯をたどることが「明治維新の勝者」で

あった旧薩摩藩のなかにあつて、叙爵の恩典に浴さなかった内田個人の業績を検討することにとどまらず、人物をとおして明治維新という歴史の変革を照射し、歴史をみる眼を豊かにする一つの事例として大きな魅力をもつものであると考える。幕末・維新期の政治史は、西郷隆盛や大久保利通などキヤストを絞った形で論じられることが多いが、当然の事ながら内田のように国元と政治の中心であった京都や東京を結び、政局の鍵を握るような重要な役割を担った人物が、まだまだ多く存在することは見過ごせない。もとより本稿ではごく限られた史料の記述から検討を加えたが、これまで伝記が刊行されていない内田のような人物をあつかう場合は、その職掌やステータスをふまえたうえで論じられるべきであろう。ただし、歴史研究において個人をあつかうことについては種々の議論がある点であり、大方のご叱正をいただくことができれば幸いである。

〔註〕

(1) まず、徳田寿秋氏が年来の研究をまとめた『加賀藩における幕末維新期の動向』（私家版、二〇〇二年）、同氏による最後の藩主の実像にせまった『前田慶寧と幕末維新』（北國新聞社、二〇〇七年）があげられる。また、宮下和幸氏も幕末維新期の加賀藩について精緻な研究を行っている（宮下「明治初年加賀藩政における職制改革の特質」『『伝統』の礎 加賀・能登・金沢の地域史』、雄山閣、二〇一四年）、同「加賀藩の政治過程と前田慶寧」『明治維新史学会編『幕末維新の政治と人物』、有志舎、二〇一六年）などがあげられる。森山誠一氏は、『石川県史 第四

編」(同県、一九三二年)以来誤述され続けた加賀藩から石川県へと移り変わる時期の支配・行政区画の変遷について訂正を行った(森山「加越能における幕末明治初期の藩県沿革について」『金沢経済大学論集』第三五巻第三号、二〇〇二年)、同「美川町の誕生時期をめぐって」『金沢星稜大学論集』第三六巻第二号、二〇〇二年)などを参照)。次いで、奥田晴樹氏が一連の研究で、初期府県制期の石川県が占めた全国統治上の位置について検討を加えている(奥田「石川県成立の歴史的考察」『日本海域研究』第三七号、二〇〇六年)、同「内田政風と初期石川県」『地域社会の史料と人物』北國新聞社、二〇〇九年)、同「初期石川県の郡村統治」『日本海域研究』第四〇号、二〇〇九年)、同「七尾県の歴史的考察」『立正大学人文科学研究年報』第五二号、二〇一五年)などを参照)。その中で奥田氏は、廃藩置県後の石川県設置に至る過程を取り上げ、大参事、のち県令に就任した内田政風の政治的位置と地元士族との相関をあわせて紹介した。しかしながら、内田の政治的位置を検討するに際しては、刊行・活字化された史料を用いた考察にとどまっている。

また、後述のごとく内田が終生仕えた薩摩藩の最高権力者であった島津久光を取り上げた研究についても、近年本格化したといえる。その嚆矢となったのが、芳即正『島津久光と明治維新』(新人物往来社、二〇〇二年)である。この本格的な伝記研究に影響を受けて、久光の人物像の再検討が進んでいる。幕末期の研究では、佐々木克『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館、二〇〇四年)、町田明広『島津久光』幕末政治と薩摩藩(講談社、二〇〇九年)、笹部昌利『島津久光 異例の権威』(笹部編『幕末維新人物新論』、昭和堂、二〇〇九年)、家近良樹『島津久光の政治構想について』(明治維新史学会編『幕末維新の政治と人物』、有志舎、二〇一六年)などがあげられる。次いで明治期をあつかった研究で

は、刑部芳則「廃藩置県後の島津久光と麝香間祇候」(『日本歴史』第七一八号、二〇〇八年)、久保正明「明治六年政変後の島津久光派」(『日本史研究』第六一一号、二〇一三年)などがあげられる。

- (2) 「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類」(明治二〇年八月) (金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵「村松文庫」『拾塵雜録』に所収)。森田柿園『金澤古蹟志』(金沢城及び城下の沿革・名跡などについて、旧藩主前田家の依頼を受けて森田が著したもの。成立は明治二十四年。筆者は昭和五一年、歴史図書社刊行のものを参照)に、「石川県令内田政風傳」という小伝が掲載されている。小伝には、この当時の文献の多くがそうであるように出典が明示されていないが、森田宛内田自筆履歴書類の存在から、森田が内田に対して履歴を所望し、それに対して内田が「無下ニ御謝絶申モ却テ本意ニ悖」ることから自ら記載・進呈したことが分かった。冒頭には「其御縣々令奉職ノ縁ニ因リ、老拙藩勤等履歴御所望ニ預リ」とある。二文字目の「御」は「其縣々令」と一度書かれた後、字間に書き足されるなど非常に丁寧に認められている。また、末尾には「此一冊真ノ略書ニシテ政風心覚ノ俣ヲ記載シタルモノニ付、思召ヲ以テ御一覽他、漫ニ不寫様奉願候也。東京ヨリ / 内田政風⑩ / 明治廿年八月 / 加州金澤 / 森田平次様」とある。

本稿中の内田政風の履歴に関わる記述については、特に断らない部分はこの「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類」による。

- (3) 『明治ニュース事典 第五巻』(毎日コミュニケーションズ、一九八五年) 七二頁。

- (4) 薩摩藩島津家の家臣团组织については、原口虎雄『幕末の薩摩』(中央公論社、一九六六年) 一二二―二五頁参照。ちなみに、内田の資格は西郷・大久保が属した御小姓与(他藩の徒士)よりも上である。

- (5) 内田政風の履歴については、前掲の「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類

- 類」以外にも現存する。内田政風の長男で、海軍軍人や佐世保市長などを歴任した内田政彦の手になる「我可父乃佛」(石川ルーツ交流館がコピーを所蔵。内容は、政風の爵位請願(明治二六年)・恩典追願(明治三一年)の提出書類一式や島津両公爵の証明書の写し、政彦へ宛てられた関係者からの書簡やその写し、政彦の手になる覚書などをまとめたもの。ここには明治二六、三一年に作成された政風の「履歴」が三種綴じこまれているが、明治後期に爵位請願という目的の下に編まれたものであるため、履歴の記載は前掲「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類(明治二〇年八月)」を優先する。
- (6) 前掲『明治ニュース事典 第五巻』七二頁。内田政風の爵位請願の際の履歴にも、同様の記載がある(前掲内田政彦「我可父乃佛」参照。ちなみに西郷は、斉彬を敬愛するあまり久光を軽視しており、久光西郷両者の関係が長年にわたって良好ではなかったことも指摘されている(家近良樹『西郷隆盛 維新一五〇年目の真実』、NHK出版、二〇一七年などを参照)。
- (7) 笹部昌利「島津久光 異例の権威」(笹部編『幕末維新人物新論』、昭和堂、二〇〇九年)参照。
- (8) 註7。
- (9) 家近良樹「島津久光の政治構想について」(明治維新史学会編『幕末維新の政治と人物』、有志舎、二〇一六年)参照。
- (10) 「薩摩藩より長州周旋依頼状(七月)」(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵「河地文庫」所収)。松平修理大夫家来内田仲之助から加州御留守居中、仙台御留守居中、大広間席、統宛てで出されている。
- (11) 將軍家茂は、この一か月前の七月二〇日、大坂城中で死去した。
- (12) ちなみに、第二次長州征伐問題に際して当時京都にいた大久保利通は、近衛忠房や関白二条斉敬ら公卿に諸大名を招集して衆議で征討問題を検討すべきであると盛んに周旋した(佐々木克『大久保利通 明治維新と志の政治家』、山川出版社、二〇〇九年、二四〇三四頁参照)。
- (13) 笹部昌利「薩摩藩二本松屋敷の政治的意義 島津家の『国事』と京の拠点」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第二二号、二〇一七年)参照。
- (14) 元治元年(一八六四)、薩摩出身の富山弥兵衛は、久光の命を受けた内田政風の指示で新撰組へ内情探索のため入隊したという。富山はのち、近藤派から離脱した伊東甲子太郎の高台寺党へ入り、近藤勇を伏見で狙撃、重傷を負わせた。新撰組隊士の生き残りである秦林親が明治四一年に記した「元薩州藩士内田忠之介正風殿履歴」(前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収)によれば、富山は内田の元家来であったという。
- (15) 家近良樹「老いと病でみる幕末維新」(人文書院、二〇一四年)一〇六〜一〇七頁参照。
- (16) 家近良樹『西郷隆盛』(ミネルヴァ書房(日本評伝選)、二〇一七年)三八〜三三一頁参照。
- (17) 前掲内田政彦「我可父乃佛」。
- (18) 註17。
- (19) 内田の死去を報じた新聞記事(明治二六年(一八九三)一〇月二二日付の朝野新聞)には、凱旋兵との関わりの記載は無い(前掲『明治ニュース事典 第五巻』、七二頁)。
- (20) 「新納立夫宛内田政風書簡(明治二年九月七日付)」で、鹿児島島(鹿兒島)の状況を「不相替兵隊之威張、政府之権も全無之と申程之勢、真直ニ申せは一日もいやニ御座候、爰を御氣張か中々六ヶ敷」と報じている(立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書 一』、吉川弘文館、一九六六年、一三九頁)。新納は薩摩藩士で大久保利通の姉の夫。慶応期に江戸留守居から京都留守居へ転じ、慶応四年から宮内権大丞を勤め、明治二三年

には久邇宮家家令となった人物。

また、久光が明治七年に政府へ提出した書類には「薩兵士等休暇を賜て帰藩するや戦捷の余威を募り衆人を蔑視し、或は人家に闖入し、或は分捕と称して席上の器什を掠奪毀傷し、或は白日酒樽を荷ふて街頭に放歌し、或は恣に髪を断ち洋服を着て公然徘徊し、或は門地を無用の贅物として是を廃するの議を主張し、暴行跋扈至らざる所なし」とある（左大臣従二位臣島津久光上言「明治七年一〇月」、『岩倉具視関係文書 六』、東京大学出版会、一九八三年復刻版、三八四頁。なお、この上言書の写しは石川県内にも複数存在しており、当館所蔵「加賀藩士小川家文書」中にも「諸方建白」と題された綴りに所収されている）。

- (21) 島津久治は久光の二男で、慶応二年から藩の首席家老となる。家老辞職後精神的に追い詰められて、三年後急死した。享年三一歳で、死因はピストル自殺だという（松尾千歳『人をおるく 西郷隆盛と薩摩』、吉川弘文館、二〇一四年、六四頁参照）。

- (22) 落合弘樹『西南戦争と西郷隆盛』（吉川弘文館、二〇一三年）八〇～八二頁。

- (23) 原口泉『薩摩藩軍事力の基本的性格』（佐藤誠明・河内八郎編『講座日本近世史八 幕藩制国家の崩壊』、有斐閣、一九八一年）参照。なお、明治二年の藩政首脳陣は、参政に桂久武・伊地知正治・橋口彦二・大迫貞清・伊集院兼寛・黒田清綱・内田政風（兼公議人）らで、次いで西郷も参政に任ぜられた。

- (24) 「吉井幸輔宛大久保利通書簡「明治二年五月五日付」」（『大久保利通文書 三』、東京大学出版会、一九八三年復刻版、一七七～一七九頁）。

- (25) 「吉井宛内田書簡「明治二年六月二四日付」」（前掲『大久保利通関係文書 一』、一三八頁）。

- (26) 「新納宛内田書簡「明治二年九月七日付」」（前掲『大久保利通関係文書

二』、一三九～一四〇頁）。ちなみに、この内田書簡の末尾に「御覧後御火中奉願上候」とあり、ごく親しい間柄での機密書簡と見ることができ。しかし、この書簡がいつの段階で新納の手から大久保の下に入ったのかを知るすべはないが、非常に気になる点である。現在は「大久保利通関係資料」の一点として国立歴史民俗博物館に所蔵されている。

- (27) 註26。

- (28) 『加賀藩史料 藩末篇下巻』、一九五八年、一三二～一三七二頁参照。

- (29) 廃藩置県については、松尾正人『廃藩置県の研究』（吉川弘文館、二〇〇一年）、勝田政治『廃藩置県 「明治国家」 が生まれた日』（講談社、二〇〇〇年）などを参照。

- (30) 前掲『石川県史 第四編』同県、一九三二年。

- (31) 「石川県史料付録 官員履歴」（『石川県史料 第四卷』、石川県立図書館、一九七四年）四三二頁。なお、『石川県史料』は、内閣文庫（現国立公文書館）所蔵「石川県誌稿」を翻刻出版したもの。誤植などではなく原本も「金澤縣大参事」と記されている。

- (32) 前掲「森田柿園宛内田政風自筆履歴書類」以外で金沢藩大参事と記されているのは、『歴代頭官録』（朝陽會、一九二五年）九四一頁。また、前掲内田政彦「我可父乃佛」も挙げられる。

- (33) 「大久保宛内田書簡「明治四年九月五日付」」（前掲『大久保利通関係文書 一』、九六頁）。

- (34) 國岡啓子「明治初期地方長官人事の変遷」（『日本歴史』第五二二号、一九九一年）参照。

- (35) 陸義猶「島田一郎一列紀尾井坂事件實歴附「二九話」（史談會編『史談速記録』第一八七輯、一九〇八年、のちに『史談会速記録 合本二七卷』、原書房、一九七三年復刻）五七一～五七三頁。

- (36) 有馬純雄『維新史の片鱗』（日本警察新聞社、一九二一年）二五五～二

- (60) 頁。『美川町のあゆみ』（石川ルーツ交流館、二〇〇二年）二一～二二頁。
- (37) 前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、四頁。
- (38) 「内田政彦宛有馬純雄書簡〔大正二年（一九一三）七月八日〕」（前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収）。
- (39) 「金沢県庁石川郡美川町へ移庁願〔明治四年十二月〕」（『公文録』第九六卷、国立公文書館所蔵）。
- (40) 「太政類典」第二編第九五卷、国立公文書館所蔵。
- (41) 前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、八頁。
- (42) 大島美津子「大久保支配体制下の府県統治」（『日本政治学会編『年報政治学 一九八四年度 近代日本政治における中央と地方』、岩波書店、一九八五年）二九～三四頁参照。
- (43) 宮武外骨『府藩縣制史』（名取書店、一九四一年、のちに谷沢永一・吉野孝雄編『宮武外骨著作集 第三巻』、河出書房新社、一九八八年）二二六～二四四頁参照。
- (44) 前掲大島美津子「大久保支配体制下の府県統治」、前掲松尾正人『廃藩置県の研究』、前掲勝田政治『廃藩置県 「明治国家」 が生まれた日』参照。
- (45) 註44。
- (46) 奥田晴樹「地租改正研究からの出発」（『地方史研究』第三二八号、二〇〇七年）、横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波書店、二〇一八年）などを参照。
- (47) 石川県立歴史博物館図録『春季特別展 明治維新と石川県誕生』（二〇一八年）四七、一〇〇～一〇一頁。
- (48) 『石川県史料 第二巻』（石川県立図書館、一九七二年）一一九～一二八頁参照。
- (49) 奥田晴樹「七尾県の歴史的考察」（『立正大学人文科学研究年報』第五二号、二〇一五年）。
- (50) 「移庁ノ儀ニ付伺〔明治五年一〇月二〇日〕」（『公文録』第一〇八卷、国立公文書館所蔵）。
- (51) 例えば、現在の富山県の前身である新川県では、明治五年県庁をわざわざ富山から魚津へ移し旧加賀藩の郡代役所をそのまま庁舎として利用した。なお、翌年には再び県庁は富山へ復帰しており、背景には陸軍省所管であった旧富山城の使用が政府に認められたことが関係している（広田寿三郎「新川県庁が魚津に置かれた顛末」、『富山史壇』第五八号、一九七四年）。
- (52) 「西郷・大久保ほか宛内田書簡〔明治四年一〇月五日付〕」（前掲『大久保利通関係文書 二』、一一〇～一二頁）。
- (53) 陸義猶は金沢藩からの命で、明治二年に九州諸藩の視察を行っており、翌三年には鹿児島を訪問した。その際、西郷らの藩政改革に感銘を受けたという（陸義猶「大久保内務卿暗殺事件の真相 三」、『加越能時報』第二〇七号、一九〇八年参照）。この後、明治七年には杉村・陸らが中心になって、本県最初の士族政治結社「忠告社」が結成される。忠告社は内田県政の一大与党として勢力を誇り、社員は金沢及び大聖寺の士族を網羅して一〇〇〇人を越えたという。忠告社については、森山誠一「加越能自由民権運動史料（四） 加賀「忠告社」関係資料」（『金沢経済大学論集』第二五巻第三号、一九九二年）を参照。
- ちなみに、内田は金沢への赴任に際して鹿児島出身者を多数引き連れて県官吏に据えることはしていない。内田に付き従って来たのは、従僕と当時一〇代の書生（のち水本兼孝と改名）の二名であったという（前掲内田政彦「我可父乃佛」参照）。
- (54) 『法令全書 明治四年』（内閣官報局、一九二二年）一一四頁。

- (55) 「大久保ほか宛内田書簡〔明治四年一〇月一六日付〕」（前掲『大久保利通関係文書 二』、九六～九七頁）。
- (56) 「大久保宛内田書簡〔一〇月二三日付〕」（前掲『大久保利通関係文書 二』、一一三～一四頁）。
- (57) 「草薙中属 東京出張所詰辞令〔明治六年一〇月一七日〕」石川県立歴史博物館所蔵。前掲図録『春季特別展 明治維新と石川県誕生』、四一、九九頁参照。
- (58) 後藤靖「士族授産」『国史大辞典』、吉川弘文館）の項を参照。前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、七頁。
また、同七年に租税の金納化をすすめる大蔵卿大隈重信へ対して、内田は反対意見を提出している（「地租に米納を許す意見〔明治七年四月一〇日〕」（松方家文書、国立公文書館所蔵）。意見書が石川県租税課の権中属細川忠明の建言書をも添えて提出されている点は、看過しがたい。これをもって、内田が保守的な考えを持つ人物であることの証左と見ることはできよう。しかし、西南戦争以後の不換紙幣増発によって生じた紙幣価値の下落と米価の高騰による財政危機をめぐって、政府首脳の岩倉具視らが「地租米納論」を唱えて政局の混乱を招いた事態を考え合わせると、内田の慎重さや用意周到さがうかがえるといえる。
- (59) 前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、同「内田政風と初期石川県」参照。
- (60) 樫山和民「有司専制政権と島津久光」『書陵部紀要』第三三号、一九七一年、前掲刑部芳則「廃藩置県後の島津久光と麿香間祇候」、前掲久保正明「明治六年政変後の島津久光派」などを参照。
- (61) 忠告社幹部であった草薙尚志は、県令内田の下で旧金沢藩兵の士官から県官吏に登用された。官吏として地券交付・地租改正事業の責任者だったが、内田が辞した後、免官となる。このため政府の督励を前にして各県が改租事業に邁進していた明治八年の時点で、本県では事業が停滞せざるを得ない事情が生じたと指摘されている（「地租改正二付陳情書〔明治八年九月〕」十村加藤家文書、羽咋市歴史民俗資料館所蔵。奥田晴樹「地租改正と割地慣行」、岩田書院、二〇一二年を参照）。
- (62) 久光の意見書については、「明治五年六月、鹿児島に幸中の天皇に差し出した彼の一四カ条意見書は、たちまちのうちに全国に流布し、『タイムズ』にも報道される」と、広範な流布が指摘されている（宮地正人「幕末維新期の国家と外交」、『講座日本歴史七 近代一』、東京大学出版会、一九八五年、六九頁）。
- (63) 前掲芳即正『島津久光と明治維新』参照。
- (64) 前掲刑部芳則「廃藩置県後の島津久光と麿香間祇候」参照。
- (65) 「客歴」（前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収）には、「旧君ノ情誼卜論旨ノ同一ナルヲ以テ、専ラ此間ニ周旋ヲ努ム」という記述があり、内田が久光のため奔走した理由をうかがうことができる。
- (66) 前掲樫山和民「有司専制政権と島津久光」参照。
- (67) 註63。
- (68) 前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」一一～一二頁。家近良樹『西郷隆盛』（ミネルヴァ書房（日本評伝選）、二〇一七年）四八五頁。
- (69) 日付は内田自筆の履歴書類による。四月三日や四日とする文献もある。
- (70) 松尾千歳『人をおくるく 西郷隆盛と薩摩』（吉川弘文館、二〇一四年）一一〇～一二二頁。前掲家近良樹『西郷隆盛』、五一五頁。
- (71) 「官歴」（前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収）。
- (72) 「史談会宛二宮権次郎書簡〔明治四三年〕」（前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収）。
- (73) 「金沢ノ景況報告書写進達〔明治一〇年三月三日〕」（国立公文書館所蔵「岩倉具視関係文書」）。

(74) 大久保利通暗殺事件については、遠矢浩規『利通暗殺 紀尾井町事件の基礎的研究』(行人社、一九八六年)、拙稿「紀尾井町事件」(『石川の歴史遺産セミナー講演録 第二九〇三〇回』、石川県立歴史博物館、二〇一九年)を参照。

(75) 「川路利良宛奥村陟・木村定勝連名報告(明治二年五月二日)」、『伊藤博文関係文書 四』塙書房、一九七六年、一五一頁。

なお、警視局権大警部奥村陟については、明治三年の金沢藩兵名簿に同姓同名の人物が確認できるため元金沢藩士の可能性がある(前掲『加賀藩史料 藩末篇下巻』、一一八五頁)。また、戒厳令施行時以外、郵便検閲を認める法令はないが(戒厳令は明治一五年八月制定)、公安警察は民権運動家や不平士族の郵便を法的根拠なしに開封・検閲していたことがうかがえる。

(76) 第十五国立銀行は、華族財産の保全のため明治一〇年五月に開業した。この銀行は華族の金禄公債を資本金とし、株主を華族に限定した。また、拠出は各自の自由意志にまかせず、半ば強制的であり、かつ株券の分割を認めず、質入・売却なども禁じた。

(77) 寺尾美保「旧藩の慣習と家政の近代化との統合」『日本の華族』、新人物往来社、二〇一〇年)参照。

(78) 註77。

(79) 前掲『明治ニュース事典 第五巻』七二頁。

(80) 「官歴」(前掲内田政彦「我可父乃佛」に所収)。

(81) 前掲内田政彦「我可父乃佛」には、政風の爵位請願(明治二六年)・恩典追願(明治三一年)の提出書類一式の写しや、島津両公爵の証明書の写しが綴られている。

(82) 註80。

(83) 註81。

(84) 御厨貴「地方制度改革と民権運動の展開」(井上光貞ほか編『日本歴史大系 第四巻近代Ⅰ』、山川出版社、一九八七年)四九七～四九九頁、前掲奥田晴樹「石川県成立の歴史的考察」、同「内田政風と初期石川県」などを参照。

美人ツーリズムの成立（上）

―「加賀美人」の系譜―

一 課題

特定地域の女性をひとくくりに美人と表象・批評する、いわゆる「当地美人」なるイメージがある。「当地」の地理的水準は、集落から町、地方までさまざまであり、またイメージの抱き方もいろいろである⁽¹⁾。

たとえば、数年前、奥能登地方で灘廻り（海女の行商）の調査を進めていた折、年配の男性から海士町の海女は美人だと聞いた。特定の地区を舞台にしたイメージだが、個人的な印象批評に近いものである。

地区住民が共有している場合もある。かほく市高松町長柄での聴取によれば「高松町長柄のみや（宮）の神様は美しい女神なので、長良

大門 哲

へ嫁にくりや皆美人になる」と伝わるという。また『高松町史』には、「若緑地区の若神様は毎年一度川で洗うことになっていたが、いちど美しく彩色しようとしたところ、神様はこれでよいといった。それ以来、若緑の女性は化粧しなくてもきれい」とみえる⁽²⁾。

ここで対象とするのはこのような個人や町のレベルではなく、都市・地方レベルの美人イメージについてである。京美人、博多美人、秋田美人など、盛んにWEBやマスメディアで関連情報をみることができるが、本稿では金沢を主要舞台にして生まれた加賀美人・金沢美人について、その成立と展開を検証する。

このような都市レベルのイメージの成立背景については一般書籍などで、古都や城下町などの歴史的環境や、雨雪が多いなどの自然環境をとりあげたものが多くみられるが、いうまでもなく恣意的な解釈に

すぎない。重要なのはご当地美人とは人々のいかなる欲望や社会意識のもとで成立し展開をみせたのかを読み解くことである。管見のかぎりかかるイメージ史的な視点からの研究がみられるのは新潟（越後）美人のみである³⁾。

浅倉有子は越後美人が知られるようになるのは文化から天保期にかけてで、背景には一七世紀までは列島の境界とされる陸奥地方が美人の産地とされたのに対し一九世紀に入ると越後が境界視されるようになったこと、また経済的な発展があると説く。

小林隆幸は新潟の芸娼妓たちを美しいとする印象批評は江戸時代からみられるが、新潟美人というイメージが定着するのは明治以降で、当初は玄人女性の資質が批評の対象となったとし、また写真がイメージの流通に大きな影響をもたらしたとする。

両氏の研究は数少ない成果として貴重であるが、ご当地美人研究を含め旧来の美人イメージ研究において欠落しているのは廓の消費との関係である。戦前期における美人は芸妓を前提とし、そして美人写真は実質、廓の宣伝媒体であった点、美人イメージと廓の消費を連動させて把握する必要がある。そこで、まず上編で加賀美人イメージの成立と展開について検討し、あらためて下編で金沢の廓の近代について把握し、双方の関係について考察を加える。

なお、金沢芸妓が活躍した遊興地は現在「茶屋街」と通称されているが、本稿が対象とする明治から戦前期にかけては、新地・廓・遊廓という三通りの通称が一般的であったため、現在の通称は用いず廓と

遊廓を基本的に用いる。ふたつの言葉を選ぶのは以下の歴史的経過を踏まえてである。

従来、指摘されていないが、新地・廓・遊廓の三呼称は時代により利用・使い分けに変化がみられることに留意する必要がある。新聞記事や案内誌をみると、古くは公認地の東西北三廓については、東新地という具合に、慶応三年の復興時の際に付けられた新地で呼ぶのが一般的だったが、明治三〇年頃からしだいに東廓という具合に廓が主流となる。ただし、全国的な廓案内記である大正五年の柳原煙花『諸国廓巡礼』（日本書院）や大正九年の『最新実測金澤市街地図』（橋本忠吾）に東新地・西新地とみえるように大正以降も通称として使われ続けた。

また遊廓という呼称は、明治二年の『石川県下商工便覧』に「遊廓東新地」「遊廓石坂西新地」とあり、また下つて大正年間の新聞に東西北三廓及び主計町を「各遊廓」（大正四年六月六日「北國」）と記載するように、明治二〇年代から公認地をさす際にしばしば用いられるようになった。ただし、遊廓は、東遊廓というような用い方はされず、あくまで全体説明のなかで用いられる程度であった。

大正半ばになると廓と遊廓の使い分けがされるようになる。東西両廓のうち娼妓を本位とする「下町」が消費の拡大を見せることにより、「主計町、北廓、愛宕遊廓の三廓」（大正八年一〇月一八日「北國」）などという具合に、東西両廓の「下町」をそれぞれ愛宕遊廓・石坂遊廓と通称するようになり、東西北三廓及び主計町とならびたつ

独立した区域のような印象が定着した（大正一二年五月一日「北國」、大正一三年一月二日「北陸毎日」）。この結果、金沢の廓数は、大正半ばまで東西北三廓及び主計町を合わせ「四廓」と数えるのが一般的だったが、しだいに愛宕・石坂を加えて「六廓」と数えるようになった（昭和五年九月一日「北國」）。なお、「下町」は「三番丁（町）」とも通称されたが、「三番丁」は実際の住所を厳密にさすわけではなく、色町を表わす換喩に近い。

この大正後半以降の遊廓の前景化という推移を踏まえ、廓・遊廓の記載にあたっては、芸妓を本位とする東西北三廓及び主計町については「廓」、娼妓を本位とする愛宕・石坂については「遊廓」と表記することにする。

二 美人写真の消費史

（一）写真展覧会

では本稿が対象とする加賀美人の歴史はどこまでさかのぼれるだろうか。古くは室町時代の「加賀女」（遊女・白拍子）が原型として想起される⁽⁴⁾。浅倉の視点を援用すれば、「加賀女」には都から見て「加賀」を「境界」領域と位置付ける意識が象られていたと読み取れる。ただし容姿美の消費を目的とする美人イメージの系譜に位置付けるのは無理があろう。

また浅倉は新潟美人の源流を藩政期にまでさかのぼらせたが、その

時代の対象化にも慎重さが必要である。確かに日本における美人消費は、古くは京都島原の遊女を批評した明暦元年（一六五五）の「桃源集」や、明和六年（一七六九）における娘評判記類の流通拡大、同時期の鈴木春信筆美人絵の評判ぶりから藩政期を淵源とできる⁽⁵⁾。

しかしこれらの媒体から具体的な娘の容姿がうかがえるわけではない。評判記は紋切調の美辞麗句で、浮世絵は瓜実顔・切れ長の目・受け口の定型描写で、それぞれ容姿を表すにとどまっている⁽⁶⁾。つまり藩政期までは、あくまで様式／記号化された表現を通し、美人の「評判」を共有するにとどまったと判断できる。

実質、ルックス（容姿美）を純粹に楽しむようになるのは明治以降において写真の登場を待たなければならなかった。美人消費に及ぼした写真の影響については佐久間りかの指摘が鋭い。佐久間は定まった観念的なコードを読み取る浮世絵と異なり、個別の身体的な特徴をあげきたてる写真は「美人」を「読むもの」から「見るもの」へと変化させ、美人イメージを受け取る過程自体も変えてしまったと分析する⁽⁷⁾。

金沢において写真を容姿の売り込みのためにいち早く活用したのは廓であった。石川県立歴史博物館（大鋸コレクション）には明治期撮影の芸妓写真が所蔵されている（写真1）。

種類は名刺判サイズ（約一〇・五×六・三センチメートル）九枚と花札サイズ（約六・三×三・七センチメートル）一八枚、ガラス乾板五枚（約一二・〇×九・〇センチメートル）などである。被写体は東



写真1-1

花札サイズ写真 6.3×3.7cm 「金澤 西廊 吉野屋あだ」

裏面：「明治二十九年曆」「各國煙草問屋 金澤市森下町 花錦本舗 能村次右工門」



写真1-2

名刺版サイズ写真 10.5×6.2cm 芸妓名不明

裏面：「明治廿 年 月 日寫」「石川縣金沢市殿町 寫眞士 小池兵治」



写真1-3

名刺版サイズ写真 10.3×6.2cm 芸妓名不明

裏面：「吉田好二 石川県金澤公園地」、「天下第一ノ美人呼ンデ傾城ト号ズ」（墨書）。



写真1-4 ガラス乾板 12.0×9.0cm 芸妓名不明

京・大阪の芸妓も含まれるようだが、裏面に金沢の写真技師の吉田好二・小池兵治の名がみえるのは、金沢の芸妓と判断できるだろう。

撮影年代は、手札写真の一部に「明治廿 年」の印刷、また「明治二七年」の墨書きがあり、多くは明治二〇年代と判断できる。ただし、吉田撮影の写真は一部、明治一〇年代にさかのぼる可能性がある。

その根拠となるのが写真裏面に印刷された住所である⁽⁸⁾。吉田写真住所から「観音町」版と「金沢公園内」版の二種類に分類できる。観音町での開業時期は、明治一一年一〇月二四日付「石川新聞」に「吉田好二が観音町の寫眞場ハ御巡幸の頃方して營む業の繁昌し」云々とみえることから明治一一年一〇月頃と認められ、また、明治一一年『石川県下商工便覧』に御徒町店が紹介されており、明治二〇年頃に御徒町へ移転したと推測できる。これから「観音町」版は明治一〇年代撮影の可能性が高い。かたや「金沢公園内」版の撮影時期については、公園内の営業時期をうかがえる関連資料を確認できておらず推測の域を出ないが、御徒町時代に出張所があったのかもしれない。

注目されるのは吉田の営業地の観音町・御徒町はいずれも東廓付近に位置していることである。廓附近に写真店を構える例は金沢の写真屋の元祖とされる高山一定でもみとれる。「市内寫眞屋の元祖 高山一之の事」によれば、高山は明治四年に上堤町の飾り職人の家の二階で写真業を始め、まもなくして西廓の入り口に移り、雲月楼という料理屋を営みながら、神明坂下に写真場を置いたという（大正一二年

一二月二〇日「北陸毎日」）。高山の営業状況を見ると、廓は写真館の最大の得意先であったどころか、双方は半ば提携関係にあったように思える。

撮影の時期は正月だろうか。小池兵治の写真館の回顧録によれば、正月や節分に東廓の芸妓が大挙して撮影に訪れたという⁽⁹⁾。芸妓たちは新規顧客の取り込みや馴染み客の繋ぎ止めのための手練手管に、華やかな正月の晴れ姿写真を活用した可能性がある。

顧客との特定の関係を超えて大衆がひろく容姿美／芸妓写真を消費する全国的なきっかけとなるのは、東京の人気芸妓の写真を一堂に集めた明治二四年の浅草・凌雲閣における百美人展覧会とされる⁽¹⁰⁾。

この展覧会が生まれた経過について佐久間りかは美人写真は浮世絵のような紋切型のコードをもたないことから、統一的な美人イメージを創出するために収集が必要となり活発化したと指摘する。卓見であろう⁽¹¹⁾。

金沢では浅草の展覧会から三年後、明治二七年六月に同様の写真展が開催される。「金澤市中の百美人」を投票で募り「見世物」にしようとしたもので、開催目的は共進会の「金儲け」にあった（明治二七年六月一二日「北國」）。

その後の経過をうかがえる資料がみあたらず開催の詳しい状況は不明であるが、実施されていたとすれば、どのような女性が応募したのだろうか。当時、一般の女性が自らの容姿を衆目にさらす機会はなく、またさらすことは非道徳的とされた時代であった点、「金澤市中」

といっても芸妓が前提となったと想定できる。ただし、そうとは断定できない事例が同時期に他県で見出せることを注記しておこう。

福岡県では明治二七年に大神常吉が東中洲の共進館で美人共進会を開催しようと県下をかけまわり士農工商の別なく二万五〇〇〇余人の女性を調べ、四〇〇人を選出した。紹介方法は以下のように前例がないものだった。

「集産場の如き店を開き右の美人をして出品を賣らしめ入場者に自由の観覧を與ふる方法なり。又會場外には一棟の監督室を建設し此所に堅固なる下女を附け置、親子兄弟なりとも男子は一切入れず又他人の出入を禁じ會場の出入口には巡查を配置して警戒せしむることになし」(四月五日「北國」)。販売員として働く様子を見てもらったのである。一般女性を美人として消費する欲望がすでに明治二〇年代には高まっていたことを認められる。

なお、同年五月には写真師吉田好二が、一三歳當時に撮影した東廓の海老屋咲の写真を長さ五尺幅三尺の大額にひきのぼして富山博覧会へ出品している(明治二七年五月二九日「北陸」)。下編で報告するとおり、咲は東廓の芸能発展に尽くした明治後期を代表する名妓であるが、すでに「赤襟」(半玉)時代にその評判が吉田の耳に届くほどの存在だったと想像できる。

博覧会へ芸妓写真が出品されたのは、もともとさまざまな人物の肖像画が展示されていた経緯があり、そのなかには芸妓の絵も相当あったからでなかろうか。たとえば、日本初の西洋裸体画展示で論争を呼

んだ明治二八年の第四回内国勸業博覧会には、東廓の竹米小梅の肖像画が出品されている。新聞は肖像画について「金沢美人の肖像美術品」と説明しており、管見のかぎり、これが「金沢美人」という言葉が確認できる最初の記事である(明治二八年四月一〇日「北國」)。

明治三〇年代に入っても百美人展示の人氣は続いた。明治三三年七月の夕涼みシーズンには「山三」の発起で「金澤藝妓百美人展覧會」が催された。「山三」とは材木町の山本三右衛門の略称で、維新期に一時花開いた卯辰山芝居の興行主も務めた金沢の興行界の重鎮である(大正七年六月二五日「北陸」)。

展示の概要は以下のとおり。「金澤東西北三廓藝妓中より百名の美人を撰拔し、之れをブルマイト引延しの寫眞に調整し、一方犀川口にては野町泉野神社境内に、一方浅野川口にては橋場町ト一亭協樓上に陳列上を設け、入場者をして投票有權者となし、二ヶ月間の豫定を以て汎く投票を募集する筈なるが、其高点者には賞品を贈り百美人の肖像は来る三十五年大阪に於て解説せらるべき内国勸業博覧会へ出品陳列する計畫なりといふ。因に右ブルマイトは目下當地寫眞師小池方に調整中なり」(明治三三年七月五日「北國」)。

境内地を展示会場にした点、いまだ見世物の延長という意識があったとわかるが、実際の展示会場は、境内ではなく「元勸工場跡の階上」(明治三三年七月一二日「北國」)だったようである。

はたして当時の人々は芸妓の写真をどのような思いで見つめたのだろうか。柳田國男は昭和九年「田植えの話」で女の標準は美醜よりも

仕事と考えられたと指摘したが⁽¹²⁾、それは農村に限ったことではなからう。日々の労働に明け暮れ、美装に時間・金を費やす余裕などなかった当時、芸妓とは圧倒的な美をほこる存在であったと想像できる。

芸妓の美に対する大衆の感覚を物語るのが明治二十七年の投稿記事である（二月一日「北國」）。話の舞台は金沢郊外の西念の温泉場。投稿者はそこでひととき目立つ「美形」の女性を見つける。女性の年は一九、二〇歳くらい。笑うとえくぼができ、「中へ家も人も捲込んで仕舞ひさう」な魅力をもった。身なりも豪華で、どうみても「豪富の令嬢か若奥様」。あとで聞くと、「北の新地」の芸妓で、同様の女中と顧客の男をお供に入浴に来ていたとわかったというものである。一般女性とは一線を画す存在感を大衆は感じ取っていたのである。

とうぜん廊に行けない庶民は芸妓を無償で目にできる機会があるとわかれば、意気込んで出掛けた。たとえば、明治二〇年の記事には西廓の楼主一同が大乗寺山で風上げ遊びをするために芸妓を連れ出したところ、「藝妓の後を慕ひ數百の鼻下長連をも見受け」たとある（明治二〇年三月二三日「中越」）。秋の遊山も格好の見物機会となった。明治二十九年の記事には卯辰山へ出掛けた東廓芸妓の「見物旁出掛くる鼻下長連」も少なくなかったとみえる（明治二十九年一〇月一九日「北國」）。

また楼主の葬儀の様子を伝える記事には「野邊送りをなしたるより欲張った色男連は一時間幾何々と云ふ高直い美人を今日は口ハで見

らるると其行列を遙々の處より慕ひ來りしものありたり」とあり、芸妓見物目的で楼主の野邊送りに出掛ける連中がいたことがわかる（明治二十七年二月二三日「北國」）。

芸妓がそろって最前役者の芝居見物に出かける総見も芸妓を間近に見られる機会となった。たとえば明治二十八年に「明日は東廓、明後日は母衣町の美形が何れも總繰り出しにて見物に行く」と云へば、此の二日は舞臺を見るより見物場を見る方がよからう」（明治二十八年九月九日「北國」）とあるように、新聞は大衆の期待を受けて総見の予定まで伝えた。

結果、以下の通り、劇場は芝居ではなく芸妓見物目当ての客が押し寄せることとなった。二十日は東廓藝妓の惣見物とて場内宛ら綺羅星の如く時ならぬ花を咲せて色香を競ひけるが、又た之れを見んとて我先きにと駆付けたる看客非常に夥しくて大人」（明治二十八年九月四日「北國」）。地味な衣類をまとう観客のあいだで芸妓の姿は光り輝いて見えたというわけである。

また休みのそぞろ歩き姿も見物対象となった。明治二十七年に金沢公園を会場に催された官民共同大捷祝賀会の際は、東西北三廓及び主計町・犀川河原の芸妓は祝賀の雰囲氣を樂しむために一丁羅の帶着物を思い思いに着飾り街中に繰り出した。新聞は、麝香の香りを放ちながら街中を歩く様子を「花爛漫、嬋妍とも窈窕とも實に比へん」と、言葉で表現できないほど美しかったと伝える（明治二十七年二月二日「北國」）。

林葉子は、芸妓は一時期、美を通し「絶大な力」をもったと指摘したが⁽¹³⁾、その指摘を敷衍すれば、一連の記事は、芸妓の美は、庶民があこがれても、決して保有できない力であったことを示そう。とすれば美人写真展示の会場の雰囲気も察しがつく。その開催目的を主催者が「見世物」と語ったように、展覧会は庶民には縁遠い「美」を感受できる、さらには廓という異世界をのぞきみることもできる、またない機会として受容されたと想像できる。それは神仏のご開帳に通じる視覚体験でなかったろうか。

しだいに写真技術の発展により写真自体が珍しくなくなることもあり、大正に入ると美人写真展の開催を確認できなくなる。しかし、戦前期まで庶民相手に細々と各地で催されていたのだろう。昭和十一年には、金沢市の英町商工会が納涼売り出しにあわせ、「金澤美人写真五人明し」と銘打ち、各店頭に主計町の芸妓の写真を掲げた（昭和十一年八月五日「北國」）。

(二) 絵葉書と写真集

① 絵葉書

明治二〇年代、美人／芸妓写真は展覧会という場で消費されたが、明治三〇年頃になると、写真を個人的に消費できるようになる。当初は商品ではなく景品として入手できた。

明治二十九年、東京日本橋の清水開花堂は、「美人石鹼」の消費を促すため、芸妓の写真をおまけとしてはさみこむサービスを開始した。

全国各地に頒布された写真は一種。被写体は販売する地域におうじて地元芸妓から選ばれた。

金沢からは東・西両廓の芸妓が数一〇人採用された（明治二十九年四月二十六日「北國」）。この戦略が評判を呼んだのか、翌三〇年には別会社「鷹錨印寫真付葡萄酒」を売りだし、「全国到る處の有名なる美人の寫真」を商品にはさみこむサービスを行った（明治三〇年七月九日「北陸」）。写真の具体的な規格は不明だが、花札サイズのようなものだったのだろう（図）。

明治三〇年代にはいると全国的に芸妓写真が商品として流通するようになる。たとえば、明治三十一年一月一日付「北國新聞」には大阪の敬業社が「新奇絶妙 活動美人珍寫真」を三〇枚セットで甲六〇銭、乙三六銭で発売するという広告が載っており、大坂の芸妓写真が出回るようになったと想像できる。ちなみに商品名にみえる「珍写真」とはなにか。広告の惹句には「活人間の如く」「自ら舞ひ自ら踊る光線學上不思議の發明」とある。レンチキュラーのような仕組みだったのだろうか。

実際に大衆レベルにまで芸妓写真が出回るのは、明治三十三年に私製葉書が認可され全国的に絵葉書が人気を集めるようになってからだろう。石川県では明治三十八年頃に大流行を迎え、美術絵葉書・美人絵葉書、風景絵葉書、ポンチ絵葉書などさまざまな種類が出回り（明治三十八年九月二五日「北國」）、宇都宮書店が発起人となり絵葉書交換会も組織された（明治三十八年十一月一日「北國」）。

鷹錨印寫眞

付葡萄酒には

全國到處の有名なる

美人の寫眞

挿入しあり誠に御購求

の上味の美にして且意

匠の高尚なることを知り

玉へ

家端印寫眞付葡萄酒は小店多年賣來の上優最良純粋葡萄酒へ頗る滋養力に富みたる數種の良劑を配

合し何人の口舌にも通ずるもの體邊せしめたるに付大方諸君各々の健康なることとを問はず御飲用

の上益々其の身の健全を保たれんとす

發賣元

大販

賣所

同

同

賣捌所は各地到る所の洋酒洋物店及藥舖にあり

大坂萬壽橋二丁目（電話百八十五番）

洋酒問屋

山崎

中屋

藤坂

野澤

同

能登七尾町

同

同

同

同

松下善四郎

三野彌吉

春木清兵衛

金田又右衛門

同

同

酒葡萄酒眞寫印錨鷹

図 美人写真付葡萄酒の広告 明治30年7月9日「北國新聞」

右の流行を受け金沢の芸妓を被写体とする絵葉書も流通するようになる¹⁴⁾。明治四四年には北國新聞社が「金沢芸妓十秀」と題し芸妓の人氣募集を行い、上位一〇人の絵葉書を森下町の能村商店の調整で発行している(明治四四年六月二一日「北國」)。

このような美人絵葉書の流通とともにひそかに消費をみたのが「裸体美人」絵葉書である。明治三五年、南町の勸工場で一枚二〇銭から三〇銭で販売。市内の写真師も盛んに密売していたようで、おもに購入者は兵士・学生で、ウラジオストツクまで密輸出するものも多かったという（明治三五年四月一〇日「北國」）。

また明治三八年には花魁を描いた絵葉書や、すかせば陰部がみえる三枚合わせの裸体半身美人写真、春画を描いた陶器も販売され、警察の取り締まりをうけている（明治三八年四月一日「北國」）。絵葉書ブームはボルノグラフィの消費も日常化させていったと判断できる。

②写真集と観光案内

明治三〇年代後半になると芸妓を一覧できる写真集が登場する。金沢でのさがけは明治三七年に蛤坂・島田写真館が刊行した「金沢市西廓百美人寫眞帳」である（明治三七年六月一日「北國」）。原本を確認できず内容は不明であるが、特定の廓を舞台としている点、廓案内の役割をもったと想定できる。

このような廓案内の源流をたどれば、妓楼・芸妓・料金を一覧化させた江戸・東京の「吉原細見」があり、金沢でも同様の案内誌がわずかだが刊行されている。たとえば、原本は所在不明だが、天保二年

(一八三二)には集雅堂から「廓のにぎはひ西廓之部」が発刊¹⁵⁾。同年、藩により廓は閉鎖されたため、以降しばらく案内誌はみえないが、慶応三年(一八六七)の営業再公許後は、『菊くらべ(新両地案内)』(金沢市立玉川図書館蔵)が刊行される。

刊行ラッシュを迎えるのは明治二〇年代。同二〇年、吐香情史が序文をつづった「金澤芸妓見立」(明治一九年鶴見兵太郎『金澤芸妓風俗』か)を東廓の人気芸妓・江戸屋鉄が出版する(明治二〇年七月一二日「中越」)。その後、二四年『金城三廓花の見立』(金沢市立玉川図書館蔵)、同年『三遊廓色員録花つくし』(西尾市岩瀬文庫蔵)、二五年『ひたちおび』(石川県立歴史博物館蔵、三九年『廓案内』(玉川図書館蔵)が、また番付としては明治二五年『東新地藝娼勉強クラへ身立鏡』(個人蔵)が出版される。これらの出版状況をみると、廓の消費は明治二〇年代に急速に拡大したと想定できる。なお『三遊廓色員録花つくし』は二四年一〇月に風俗壊乱の影響があるため内務省より発売頒布禁止指示が出ている(明治二四年一〇月一〇日「自由の警鐘」)。ユニークなのは『ひたちおび』で、金沢の「東新地・西新地・北新地・犀川・浅野川」、「七尾常盤町」、「富山桜町」、「福井塩町・魚町」の芸妓計八三人のほかに地役者一六人の名が列挙されている。当時の人びとは視覚文化にかかわる人気者として芸妓と役者を同じ位相に位置付けていたことが読み取れよう。

これらの案内記は文字での紹介にとどまり芸妓たちの容姿は不明だった点、既述の西廓の美人写真集は画期的な案内誌として消費され

たと想像でき、また当時は西廓が東廓に先んじて積極的な広報を展開していたと判断される。

西廓がこのような写真帳を刊行した背景は二つ考えられる。一つは明治三五年に東京・吉原で、集客減少対策として案内誌「吉原細見」に写真を掲載する工夫が初めて行われた影響がある¹⁶⁾。

二つ目に明治三十一年に鉄道が敷設され、廓とは馴染みのなかった加賀南部や金沢近郊の豪農、県外から旅行者の利用を期待できるようになったことをあげられる。金沢の芸妓に関する事前情報をまったくもない遠方の客にとって写真集は芸妓を見定められる唯一の媒体となったのだろう。

同時期には、芸妓は写真帳だけでなく金沢の観光ガイドブックでも写真紹介されるようになる。明治三六年、金沢実業界が杉本利平次編『金沢とその周辺/Kanazawa and its environs』を刊行する。日本語と英語を併記し、左表紙の体裁をもつ同書は外国人を读者に想定した石川県初のガイドブックであった。芸妓は「Beauties in Kanazawa」のタイトルで計一七ページにわたり、東二三人(内ターボ三人)、西二七人(内ターボ二)、北八人が紹介された(写真2)。明治三八年には右書の表紙と表題をさしかえた西村弥三郎『金澤みやげ』(北陸戦報社)が刊行される。

金沢の名所や有名人を紹介した明治四三年『金沢景物大観』(北陸出版協会)は、「金城の名花」というタイトルのもと、東一八人・西二六人・北二二人・主計町九人・愛宕一五人計八二人の芸妓を四ペー



写真2 『金沢とその周辺／Kanazawa and its environs』 明治36年
上段見出しは「Beauties in Kanazawa」。



写真3 芸妓写真アルバム 縦13.0 横18.5 厚4.0cm 石川県立歴史博物館蔵

ジで紹介した。愛宕とは冒頭にしめたように娼妓を本位とする遊廓を指す可能性があるが、写真は娼妓なのか芸妓なのか職域は不明である。

これら観光案内誌の写真ページのタイトル「Beauties in Kanazawa」・「金城の名花」はあきらかに金沢美人・加賀美人へとつながっていく表現である。つまり、「金沢美人」イメージは、明治三〇年代半ば、観光案内誌の刊行をもってその成立が促されたといえる。

これら観光案内で美人が紹介された時期は絵葉書が大ブームを迎えた時期である。案内誌に掲載された写真は絵葉書や生写真としても販売された可能性がある。それを示唆するのが石川県立歴史博物館所蔵の芸妓写真アルバムである（写真3）。折本に最大一四・〇×一〇・〇センチメートル、最小四・〇×六・〇センチメートルの生写真が計三一枚貼付されている。

その画像は明治三六年刊行の『金沢とその周辺』と一部合致しており、撮影年代は明治三六年頃と断定できる。注目されるのはその内訳で、西廓二五枚、東廓四枚、主計町一枚、小松一枚であり、ほとんどが西廓でしめられる。もしかしたら、明治三七年刊行の『金沢市西廓百美人寫真帳』掲載写真と重複するものがあるかもしれない。

（三）新聞連載される芸妓

絵葉書や写真帳などを見てきたが、芸妓の容姿鑑賞をより身近にし

た媒体として看過できないのが新聞である。従来の美人イメージ史研究でも等閑視されてきた資料群である。

新聞紙上では明治二、三〇年代にかけて毎日のように芸妓の近況やゴシップが報じられていた¹⁷⁾。とりわけ情報を中心となったのが色恋である。新聞社には金沢にとどまらず大聖寺・小松・松任・金石・津幡・七尾・輪島など県内各地から芸妓にかかわる艷種が寄せられ、紙面の少なからぬスペースがそれで埋められた。

明治四〇年代に入ると、芸妓にかかわる記事は従来のゴシップ記事に加えて、芸妓一人ひとりを写真入りで紹介する記事が増加していく（写真4）。つまり、マスメディア自体が廓案内誌の役目をもつようになっていくのである。



写真4

明治44年9月27日「北陸新聞」

「浅野屋音重」は名妓とされた浅野屋音羽の娘で、自身も名妓と称えられた。

そのさがけは「北陸新聞」で、明治四一年四月二五日より夏にか
け「花柳月旦」と題し、県内各地の芸妓を紹介した。八月份が欠落し
ているため総人数は判断できないが、七月末で七六人を数えた。第一
回目は西廓の平田屋茂で、「何となく愁いを帶た所は、海棠の雨に惱
むにさも似たりで、何處やら可愛い氣のする妓だ」云々と容姿美やた
たずまいについてコメントしている（四月二五日「北陸」）。また別の
芸妓については「縹緞は二の町だが、義太夫父子は至つて上手、よい
喉を器用に振り回し」云々と芸能者としての能力を高く評価してい
る（七月三一日「北陸」）。

明治四三年一月からは一年間をかけて「花くらべ」と題し北陸各地
の芸妓二四二人を写真入りで紹介する長期連載が行なわれた（明治四
三年一月二日～二月二四日「北陸」）。また同年一月には「北國
新聞」が「寫真判断」というタイトルで顔写真を掲載し、人相骨相占
いの連載を実施。掲載された人物三三人のうち軍部や政財界の有名男
性が九人、ほかはすべて芸妓でしめられた。ちなみに第一回は東廓の
越濱女将だった（十一月一日～十一月二三日「北陸」）。

明治四四年一月には「北國新聞」が金沢の東西北三廓及び主計町
の芸妓計四六人を写真入りで紹介する「色ごろも」の連載を開始（明
治四四年一〇月三一日～十二月二四日「北國」）。同年八月からは「北
陸新聞」が見出しなしで石川・福井の芸妓八四人を写真・プロフィール
入りで紹介する（四四年八月一七日～十一月二九日「北陸」）。

プロフィールの内容を参考までにあげておこう。「殿初初榮（西廓）

／徳川時代の美人に酷似して居るとて若い道樂の畫工連に騒がれて居
る。顔の輪廓の圓いのも同じく性質もまた圓く出來て居て、曾て朋輩
衆から怨みを受けたことがないと云ふ」（明治四四年二月一七日
「北國」）。「徳川美人」に似ているという評価に明治ならではの時代性
を見て取れる。

このような連載は大正以降も続く。たとえば大正三年には北國新聞
は東西北三廓及び主計町のほか小松・松任・七尾・山中・山代の芸妓
の全身写真を紹介する連載を開始。タイトルは季節ごとにかわり、一
月中旬までは「初すがた」で襟直したばかりの芸妓を紹介。同月後
半以降は「春すがた」、四月三〇日以降は「百姿百態」と題し人気芸
妓を紹介。紹介人数は計九三人。ほかタイトルはつかないが洋装した
芸妓らしき女性の写真が連載途中に掲載されている（大正三年六月二
七日「北國」）。

大正五年には芸妓の幼少・赤襟時代と白襟時代の写真を並べその個
性や成長ふりを紹介するユニークな連載「今昔姿くらべ」で計四四人
を紹介（大正五年六月六日～九月二二日「北國」）。たとえば、主計町
の藤の家ぼんたについて「藝妓の投票に第一の高點を占めて突出し
早々全盛の名を唄はれたのは西廓に居つた時のこと、其後主計町の野
村屋へ轉じ更に姉と共に一旗擧たのが藤の家ぼんた。呉座谷の樓主が
仕込んだだけに踊は主計町でも鈴子ぼんた（森龜）、初枝と四人組に
数へらるる達者さ殊に近來は大鼓に丹精を凝して指頭に血汐の花を咲
かすこともある（後略）」と、その芸の精進ふりを紹介している（六

月二八日「北國」。昭和に入っても芸妓の紹介は定番記事であり、たとえば昭和十一年の春には「艶色春姿」と題し、計一〇人を紹介している（三月一三日～五月一五日「北國」）

（四）『城下の百姿』の出版

絵葉書、写真集の出版、新聞連載から明治後期以降、美人／芸妓にかかわる写真が急速に消費拡大をみせたことを見て取れるが、大正期に入ると、かつてない写真集『城下の百姿』が刊行される。

明治三〇年代に出版された『金沢とその周辺／Kanazawa and its environs』などは一ページに複数の芸妓写真をならべる紙面構成だったが、『城下の百姿』は市内四廓の芸妓を一頁に一人あて上下二巻にわたって掲載する豪華版だった。

上巻の発行は大正三年一月二七日。値段は一円五〇銭。背表紙には「金澤藝妓の粹」、表表紙は「城下の百姿上巻」とある。「発行並編輯」は「幸正重太郎」。その緒言には、当初、一〇〇人を一冊にまとめる予定だったが、締め切りまでに写真が準備できず、また新年撮影の写真を使いたかったため、上巻にいったん五〇人だけを載せ、あらためて下巻に一、二流の芸妓を掲げることにしたとある。掲載された芸妓数は、西一九人、東一二人、北一二人、主計町八人の計五一人で、全身像を撮影構図とする。

下巻の発行は同年六月一〇日。背表紙に「城下の百姿（下巻）改題百美人花揃ひ 六月號」、表表紙に「金澤百美人花揃ひ」とある。下

巻本という位置づけだが、上巻掲載の写真も再録しており、実質、上巻の大幅な増補改訂版といえる。掲載人数は西四六人、東三一人、主計町一二人、北一三人、金石二人、七尾・松任・小松・飯田・大聖寺各一人の計一〇九人。

下巻は上巻と異なり、写真のあとに芸妓一人ひとりの特徴や経歴をかなり詳しく紹介している。一例を紹介しよう。「野村屋愛子 愛子は野村屋の養女で新八田屋女将などと兄弟である。此妓は金沢代表的美人とまで唄はれ、曾て三越呉服店のモデルや花屋敷の菊人形などに紹介されてゐた有数の藝者である。至つて温順な表情に富むだ人氣もので一時全盛を極めたが好きな酒が過ぎてか病氣を起し金澤病院に入院して漸と此間退院したばツかりだったが、又々薬瓶と親しんで居る、此妓は幼少より多くの師匠に就て踊、太鼓、三味、生花、端唄、長唄を習つてあらゆる席へ現はれて嬌名を轟かしたものである」

大正三年の金沢の芸妓総数は五三八名で、写真集に紹介された数はその五分の一以下の一〇二名である。野村屋愛子の紹介文からわかるように、被写体となったのは、容貌だけでなく芸も優れた一流芸妓だったと想像できる。

なお、同書下巻の巻末には朱印を押した金沢十美人投票用紙四枚が挟まれており、写真集のなかから一〇名を投票し、当選した芸妓をコロタイプにして写し出し、さらに若手新花や県下各郡の美人を加え画報を刊行する予定とみえるが、その後の刊行実績は確認できない。

大正期の美人写真の特徴としてこのような豪華本のほかに芸妓の水

着絵葉書をあげられる。大正二年、芸妓の海水浴姿一二人の写真絵葉書が販売され、風俗を害するものとして警察に取り押さえられた（大正二年七月二十七日「北國」）。しかし、取り締まりの効果はなく、大正七年頃には水着写真がブームとなっていく。

同年の記事には「近時一般青年間に海水浴場に於ける婦人裸体其他性慾を唆る如き繪葉書を取り遣りするもの多く、殊に夏季七八月頃は毎年此種の葉書を差出すものあり」（大正七年七月二日「北陸」）とみえる。芸妓写真は顧客が容姿をめであるという水準を越えて、性的な欲望を直接むける媒体として流通するようになったといえる。

大正期は金沢美人という言葉にしても注目すべき年となる⁽¹⁸⁾。明治四五年四月には金沢花屋敷なる躑躅・菊人形の興行小屋で、「金澤美人人形」と題し、東廓・山田君子、西廓・月見薫、北廓・島田錦太、主計町・野村屋愛子の「似顔人形」、つまり生人形が飾



写真5 金澤花屋敷絵葉書「金澤芸妓演遊び」個人蔵

られた。人形は同年秋、大正元年一〇月にも登場。このときは兼六公園の霞ヶ池池畔を背景に人形を飾った。さらに翌一〇年には新作「金澤芸妓演遊び」が飾られ（写真5）、新聞は「金澤の美人と東京の美人の何つちが美しいか」比べてみようという関心を誘った（大正二年一〇月一七日「北陸」）。

写真商品にも金沢美人が多用されるようになる。前掲の豪華写真集の新聞広告には「金澤美人花揃ひ」と見出しが躍る（大正三年六月八日「北國」）。大正五年には「金澤美人」と題した葉書写真が発売される。被写体については発売予告記事に「市内東廓と主計町での若手藝妓の葉書が去年あたりから流行して来た。西廓と北廓とは追々撮して貰うことになるだらう」とあり、まず東廓・主計町の芸妓三、四〇人が選ばれたとわかる（大正五年三月二十九日「北國」）。これらの動向から、金沢美人という言葉は大正初期以降に定着したと判断できる。

三 美人言説の歴史

（一）美人零落論の時代

ここまで写真を素材とし大正期までの美人イメージの展開を追ってきたが、写真消費の拡大とあわせて注目したいのが一定の土地の女性を一からげに美人と批評する言説である。その源流として注目したいのは明治半ばより増加する金沢の女性全般を対象とする批評記事である。

地元新聞を通覧すると、「北國新聞」が、明治二六年に「金澤の女子」(九月一三日)・「名古屋女と金沢女」(二月一三日)、明治三三年に「女」(九月二九日)、明治三五年に「金沢の女界風俗」(十一月一日)、明治四二年に「金澤女」(九月三、五日/二回連載)・「金澤の女」(二月一日/一四日/三回連載)、明治四三年に「金澤の女風俗」(二月一八日)を、また「北陸新聞」は明治四三年に「北陸の美人」(二月二〇日/二五日/六回連載)、明治四四年に「時代美人」(二月一六・一八・一九日/三回連載)、大正二年に「北陸の女」(二月七日/二月三日/四〇回連載)などを掲載している。

批評の内容は三種類にわかれる。第一が良妻賢母規範にもとづく批評である。明治三二年「女」は「金澤に出戻りの婦人が多いとサ。或る外人がいった。十九の花嫁さんは今度で三度び目だといふのが幾らでもある。女の方でも離縁をなんとも思はず、男の方でも矢鱈に妻を取替へて」云々、あるいは金沢には「女の破戸漢が多い」などと、夫婦関係が不安定であり、その要因は女性の気質によると指摘する。

また明治三五年の「金澤の女界風俗」は、男子の望みから関東の婦人は凜乎として気高くあらうとするが、一方、金沢の娘たちは妖艶・優美を男子がもとめることから上から下まで赤色を好むと、品のなさを批判する。

明治四二年の「金澤女」は金石往還で車力をしたり、頭に桶をのせ売り歩いたり、また芸娼妓が随分多いと印象を語り、女は家で起居し、家で働けるよう家庭工業の発展を期すべきだと説き、また石川県

が元大藩でありなら、貧乏になったのは妻女の経済思想の影響によると、女性の労働形態や経済能力を批判する。

第二は装いの流行の遅れを指摘するもので、明治四三年「金澤の女風俗」は、女の風俗は上方から江戸風になつたが、髪型・背負揚げ・着物の色彩が東京にくらべ遅れていると指摘する。

第三が美人を主題とするものである。その趣旨は二段階に変化している。第一段階は美人零落論ともいうべき内容である。たとえば、明治二六年の「金澤の女子」は「関東は美女を出す處にあらず、美女を出す處は京都を第一とし、越後、名古屋之れに次ぐと稱す、然れども京女は細きに失し、越婦は太きに過ぎ、名古屋の婦女に至りては風韻雅致を欠く、唯だ其の細からず太からず、嬌婉優美にして雅致風韻を有するものは金澤の女子歟、金澤の女子が生れ得て天福に富める、洵に羨むべきかな。殊に女子教育の上より見るに、三府四十餘縣の多き、金澤の女子の如く善く教育せられたるものは稀れなり」と金沢の女性は才色兼備であり京都・越後・名古屋を上回ると絶賛する。

とはいえ、個々の人生をみると、「東京の遊廓に於て其娼妓の府縣別中、高點を占むるものは何縣ぞ、誰れか其石川縣たるを知らざらん。而して其石川縣中の九分強は金澤女子なるからは、金澤の不面目此上もなく、其苦界に沈淪せる金澤女子の不幸憫然に堪へず」と苦界に身を落とす者が多いと嘆く。

同年の「名古屋女と金沢女」も、右掲記事と同じく、美人の不幸を嘆く内容で「日本全國中婦人の産物を以て有名なる處を名古屋とな

す」と始まる。内容は藩主徳川宗春が京都の島原を模して廓を設け楽しんだことから、名古屋の人々がひろく遊蕩を好むようになり、内妾外嬖盛んにおこなわれ、結果、倫理道德の廢頹滅却が甚だしいと批判した上で、明治以降、金沢の士族の女性が東京など各地に浮かれ女として売られている状況に触れ、「金沢の士風人心遂にいかなる魔界に運ばるべきか」と糾弾する。

ちなみにこのような美人薄幸観を土台とする批評は、明治三〇年代以降、見かけなくなるが、世間話的な記事では生き続けた。たとえば、明治四四年の記事「薄命の美人」は父を亡くし独り身となった金沢市内の娘ショウの人生を紹介する。金沢・福井・岐阜と各地で悪徳口入屋に娼妓となるよう強引に契約され、貸座敷から逃げ出すという生活を繰り返し、最終的に岐阜の料亭の住み込み酌婦に落ち着くというものである（明治四四年二月七日「北國」）。

（二）混合民族論からご当地比較へ

明治二〇年代の美人言説は写真と同じく芸妓を批評の前提としていたが、明治三〇年代にはいと、芸妓という前提を超えて地域の女性一般を対象とするようになる。対象をひろげる回路となったのが日本人の系譜を多民族・多人種と想定する混合民族論である¹⁹⁾。

明治三〇年ころには美人と混合民族論を関連させた視点がひろがっていったことは金沢医学会通常会で行われた止善堂病院長・山田博士の「美人論」講演会からうかがえる。内容は、日本は元来のコロボツ

クル人種が全滅して、風力と海潮によって漂着した天降人種とアイヌ人と蒙古人種が混合した状況にあるため身体的特徴はさまざまであるとした上で美人の平均的特徴を説こうとしたものである（明治三〇年六月一五日「北國」）。

具体的に地域名をあげた言説が登場するのは以下の明治三四年の記事からである。「飛騨高山の婦人は肌膚細膩にして容姿美なり。能美郡白峯村の婦人亦眉目好し。白峯には平家の落人ありしによると傳ふ。果して然らば高山の民族は何人の血統にや」（明治三四年三月二日「北國」）。

柳田國男の山人論とも通底する視点を見出すことができる。つまり、混合民族論にもとづく視線を基本としつつも、かつ都市の発展や鉄道路の拡大への反動から、それらの影響が及ばぬ山の民に歴史的なロマンチズムを感じ、地元女性を美化するようになったのである。

ちなみに白峰村や高山を美人の産地とする視線はその後も衰えることなくむしろ強化されていく。明治四一年には「美人村」という見出しで、白峰村桑島の女性について「美人系と聞こえた北國の美人を代表する」とし、どの女性も「第一髪の毛は漆のやうに真ッ黒で色は雪のやうにクツキリと白い」と報じた。

注意したいのは素人の女性を美人としてイメージするものの、芸妓を美人の前提とする通念が深い影響をもたらしていたことである。「美人村」桑島の女性の特性についてこう記す。

「女は大概遊藝を知らぬ者はない。甚麼女を掴まへても一寸した手

踊りや三味線を知らぬ者はない。是れは畢竟村の若者等が遊び場がない所から自然の勢ひで遊藝熱が高まつたのだといふ」(明治四一年六月二一日「北國」)。廓とは疎遠な地域にあるため、地区の女性が芸妓の役割をもつたと紹介しているのである。つまり、芸妓の代替的な存在として山の女性を価値づけることで美人とイメージしたわけである。

明治四〇年代になると、混合民族論にもとづく視点を保有しつつ、国内各地の美人を比較する言説が増加する。この言説パターンで注目されるのが、タイトルや説明に頻出する「美人系」という言葉である。当該語彙は現在死語となつたが、国会図書館デジタルライブラリーで検索すると明治三九年刊・栗島狭衣『日本美人史』(尚友館)をさがげにし、昭和二七年まで確認できる。ちなみにその適応範囲は日本にとどまらず、昭和二年の記事には「南米の美人系なるポリビア出身の艶にあでやかな令夫人」(昭和二年七月二〇日「神戸又新日報」とみえ、世界各地に及んだ。

その言葉を定義付けした記述は確認できず意味を明示できないが、初期資料の『日本美人史』の場合、「わが三千年の歴史を貫いて今に傳へられた美人系」とあり、前後の文脈から歴史や風土との関係性の中で美人をまなざす意図をかたどつた言葉だとわかる。

「美人系」は当時の流行語に近かつたのだろう。人気作家の徳田秋聲もその言葉／視点に魅了され、明治四一年「趣味」に「美人と美人系」を発表している⁽²⁰⁾。内容は東京式女と上方女を対比させなが

ら、容姿や性格、着物などについて女性美の特徴を説いた随筆で、最後に「金澤美人」について「色が白く、皮膚が細か」など評価している。美人の対象となる女性は芸妓にとどまらず、「女学生」への言及がみられており、美人系は従来の芸妓を前提とした「美人」とは異なる斬新な視点をかたどつた言葉として歓迎されていたと想像できる。

ただし、徳田秋聲のように東京と上方を対比させ最後に金沢を言及するような叙述構成は異例である。石川県の新聞などで見ると、同時期の叙述パターンは、列島を日本海側と太平洋側にわけて、人種・民族という視点から美を批評する点に見出せる。たとえば、明治三八年四月二六日付の批評記事「美人系」の説明の一部を抜き出そう。

「我日本に於ても越後や京都、名古屋の如きは美人系と稱せらるる處にして這は獨り此地方の女子が藝妓に出稼ぎする故のみならず實際に多くの美人を出すこと非定すべからざる。(中略)其地理學的分布の跡を察するに太平洋岸は名古屋以北以東の地青森に至る迄が醜人系、否な非美人系統に屬し、日本海岸は一般に美人系に屬するものに似たり。而して斯くのごとき現象を造りたる所以は関東系は人種の雑駁にして且つ新らしきに依り日本海岸系の美は人種の古きと純粹に近きによる結果ならんと説く人あり如何のものにや」(明治三八年四月二六日「北國」)。

現在もWEB上に流通する日本海側に美人が多いという言説の原点をここに見出すことができる。日本海側を美人系、太平洋側を非美人系とする根拠は、右掲記事では、人種が日本海側は純粹・古体、太平

洋側は雑駁・新体であると指摘するが、これと真逆の言説もある。明治四四年の記事「時代美人」は、日本海側に美人が多いのは人種の混交の結果と説く。つまり、古代における日本海交流の影響から朝鮮人が漂流してきた土地に美人系統が多いという（明治四四年一二月六日「北陸」）。

このような日本海側美人論が浮上した背景はなにか。日露戦争後、異質の価値をもって表日本と対峙しようとする裏日本イデオロギーが沸騰したことを大前提としてあげられるが⁽²⁾、太平洋側ではなく日本海側が美人の産地となったのは三つの理由を想定できる。

第一が混合民族論との相性のよさである。つまり、日本海を介し大陸と対峙する地理的位置ゆえに、人種・民族の相互影響関係を説明しやすかったことがある。第二が、日清・日露戦争を経て、日本海を国境とする意識が拡大していったことを想像できる。太平洋側からみたとき境界に位置する日本海岸、そこは都市住民が山村を美人村としてまなざすのに似て、ロマンあふれる場所と目に映ったのであろう。

第三に新潟美人の影響がある。新潟美人の著名さはたとえば、全国各地の名妓を紹介した明治四一年の『日本名妓花くらべ第一集』で、掲載人数一〇〇人のうち、東京以外では新潟七名、京都五名、長崎四名、名古屋二名、大阪・広島各一名を数え、新潟がほかを凌駕していることからうかがえ⁽²⁾、新潟美人の名声にひきよせられ日本海沿岸全域が美人の産地とイメージされた可能性を指摘できよう。

（三）「美人となれ」の氾濫

明治三〇年代以降、言説上で芸妓以外の一般女性が美人の批評対象にあがるようになった理由は混合民族論の影響が大きい、ほかに一般女性も、社会に進出したり、都市への外出機会が増大したりし、他者の視線を日常的に意識するようになったことがあろう。

美装をめぐる意識の拡大は、新聞広告の増加で看取できる。とくに目立つ広告は化粧品関連である。明治中期以降、美顔水の新商品の広告が次々と掲載される。

その惹句をみると、明治二八年の「艶顔水」が「顔の色白美にする妙劑」（四月五日「北國」）、同年の「美人泉」が、「美人となれ 美人は最も人に愛せられる」「色を白くし艶を出す」（四月一六日「北國」）、明治二九年の「つやの水」が「肌をやわらかにしつやをよくし」（一月二三日「北國」）、明治三〇年の「キレー水」は「眞の白色美人となるには此薬に限る」（四月二日「北國」）、翌三一年の「肉體美白丸」は服用によって「白色艶美」（一月二〇日「北國」）などと、白い肌となることを煽るもので占められる。

当時の特質として、広告で肌の白さを煽る対象は女性にかぎらなかったことをあげられる。たとえば、明治二八年の「艶顔水」は「男女顔の色を白くつやをだし」（四月五日「北國」）、明治三〇年の「キレー水」は「男女を問はず眞の白色美人となるには此の薬に限る」（四月二日「北國」）などである。

このような男女共有の商品が流通した背景については林葉子の鋭い

指摘がある⁽²³⁾。つまり当時の顔の白色とは単に肌の美しさをしめすだけでなく、性病を意味する黒色の反対の意味をもった。いいかえれば白色への憧憬の背景には、性病の蔓延があつたといえるわけである。

化粧品品の広告で美顔水のほかに目立つのが石鹼である。明治二八年には「色を白くつやをだしきめをこまやかに」にする「新發明御あらひ粉 雪肌」が販売される(四月五日「北國」)。当時は美顔水と同じく美容効果を求めて利用されたとわかる。

このため、化粧品の商品名や惹句には美人が積極的に活用された。明治三四年に青草町の越次郎平が発売した石鹼の商品名は「金城美人石鹼」だつた(十一月三日「北國」)。また明治四〇年には帝國化粧品俱樂部「クラブ洗粉」は、「素顔の東京美人」が(三月二十九日「北國」)、あるいは「各新聞が選定せる百美人」が(一月一六日「北陸」)、愛用していると宣伝している。

明治末期になると、石鹼広告は挿絵にかわり芸妓写真を多用するようになる。明治四四年のクラブ石鹼広告では一五人の芸妓の顔写真が並べられ、また大正三年のツバメ洗粉では「こんなに美しく、こんなに色白に」のイメージとして新橋芸妓の照葉を紹介している(一月一日「北國」)。

ちなみに明治半ばになると美人をめざし整形手術も行われるようになる。明治二九年の記事に、病院の場所是不明だが、「醜婦を美人に變ずる外科手術」という見出しで一八歳の少女の手術例を紹介してい

る。

内容は手頬骨や顎骨を削りつつた手術経過を記したもので、その結果について、「今まで高く突出で居たる頬は見事に圓みを帯び云なき望み通りのものとならん。只其欠點といふべきは頬に刀痕を存すると今迄高き處が低くなりたるため肉と皮に餘裕を生じ口の邊にさやかなる皺を生ぎぜしとの二點なるべし」と記す(明治二九年四月二六日「北國」)。つまり、執刀の影響が顔面に残る稚拙な手術だったわけである。

実際に石川県で美容整形が実施されたとわかるのは明治四一年が最初である。市内河原町に開院した金沢整鼻院に注射手術をして鼻が高くなった女性の写真が公開されている(明治四一年二月二十八日「北國」)。

このほか明治後半には美容注射も行われるようになったのだろうか。明治四二年には美人菌の注射で美人となれるという処方が新聞で紹介されている。美人菌は細菌学者が実験により発見したもので、この菌を肩先に皮下注射すると、菌が血液に混入して活動を始め、蒼白な頬は桜色に染まり、皺は消えさり、「花恥かしき美人」となれるという(明治四二年八月二五日「北國」)。

(四) 北陸美人と美人ツーリズム

ふたたび言説の変化に視点をもどす。明治四〇年以降になると、日本海沿岸を舞台とする美人系批評が登場したことを紹介したが、明治

末以降になると、大陸との交流を視野にいった外向きの視点にかわり、列島内の各都市や各地方との比較を目的とした内向きの言説が主流となっていく⁽²⁴⁾。鉄道網の拡大により都市間の往来が活発化したことが背景にあらう。

このような地域間の比較のなかでは、当初は金沢や富山などの都市名があがることはなく、北国・北陸という地方レベルの設定が一般的だった。ただし、美人批評における北国・北陸は当初、北陸三県をさしたわけではない。明治一九年の中越新聞の娼妓関連記事に「北陸第一等の八百八嬪の名ある越後国」とみえ（三月二十八日「中越」）、明治三六年刊行の羽仁もと子『家庭小話』（内外出版協会）に新潟の女性について「噂に高き北國美人」と説明がみえることから明らかのように、北国美人といえは新潟美人を代表とする意識が強かった。

明治四四年に北國新聞に掲載された「時代美人」なる記事も、「北國美人」の代表地域として新潟県をあげ、一方、「太平洋沿岸は景色が優美であるから美人の顔も何となく悠暢として居る」とする。また、京美人については「北國美人に較ぶると強く締つたところがなく、又體格も發達して居らず、皮膚の色なども綺麗でない」、名古屋美人は「京都よりも幾分か長く、多少神經的なところもあつて眼なども灼としたのは多い」などと批評している（明治四四年二月六日「北陸」）。

そして「北國美人」が生まれる理由について、厳しい自然環境のなかで育つので、「容貌の上にも自然に其感化が現れなければならぬ」。

何となく神經的な相があつて眼などは釣り上り、締つた強い顔になつて氣象も雄々しくなつて來る」と説く。自然環境と美人の関係に着目した視点が初めて登場するわけだが、現代のように美肌との関係性への着目はまったくみられない。

このように北陸美人といえは新潟美人の異称という側面をもちつつも、明治四〇年代になると、新潟ではなく「北陸」三県を美人の産地とする言説も登場してくる。その初見は明治四〇年。アメリカ・シカゴのツリビューン新聞社は世界各地から一般女性の美人写真を集め、世界一を決めるコンテストを計画した。日本では東京の時事新報社が窓口となり、各県の新聞社に協力を要請した。

石川県では北陸新聞社が九月に、北國新聞社が十一月に募集広告を出しているが、その広告に「北陸三県は由来美人系に属し東邦美人國の称あり」とみえる（明治四〇年九月七日「北陸」、同年十一月十七日「北國」）。

ちなみに全国からの応募を踏まえ、新報社は小倉市・仙台市・宇都宮市ほか出身の上位二人の名前を發表した。北國新聞社はこの結果に対し、「由来美人系を誇れる本縣選出五美人の遂に落選を見たるは讀者と共に遺憾とする所なり」と悔しがった（明治四一年三月七日「北國」）。

このコンクールについては井上章一・佐伯順子が指摘するとおり素人を対象とした初の美人コンテストとされる⁽²⁵⁾。しかし、井上が指摘するように実際に素人が容姿を人前にさらすことは社会的にまだ

非難された時代であり、あくまで日本の社会通念とは関係なくアメリカの要望を無理に引き受けて実施した感がある。実際、石川県で、実質、素人を対象とする類似事業が実施されるのは戦後を待たなければならなかった。

このコンクールの場合、あくまで全国からの募集をすすめるにあたり便宜的に北陸を美人の産地としてくくった観があったが、明治末になると、北陸三県の芸妓を対象とする細かな美人批評記事が登場する。その最初は明治四三年の「北陸の美人」で、五回にわたり金沢・富山・高岡・福井・武生・小松・七尾の芸妓を以下のごとく紹介した。

「山田屋の小金は金澤の名花、水月の鹿の子は富山の美人、堀江のお浦は福井の尤物と稱せられて居るが、金澤にも富山にも福井にも此の地に相應の美人が居る。若し格式と番附でいふならば小繁と金八は富山の元老、越又虎、月見時は金澤の横綱、吾妻樓小雪と酒井のお勇は福井の首領だ」と云う具合に、北陸各地の芸妓を具体的に紹介・批評する。

また、この記事では一記者の批評だけにとどまらず、当時、他県から訪れた別の記者の以下のような批評も紹介している。「去年東宮殿下が行啓あらせられた時、東京大坂の新聞記者が澤山入り込んで、此處に端なく三縣の美人論が起つた。金澤がよい富山が上だと甲論乙駁の盛観を呈したが、歸する所は富山には金澤よりも美人が多いという事に一決した（中略）」。

富山が金沢より美人が多いと盛り上がったわけだが、その理由について記事はこう続ける。「金澤では北間屋でも鰯屋でも宴會に出る女は何時も千篇一律で、所謂姐さん株といふものばかりであつた。何處の國でも姐さん株には美人が少くて、塩茄子の様な女が多い。金澤人の目から見ればお虎や時や鈴や小富は名妓であるが、旅の客から見れば勿論美人ではない。之に反して富山では番附に重きを置かずして二流でも三流でも構はぬ美人ばかりを選抜した、故にズラリと現はれた所は、富山の方は頗る陽氣で見榮があつた」（明治四三年一月二一日「北陸」）。つまり、芸妓を座敷に出す場合、金沢は芸を、富山は容姿を重んじたためというわけである。

大正に入ると、連載はさらに長期化する。大正二年、「北陸新聞」は北陸各県の旅行途中に見かけた女性の印象をつづつた「北陸の女」を四〇回にわたり連載する（大正二年一〇月七日〜十二月三日）。内容は金沢の女性に関して、「美人」となるために、教育、表情、服装などに工夫をしなければならぬと説く程度の軽薄なものだが、以下のとおり、雪が美人を生み出すという自然環境・風土との関係を指摘する言説が登場することは注目できる。

「金澤女の美は、亀田鵬齊のいつた半歳一日の晴なしといった、定めなき北國日和と、山水美と、雪の降る寒い國であるために涵養された美である、所謂北國特有の北國美である」（大正二年一月一七日「北陸」）。つまり雪国と美人／美肌を結び付ける現代の言説は大正期を発端とすると判断できる。

以上で紹介した連載「北陸の美人」「北陸の女」で共通する話題として興味深いのは武生美人である。「北陸の美人」には「越前の武生は昔より美人の産地として知られて居る。曾ては福井よりも名花が多く、福井の紳士連は態々武生へ足を運んだ時代もある」（明治四三年一月二五日「北陸」）、「北陸の女」には「時々知人から「越前の武生には美人が多い」といふ評話を聞くことがある」とみえる（大正二年一月二四日「北陸」）。県庁所在地ではない小都市の芸妓を話題にし美人通であることを自慢する風潮が当時生まれていたのだろう。

この後も旅行記という体裁はとらないものの、県外から訪れた有力者らの廓遊び体験をネタにした記事がしばしば掲載された。たとえば、のちに内閣総理大臣を務めた加藤高明が大正四年の金沢訪問後、帰りの汽車のなかで、望月や北間屋で芸妓から接待を受けた際の感想として「總じて衣裳の着料なしと帯の結び様が如何にもダラしく謂はば締りが無い、粋な風采を欠いて居る、矢張り藝者は花のお江戸に限る」と評し、さら生まれ故郷の名古屋はどうかという問いに「金澤より一段劣等だ」とけなし、「北陸は美人國ぞと昔から呼ばれて居れば北陸代表的の美人は新潟に限られて居る」と補足した（大正四年七月一七日「北陸」）。

大正五年には「驚いた日本一の美人金澤に」という見出しで、「新潟芸妓は纏綴も能いが第一衣裳に金の掛つて居るのは金澤芸妓の比ではない」と、新潟市で開かれた北信市長会議の宴に金沢市の課長が参加したときの感想がみえる（七月一二日「北陸」）。

このときの逸話も興味深い。新潟芸妓らは金沢市から課長が来るとわかると、集まってきた「金澤には日本一の藝妓が居るそうだが何んな美人ですか」と尋ねたという。課長は誰かと聞き返すと、「大松の辰子さんと云つて遊藝の腕前は達者で却却の美人で何處に缺點がないと前の坂知事さんが日本一の藝者だと常に吹聴されて居た」と答えたという（大正五年七月一二日「北陸」）。

大正八年の「北陸美人観」では、野田通相に同行した秘書官が北陸の美人について「新潟は赤坂に比すべく金澤は鳥森に比すべく富山に至つては道玄坂だ」（大正八年四月二七日「北國」）と、東京の芸妓をたとえに批評している。

このように明治末から大正期にかけての美人批評の特質は、旧来の学術的な言説と異なり、各地の芸妓との遊興を観光経験として物語化して紹介する、軽妙な旅行記的な言説が、言い換えれば美人ツーリズムを基盤とした言説が主流化した点にみいだせる²⁶。

なお、美人ツーリズム言説は全国的に人気を集め書籍としても販売されるようになった。初期のものとして兵庫県寄留中に神戸・西宮・明石の芸妓を調べたという明治四二年刊吉田隆一編『花柳界美人の評判記』（西村活版印刷所）を例示できよう²⁷。内容はかつての廓案内の性格を強く残す点、旅行記型言説の初期形態といえる。

本格的な廓旅行記としては大正五年刊柳原煙花『諸国廓巡礼』（日本書院）がある。全国の代表的な廓を、「気まぐれ者」の二人が飛び歩いて遊興する様子を面白おかしく紹介したもので、はしがきには

「遊廓に中心とした書は、澤山あるけれど、恐らく此の書ほど兩君の觀察に依つて正鴻を得たものはあるまい」とその画期性を誇る言葉がみえる。さらに旅行ライターだった松川二郎も、大正一三年「美人国巡礼」『珍珠を求めて舌が旅をする』（日本評論社）・昭和四年『全国花街めぐり』（誠文堂）・昭和七年『三都花街めぐり』（誠文堂）を著した。

美人ツーリズムが普及するなか、混合民族論にもとづく美人批評も新たな変化をみせる。大正一〇年には北朝鮮各地の学事視察を遂げて帰ってきた矢部市視学は、「北陸美人」が生まれた背景について力説した記事がみえる（九月二日「北國」）。北朝鮮の會寧付近は美人系の根源地とする。その理由はかつて女真族が占拠していたためである。北陸美人が多いのは、その女真族と日本が古くから能登の福浦を窓口盛んに貿易をしていた関係で、女真族の血が北陸一帯にひろがるためという。国内各地の美人比較のなかで浮上した北陸美人という枠組みに混合民族論が馴染むように能登の福浦という具体的な湊町をあげて関心をひこうとしたのである。

一方、美人ツーリズムに適合するように流通したのが、視野を列島内にとどめた混合民族論である。昭和一二年に喜多貞吉が新潟県の民俗研究誌『高志路』二五・六号に発表した「越後美人」は、越後や東北の美人とアイヌ民族との関係性を実証しようとしたものである。このような視線は旅行記型の言説にも表出するようになる。

たとえば、松川二郎は「美人国巡禮」で、京・名古屋・越後・伊

勢・長崎などを美人所としてとりあげ、美人が生まれる要因を長崎県を例に出し「混血」と指摘し、また「日本の美人系は裏日本の出雲に起つて、越前・越中・越後を経て庄内に入り、秋田となり、津軽平野に終つてゐる。確かに、斯く日本海沿岸を走る一脈がある」と、出雲を基点とする日本海美人論を説いた。

さらに松川は昭和一〇年「全国女氣質」で、全国の女性の比較をすすめ、美人どころとして「今の北陸道一帯、即ち越路は随分美人國の老舗であると云はねばならない。否寧ろ、高志（越）の国こそは日本で一番最初の美人國の折り紙が付けられたものと云つてよい」とし、その歴史的背景にアイヌ先住民や出雲との交流などを説いた。

大陸との関係性はもはや思慮されなくなり、長崎貿易を介した西洋との交流やアイヌ民族・出雲民族といった内なる異民族との関係性に美の要因をもとめるようになったわけである。

大正期、北陸地方を舞台とする美人旅行記が人気をみせるなか、記事に散見されるようになるのが「金澤美人」という言葉である。大正五年七月には「金澤美人遠征」という見出しで、岐阜・愛知選出の代議士が金澤遊覧を思い立ち横山代議士のもとを訪れ、芸者遊びを楽しんだ様子が報じられている（大正五年七月四日「北陸」）。

さらに昭和三年の「蠟細工美人その他」と題するコラムでは「北陸の美人系として知られてゐる金澤にお育ちになつて貴方がたは天下から「金澤美人」と呼ばれてゐらっしゃいます。（中略）「金澤美人」惜むらくは表情をご存じないと、いわれても貴方がたは一言もあるまい

と存じます（中略）とにかく無表情な事は同じ北陸系の「新潟美人」よりも遥かに劣つてゐると思はれます。氣候や家屋の構造やその外色々の關係から兎かく陰鬱になり勝なこの北陸地方で女の生きた表情はどんなに美しく見えるでせう」と「金沢美人」は豊かな表情をもつべきと批評する（昭和三年四月七日「北國」）。

さきほど大正に入り「金澤美人」を商品名とする絵葉書や写真集がでまわるようになったと指摘したが、その背景には以上の言説状況から「北國・北陸」を舞台とする美人ツーリズムの市場拡大があったと確認できる。

昭和にはいると、金沢美人のイメージは県外にも知れ渡るようになっていく。管見のかぎり、そのイメージの全国流通をしめす最初の資料は全国の花街を紹介したガイドブックの昭和四年刊松川二郎著『全国花街めぐり』である。

同書は前後篇の二冊からなる予定で、金沢市は後編で紹介する予定であった。結局前編のみの刊行にとどまったが、最後にみえる後編予告において「前篇には三都を始めとして美人系の名古屋、新潟、秋田、長崎、博多などの大物は殆んど網羅されて居るかの觀があるけれども、尚ほ東北方面では南部美人系の本場たる盛岡、北陸方面では加賀美人系の中樞たる金澤の兩大關が残されてあり」と、金沢と盛岡を大関と位置付けている⁽²⁸⁾。

このようなご当地美人消費の高まりは昭和初めの人気をみたカフエーにも影響を及ぼす。昭和九年、香林坊地下のカフエー「金澤パ

レス」は「美人系で有名な生粋新潟美人 十數名のサービス！」を看板にかかげている（昭和九年九月六日「北國」）。現地に行かずともご当地美人と出会えることを売りにしたのである。

大衆が出会いをもとめるご当地美人。その欲望がたかまるなか、金沢美人はあらたな消費段階にはいつていく。次章では観光都市金沢の顔として官民あげて売りだしがすすめられていく経過をみていく。

四 美人のモダニズム

（一）容貌から姿態へ

明治後期から大正期にかけて美人をめぐる図像・言説を紹介してきた。美人イメージは、混合民族論の影響で素人に拡張した時期があったが、基本は芸妓を前提としつづけてきたといえる。

しかし、このような前提は昭和に入ると崩れていく。それを物語るのが昭和四年の北國新聞社主催の美人投票である。選出者に初めて芸妓以外の職業女性、具体的には金沢近郊にあった栗ヶ崎遊園地の付属劇場大衆座の女優が選ばれたのである。当時の人々には相当の衝撃だったのだろう。記事はこう伝える。

「今日まで、美人投票の一等當選者はことごとく藝妓に限られて居たものである。それが今度はそのレコードを破つて女優が一等に當選して居る。これは確かに非常な變化である。（中略）當選者中にあつて金澤市から當選した者には一人も藝妓がまじつて居ない」（昭和四

年九月二十六日「北國」。

このような脱「芸妓」化という動きは金澤にとどまらず全国的なものであったことは、全国三百の新聞社からの一名ずつの推薦で構成された昭和五年の美人写真集『日本代表美人』（日本電報通信社）で見えてとれる。特選一〇人の属性をみると、芸妓六人に対し学生・某妹など一般女性が四名をしめ、また石川県の選出者四名の肩書は、芸妓二名、大衆座女優、令嬢各一名だった（写真6）。

また美人にかかわる事業の形態も変化していく。美人イメージの消費方法といえば写真が基本だったが、大正五年から地元新聞社主催で金石海水浴場を開場にさまざまな余興が行なわれるなか、大正一三年から芸妓が魚商や女学生に扮装した芸妓をみつけだす「人捜し」なる余興が行なわれるようになる。芸妓は一般人とは一線を画す美人だという前提にたつて企画された事業だが、もはやその容姿美の鑑賞を主目的としなくなるのである。

昭和に入ると芸妓のイベント出演さえなくなり、かわりに昭和七年から「海のクイン選定」「女王撮影競技」と題し、目の前で美人を選ぶコンテストが開催されるようになる。趣旨は「あでやかな海水着に日傘かして海濱を漫步する女給群から番號により投票して一名の「海のクイン」を選定。クインには優勝旗の外賞品を贈り選定者には抽籤で賞品を贈る」とある（昭和七年七月二十四日「北國」）。

応募したのは「金澤カフェーの女給からえりすぐった姿態美と肉体美、容貌美等をおかね備へた麗人三十人」。海水着・ケープ・水泳帽で



写真6 『日本代表美人』 昭和5年 日本電報通信社

右頁中央には入選20人の1人である東廓の吉力清子を掲載。

身をつつみ、日傘をさして砂浜を歩いた。このときは自由に写真撮影もでき、新聞社に写真を応募しコンクールも行われた（昭和七年八月三日「北國」）。結果、初代のクイーンには赤玉信子が選ばれた（昭和七年八月五日）。ちなみに翌年も同じ女性選ばれたが、所属は「銀座会館」となっており、カフェー間で盛んに引き抜きがあつたとわかる（昭和八年七月三十一日「北國」）。

美人観の変化は行列にも訪れる。後編で詳しく紹介するとおり、かつて都市祝祭の練り物行列では美装を凝らした芸妓が注目されたが、昭和七年の九師団管下凱旋祝賀行列ではカフェーの女給三〇〇人が参加している（六月八日「北國」）。

ただし、女給が芸妓にかわり美人の前提となつたわけではないことに注意が必要である。昭和一年の金沢市商工祭撮影競技会では新町のダンスホールのモデルダンサーが被写体となつている（昭和一年四月一二日「北國」）。昭和初期、美人とはより「姿態美」「肉体美」を感受できる女性を前提とするようになったといふべきだろう⁽²⁹⁾。

姿態美に重点が置かれるようになった背景について、佐久間りかは、写真により「全身像という新しいフレーム」が与えられ、「一つのオブジェとして人体のフォルムやプロポーション」に意識を向けるようになったことを指摘する⁽³⁰⁾。つまり写真は容貌からさらにプロポーションをまなざす感性を定着させていったというわけである。

また身体をめぐる新たな社会理念が生まれた影響もある。大正以降、「健康」や「運動」が注目を集め、さらに健康的な生活を営む空

間として「郊外」が発見される。生き生きとした身体性が重視されるようになるのである。

さらに戦争の影響もある。林葉子は日露戦争当時、美人絵葉書が人氣をもった背景として戦場における無聊をなぐさめるものとして、また死をもつて恩に報いるに値する相手として、やさしい女性イメージがもとめられた事情があつたと指摘したが⁽³¹⁾、日中戦争以降、もはや慰撫する存在どころではなく、兵士にかわつて家や国土を守る強い存在にならざるをえなくなつた事情もあつたのだらう⁽³²⁾。

（二）麗人・鄙の美人・加賀美人

美人イメージの変質のなか、その対象は女給や女優、ダンサーにとどまらず、一般女性にまでひろがりをみせる。芸妓以外の女性を美人と称する場合、おもに「麗人」と称した。美人という言葉を避けたのは、美人といえは芸妓というイメージが色濃く残つていたからだらう。

たとえば、昭和八年には、北國新聞社が各町のお嬢様をめぐる「町の麗人交驛リレー」を企画する。内容は「四名の社会部記者が自動車飛ばして未知の麗人から麗人へのメッセーヂをバトン代りとして本社に贈物を携へて町から町に訪問して選ばれた令嬢の平素と時局に對する感想等を寫眞と共に紙上に連載し更にその土地の婦女會、女子青年團、愛國婦人會等およそ婦人團體の活動振りを具さに紹介する」もので、「選定されるミスは其土地の婦女會または女子青年團或は町

役場の推薦にかかり、選定対象となった町は県内二三か町であった（昭和八年六月九日「北國」）。

手渡しされたメッセージは山口孝子県知事婦人によるもので、内容は非常時局における女性として一致団結して難局にあたる必要を説き、最後は「若き女性は花である。それが美と健康と純潔と叡智に輝かしく咲き誇る時、太陽は光と熱とを與へるだらう」としめくくったものだった（昭和八年六月一日「北國」）。

同年、リレーに参加した麗人を一人ひとり紹介する記事「あえかな町の麗人」が連載される。トップを飾ったのは鶴来町の老舗金物商の金田静子二二歳。経歴には二年前に金沢第一高女を卒業し、その後裁縫教務所に通い、昨年から家事の手伝い傍ら生け花の修練をしているとある（昭和八年六月一日「北國」）。また昭和十一年五月二六日から「麗人青春報告書」が一五回連載される。第一回目の紹介者は第二高等女学校を卒業した令嬢だった（昭和十一年五月二六日～六月二五日「北國」）。

昭和十一年には三年前の麗人リレーの発展版といえる「加賀能登賽ころ點取り競争」を北國新聞社が企画する。内容は「加賀、能登の爽涼線に麗人をもとめて東西おの／＼十五ヶ町村で大賽ころを振りながら得点しつつ明日の吉兆をもたらす平和の象徴、傳書鳩に通信を託すものであった（昭和十一年七月二六日「北國」）。各町の麗人は「町村長・婦女會・女性青年團・學校長」など有力者が推薦し、「人格・學歴・資性・品行・容貌孰れ」の点でもすぐれた女性選ばれた（昭

和十一年八月二日「北國」）。

実際に記者が麗人を訪ねる様子を見ると、山代町の場合、午後零時五〇分に到着。目的の麗人宅の前には愛国婦人会の幹事や女性青年団役員、北國新聞販売店主、小学校児童が社旗を振って出迎えた。家の当主は紋付で出むかえ一室へ通し、そこで麗人とされる娘へメッセージをわたし、時局に対する感想・覚悟を聞いたあと、サイコロを二つ振るといふ具合だった（昭和十一年八月四日「北國」）。

このような一般女性を対象とする美人イメージは令嬢にとどまらず海村や山村の女性にも波及していく。たとえば、海女の身体をめぐる言説の変化をみると、明治四一年のレポート「奇習奇俗 能登の蟹」は、舢倉島の海女について「皮膚は皆な赤胴色で斬つても斬れそうにもない」と（十一月二日「北國」）、好奇の目で報告していたが、昭和になると激変する。

昭和六年には羽咋の滝町の海女の働く姿を「水底に人魚は踊る」と表現し、また昭和七年「舢倉島遊記」なる旅行記は海女の姿態について「かくしやくと陽に輝く肌の黒い艶、子供の頃から水泳による均整美は全く裸女彫刻の群像である」と紹介する（昭和七年八月六日「北國」）。

昭和十四年の視察記「成田知事一行の舢倉島巡り」では「たくましいのは娘達の胸の幅であり、厚さである。島に育つて島に働くものに病人はゐないといふのも事実と思はれる」とその強靱な肉体を称えたり、「陸では眞ッ黒に陽焼けした海士の身体が、一度水に潜れば、眞

ツ青に白く光つて、それが魚のやうにすいすいと泳ぐ様は、まこと人魚である」と海中の海女を光り輝く姿としてとらえるようになる（八月七日「北國」）。

このような海中の労働美や身体美を称える表現／視線は昭和二十七年七月二日付「北國新聞」掲載の「へぐら島ルポルタージュ」での深田久弥の「海女の美は水中にある」という発言へ、さらに近年の輪島海女にかかわる有識者の発言などへと継承され続けている。

明治後期に芸妓の代役のように紹介された白山麓の女性も昭和五年の新聞では「霊峰白山の萬年雪に洗ひ清めた桑島美人」「京美人に劣らぬ奥床しさと聡明さ」などの見出しで独自の美をもつと伝えられ、美の要因は糸紬ぎと都会地への出稼ぎで野良仕事につくものが少ないためという区長のコメントを紹介している³³⁾。

かかる昭和初期における美人観の拡散を受けて生まれる呼称こそが「加賀美人」でなからうか。管見のかぎり、加賀美人を確認できる最初の資料は、既述した松川二郎の『全国花街めぐり』で、実質金沢芸妓をさす言葉として使われている。

ただし、加賀美人は金沢美人の異称として使われるようになったわけではなからう。加賀美人の系譜を探る上で看過できないのが加賀女という言葉である。たとえば、明治三十一年の田植を報道する記事に「早乙女や加賀はをみなの色白く」という俳句が添えられている（明治三十一年五月一七日「北國」）。

昭和初期の記事にもこれに似たことがみえる。既述の昭和五年の

桑島美人の紹介記事には「雪国の女の頬は軟かくておつとりした魅惑に富むといふ。加賀乙女的美貌は既に有名である」とある。つまり、明治期以降には鄙の美人をさす言葉として「加賀女」が定着していたと想像できる。つまり、加賀美人は、芸妓を前提とする金沢美人というイメージと、自然のなかで働く女性を前提とする加賀女というイメージが溶け合うなかで、定着した言葉だと推定できる。

定着の契機のひとつとなったのは小唄でなかったか。昭和六年に金沢市水道局が水道の宣伝のために水道小唄を募集した。当選した唄の歌詞を見ると「光り玉なす加賀美人」とみえる（昭和六年八月七日「北國」）。そこで歌われた加賀美人とはだれか。芸妓でも素人女性でもない、まさしく「ご当地美人」としかいいようのない茫洋とした存在イメージではなからうか。

（三）キャンペンガールとしての金沢芸妓

では、昭和以降、美人コンテストから芸妓が漏れるなか、芸妓を前提とした金沢美人なるイメージはどのような展開をみたのだろうか。

大正末以降の芸妓の状況として注目できるのは写真集の出版ラッシュである。大正一五年、紅筆社から『金澤美人選集』（石川県立図書館蔵）が発刊される。はしがきには「由来北國には美人が多い傳へられて居る、雪の國、雪の膚、誠に其所に一脈の連絡が有るらしい金澤は北陸一の大都會であり所謂百萬石の名邑である、豈此所に美人無くては叶はざらまし、實に然り美人雲の如く集まつて居るには毛頭相

違は御座らんが、未だ此れを世間に紹介す可き何物も無いのは誠に遺憾であつた」とある。金沢美人が多くいながら紹介した本がないから出版したというわけである。

紹介されたのは東西北三廓及び主計町の芸妓で、紹介数は東三八人、主計二三人、北一七人、西一七人である。主計町の掲載数は西北両廓を超えており、その発展ぶりがうかがえるが、興味深いのは巻頭の写真である。「兼六公園」の風景に溶け込むように複数の芸妓をやや引き気味に撮影した写真が掲載されている。

昭和四年には紅筆社から『金城名花摘』（石川県立図書館蔵）が刊行される。はしがきには美人を「先年此れを世間に紹介なせしも餘り美形を紙上より逸し去りし」ために刊行にいたつたとあり、大正一五年『金沢美人選集』の改訂版とわかる。

その掲載数は前書を大幅に越えて西五一、主計町三五、東二五、北二〇である。西廓にいたつては三倍に増えており、西廓からの強い要請があつて改版にいたつたと想像できる。この写真集でも冒頭には兼六公園の雪見橋・福神山を背景にして芸妓を引き気味に撮影した写真が飾られている。

昭和八年には、名勝を背景に芸妓を撮影する構図をもとにした「新名所絵葉書」が販売される。従来土産物用に金沢駅で「金沢名物絵ハガキ」を売っていたが、景勝ではあまりに月並なので、金沢を印象的にするために東西北三廓及び主計町の代表的な「金澤美妓」や名産品などを紹介したという。発行元は金沢旅行協会。三枚一組一五銭。現

物は未確認だが、新聞にみえる写真から兼六園のことじ灯籠の前や九谷焼の陳列棚の横に芸妓がたつ構図だったとわかる（昭和八年八月六日、八月二〇日「北國」）。

北陸三県の観光連携が意識されるようになった影響から、いままでない趣向の美人写真集も同年に発行される。塚田仁三郎編『北日本民謡全集 附北陸美人集』（北日本社）は、温泉場を含め北陸各地の芸妓などを始めて紹介したもので、金沢からは東一五人、西一〇人、主計町一人、北四人が掲載された。芸妓が中心だが、その服装はかつてのような和服ではなく洋装もみられる。またこれまでの美人写真集と決定的に異なり、金沢銀座会館や尾張町の一九食堂の女給五人も紹介された。

昭和一三年には金沢市役所戸籍兵事課内九里次作編集発行で『尾山の華』（金沢市立玉川図書館蔵）が刊行。東西各三〇人、主計町二四人、北一五人が一頁あたり三人ずつ胸元より上の容姿と名前で紹介される。また年代不明だが、北陸観光出版社発行『かなざわ名妓の葉』（金沢市立玉川図書館蔵）も同時期の発刊であろう。東西北各一〇人の名妓が胸元から上の容姿写真と源氏名・楼名・電話・芸能の情報付きで一ページあたり一名ずつ紹介される。芸能欄には「踊」「清元」「踊つづみ」などが載り、一流芸妓とわかる。

昭和初期に刊行された写真集は基本的に大正期までと同じく各廓を代表する一部人気芸妓を紹介したものが多かったが、昭和十一年、市内四廓の全芸妓四〇〇名を網羅したグラフ誌の刊行が計画される。



写真7 『花かが美』 昭和11年

発行元の金沢市観光協会は「その土地のサービス女達によつて観光誘致の効果が大きいに左右される、好い女のある観光地は良い風致をもつた観光地と併立して榮える」と説明している（昭和十一年五月一七日）。

結果、同年に金沢観光協会が刊行したのが『花かが美』（石川県立歴史博物館蔵）で東七五人、西九九人、主計七二人、北二九人を一ページあたり六人ずつ掲載した（写真7）。当時の実際の芸妓数について同書は東九〇人、西一三〇余人、主計町八〇人、北五〇人と説明しており、八割近くの芸妓を紹介した、過去の

に例のない規模の写真集とわかる。

当初は芸妓全員を紹介する計画だったのだろう。なかにわざわざ「各廓を通じてこの写真帳に洩れた姐さんが數十名ありますが、それはお願しても写真が頂けなかつた爲」云々と未掲載の理由を記した張り紙がつく。名勝を背景にした芸妓写真はないが、冒頭に兼六園などの名勝地を紹介し、また「はしがき」には、お国自慢として兼六園や卯辰山の眺めのほかに「金沢美人のあるを忘れては」ならないと記し、兼六園と金沢美人を同等に位置付けていることに留意したい。

以上、昭和初期の美人写真集をあげてみたが、大正期と比較し、芸妓／金沢美人をめぐる二つの視線の変質を読み取れる。ひとつはキャンペンガール化である。大正一五年の『金澤美人選集』や昭和三年の『金城名花揃』は、基本的に大正期に成長をみせる美人ツーリズムの延長上に位置するものであるが、冒頭にかかげられた兼六園を背景にした写真から芸妓を観光都市のキャンペンガールとして位置付けようとする意識が芽生えていたことがわかる。

このような芸妓のキャンペンガール化は、芸妓の出自、いいかえれば、キャンペンガールとなり得る正統性をあらためて問う発想をうみだす。たとえば、『花かが美』は「金沢美人の標準」が「俄然として高まつた」画期として「廃藩に伴つて武家の娘が花街に身を沈めるもの多きに及」んだためとする。明治二〇年代の美人零落論と内容は同じだが、昭和初期には歴史的な正統性をものがたる逸話となっているのである。

地域に古くから根差す歴史的存在というイメージの成長とあわせ、芸妓の出身地についても注目が集まるようになる。昭和五年七月に連載されたコラム記事「東西芸妓比較論」では、東京は名古屋種が多く、新潟がこれにつき、大坂は徳島者が非常に多く、富山に至っては地元出身はきわめて少なく金沢・東京・大阪出身が多く雑然としているなど、他地は芸妓の出身が多様であるのに対し、金沢は地元出身で固めていると評価している。また身体的には肌がよく色が白い、心情的には玄人かと思うほど男に惚れてしまうという。この特徴は城下ではごくまれた金沢人の特色であるとする（昭和五年七月一日「北國」）。

金沢美人をめぐるもうひとつの視線を物語るのが芸妓情報の集覧化（データベース化）である。金沢の芸妓をすべて網羅掲載しようとした『花かが美』はその視線をかたどった典型的な写真集といえるが、プロフィール紹介内容にもその傾向はみられる。

従来、芸妓のプロフィールは美辞麗句をならべた文章スタイルが主流だったが、昭和八年以降になると、情報の羅列となる。たとえば、昭和八年刊行の金沢観光協会の雑誌『観光の金澤』をみてみよう。同雑誌には金沢の人気芸妓を写真入りで紹介する「観光緋帳」というコーナーがある。そのプロフィール紹介は、写真下に名前・身長・体重を掲げ、写真脇に好きなものとして「馬鈴薯、三十四五から四十歳までの男」など、また嫌いなものとして「犬の遠吠え、塾柿臭い息」などを列挙したものだった³⁴。

また、昭和九年には、金沢運輸事務所が観光客の案内とするために観光地の各駅長に「北陸代表美人の戸籍調べ」を行わせた。調査項目は、遊廓名・家号・芸名・生年月日・本姓名・出生地・特殊技能・容貌・風采・身長・肉付・特長や旦那の有無などに及んだ（昭和九年六月五日「北國」）。

いずれも姿態にかかわる情報を重視するようになったとわかる。その背景には既述のとおり、昭和以降における美人観の変化の影響をひとまず指摘できるが、廓消費の実情をみると、ことはそう単純でない。芸妓を金沢のキャンペーンガールとして脱「廓」化しつつ、一方でその姿態情報を収集し発信するとはいかなる欲望がひそんでいるのか。下編で、あらためてデータベース化をめぐる背景を検討しよう。

（四）ミス時代

太平洋戦争が苛烈になると廓はさびれ、昭和一九年には政府令により享楽の全面禁止となった。とうぜん、美人鑑賞を目的とするイベントも実施されなくなったが、一方、戦地には芸妓写真が慰問用に送られつづけられたのかもしれない。昭和一六年七月には石坂遊廓の芸妓写真二〇〇枚が郷土の兵士に送られたという³⁵。

ふたたび美人イベントが実施されるのは昭和二二年である。金沢商工祭の関連事業としてミス金澤の選定が行なわれた。応募者一六三人で、写真審査で二一人を選出し、さらに審査員によって二〇歳前後の五人が最終候補となった。候補者はユリ、バラ、スマレ、サクラ、ボ

タンと命名され、写真家島田逸山による写真を一五商店のショーウィンドウに飾り、市民一般の選挙を行った（昭和二年四月二十九日「北國」）。

昭和二年には県・金沢市の両観光協会主催で兼六園を背景にして「美女をうつす会」が催された。モデルには西廓芸妓一〇人と劇団「紙風船」の女優七人が選ばれた（昭和二年一月一日「北國毎日」）。

昭和五年以降になると「ミスラッシュ」と称されるほどさまざまなミスが登場する。昭和八年の新聞記事は、先日誕生したばかりのミス金沢、ミス百万石をあわせ二〇数人の「ミス美人」がいるとする。

ラッシュのさがげとなったのは全日本宗教平和博覧会協賛の北國新聞社主催「観光美人」投票である。その得票者約一五〇人を見ると、繁華街の飲食店店員、美容院店員、芸妓でしめられる。現在のように学生や主婦見習いのような女性はいまだ見当たらないが、美人の前提は芸妓やカフェ・女給からさらに接客業の女性全般へとひろがったとわかる（昭和二年四月六日「北國」）。このとき一位となつたのは石坂遊廓の二五歳の娼妓だった。

昭和二年の新聞記事によれば、選ばれた娼妓は、その後を一番の売れっ子となったが、半年後の一〇月に仕事をやめ尾山商店街の飲食店の接客婦となり、さらに同年十一月に石坂時代の馴染み客だった男性と心中未遂をはかり、その後行方知れずとなったという（昭和二九

年五月二日「北國」）。

昭和二年頃からは北陸写真連盟がさまざまな女性撮影会を開催するようになる。同年六月には兼六園で着物姿の女性を被写体に「第一回屋外モデル撮影会」を実施（昭和二年六月十八日「北國」）。同年、七月には金石の海浜で「海の女王撮影会」を実施。二〇人の水着姿の女性を北陸写真連盟の三〇人がさまざまなポーズをつけ撮影した（昭和二年七月一日「北國」）。明治二九年八月には金沢駅屋上で国鉄金沢クラブ写真会八〇人によってミス金沢とミス百万石を招き撮影会が開催された（昭和二九年八月二十七日「北國」）。

明治二八年以降になると趣向を凝らした各種コンクールが実施されるようになる。二八年には片町商店街の洋服店が秋のニューモード紹介とファッションコンクールの宣伝をかねて、エリザベス女王のように美しく、金色の車にのつて市内の目抜き通りを練り廻るコロネーションカーニバルを実施。車上にのつたのは来沢中の松竹歌劇団の五人と女性店員だった（昭和二八年九月一日「北國」）。

昭和二九年四月には北陸専門店会が「宝塚スターに似た人」を募集（四月二八日「北國」）。昭和二九年七月には北國新聞社新築落成記念のため北陸服装文化協会・北國新聞社主催の裁縫ファッションショー出演の「ミスファッション」コンクールを実施し、応募者一六〇人から二七人を選出した（昭和二九年七月五日「北國」）。翌月には片町商店街が通りすがりの行人のなかから浴衣美人やスタイルのいい人を選ぶ「ゆかたとスタイルコンクール」を納涼祭りにあわせ実施。声をか

け入賞を告げプレゼントをわたす様子を写真でとり、店に掲示し、要求があれば無料で進呈した（昭和二年八月八日「北國」）。

このような通行人から選ぶ方法は昭和三八年にも金沢市繊維小売団体連合会がミスコトンのスカウトを撰ぶために市内デパート前で実施している。通行人の娘さんからこれと思う人に映画招待をかねて推薦状をわたし、映画鑑賞に来た人のなかから最終選定するという方法がとられた（昭和三八年四月七日「北國」）。

ミスの選出はその後県内各地にも波及する。昭和三〇年には七尾市の港まつりにあわせミス七尾が選ばれた（昭和三〇年七月二五日「北國」）。翌年には鳳至郡町野町商工会がミス観光町野を（昭和三二年四月二六日「北國」）、また門前商店街は櫛比神社の夏祭りにあわせ、門前美人を選んだ（昭和三一年六月二一日「北國」）。昭和初期に芸妓を紹介し花開いたキャンペーンガールとしての美人イメージが戦後の主流となっていたといえるだろう。

五 変質する美人イメージ消費

金沢を舞台とし美人イメージ消費の過程を追った。旧来、美人イメージの近代化についてその消費対象が芸妓から一般女性へひろがったという流れを指摘するにとどまるものがほとんどだったが、美人を主題とした画像や言説を細かく通覧すると、消費方法が時代によって刻々と変化していったことを理解できる。以下、各時代の代表的消費

媒体と消費の特性に注目し五段階に整理し少括としたい。

明治二〇年代…写真展覧会の時代…限定的消費化

明治二〇年代、写真展覧会という限定機会で人気芸妓の写真を消費するようになる。労働に明け暮れた大衆にとって、美装を凝らした芸妓の姿、それも各廓を代表する人気芸妓の容姿を間近に見る機会はほとんどなかったと想像でき、神仏のご開帳見物に通じるような稀少な視覚体験となった。

明治三〇年代…絵葉書の時代…私的消費化

明治三〇年代に入ると芸妓の容姿をプロマイドや絵葉書を通し手軽に消費できるようになる。つまり、美人イメージを私的に、かつ好きな機会に消費できる段階に入ったわけである。また鉄道が敷設されることで旅行客の消費を企図し、観光案内誌で芸妓を金沢の「美」や「花」にたとえ網羅的に写真紹介するようになったこともこの時代の特徴といえる。ご当地美人イメージの原型はこの時代に登場するといえる。

明治四〇年代…新聞連載の時代…日常消費化

明治四〇年代以降になると、新聞が実質廓案内の機能をもつ状況がうまれる。芸妓の顔写真とそのプロフィールの紹介記事が連日、読者の目に触れる状況は、美人消費の日常化段階に入ったといえる。背景には元来、富裕層に限定されていた廓消費が中間層や若年層にまで拡大した事情があったと想定できる。

また混合民族論を土台とし、東アジアを視野に入れて美人の系譜を

みつめようとする「美人系」批評が登場する。その後、鉄道網の拡大により国内の往来が活発化することで、しだいに美人への関心は大陸を視野に入れた系譜分析から国内各地の比較批評へ移行していく。

大正期…旅行記の時代…観光消費化

大正初期以降、国内各地の芸妓との遊興を固有の観光経験として「物語」化させた旅行記が大量に出回るようになる。いわば美人ツーリズムともいえるべき観光市場が發展をみせるのである。このような欲望の変化を受け、金沢の芸妓は金沢でしか出会えない独自のご当地美人、つまり「金沢美人」としてブランド化され、そしてその写真は土産物として消費されるようになる。

昭和初期…キャンペンガールの時代…消費の多様化

旅行の大衆化がすすむなか、有名観光地や伝統品を金沢芸妓と一体的に紹介することで、地域の魅力を発信する動きが活発化する。つまり、人気の一流芸妓は、脱「廓」化し、観光都市金沢のキャンペンガールのような役割をになうようになった。この点、企業やイベントのキャンペンガールが美人イメージの中心となる戦後の消費形態は昭和初期に形成されたといえるかもしれない。一方、美人イメージは芸妓を前提としなくなり、カフェーの女給や一般女性も含むようになる。背景には国家あげての戦争参画システムの強化により、美人を、兵士を癒す存在から、兵士をささえる存在へと位置付けるようになった影響などがある。

注

(1) この点、美人観はすぐれて民俗学の課題となりえたが、研究は、錦仁『浮遊する小野小町』（二〇〇一・笠間書院）など小野小町をめぐる口承文芸分析が中心であり、美人観それ自体を真正面からとらえようとした成果は柳田國男の女性論のなかの言及にとどまろう。周知のとおり、柳田國男は「女の咲顔」で女の笑窪・愛嬌が重視される背景について、また「妹の力」で平安美人イメージが生まれた背景について分析した。混血民族論が美人言説の主流であった当時において男女の非対称関係を読み解く視点は画期的である。

(2) 『高松町史』（一九七四）九五四頁。

(3) 浅倉有子「国風之美」小玉美意子他編『美女のイメージ』（一九九六・世界思想社）、小林隆幸「新潟美人をめぐるあれこれ」『新潟市歴史博物館研究紀要』一三三号（二〇一七）。

(4) 『加能史料』室町Ⅳ（二〇〇七・加能史料編纂委員会）四三二頁。

(5) 中野三敏『江戸名物評判記案内』（一九八五・岩波書店）一一、二四頁。

(6) 美人をめぐる美辞の系譜は張競『美女とは何か』（二〇〇一・昌文社）第七章が参考になる。

(7) 佐久間りか「写真と女性」奥田暁子『女と男の時空Ⅴ』（一九九五・藤原書店）二二七頁。また百美人写真の詳しくは岡塚章子「小川一眞撮影『凌雲閣百美人人工着色写真アルバム』についての考察」『東京都江戸東京博物館研究報告』第一五号（二〇〇九）、東京都江戸東京博物館編『浮世絵から写真へ』（二〇一五・青幻舎）を参照。

(8) 吉田好二の住所は石川県営写真協会編『石川県写真史』（一九八〇・石川県営写真協会）四四頁に、明治四年に観音町開業、明治二十四年御徒町移転とあるが、根拠は不明であり、本稿紹介資料から誤りであると判断できる。

- (9) 右掲(8) 四八頁参照。
- (10) コンクールについては井上章一『美人コンテスト百年史』(一九九二・新潮社)、佐伯順子『明治〈美人〉論』第一章(二〇一二・NHK出版)を参照。
- (11) 前掲(7) 同。
- (12) 『柳田國男全集』二九(二〇〇二・筑摩書房) 収録一八八頁参照。初出『経済往来』九卷六号(日本評論社)。
- (13) 林葉子『性を管理する帝国』(二〇一七・大阪大学出版会) 四一三頁。
- (14) 知的コミュニティ基盤研究センター図書館情報学図書館共催展示パンフレットの綿坂豊昭「金沢の肖像写真について」(二〇一七・筑波大学図書館情報メディア系知的コミュニティ基盤研究センター) には明治四〇年代初めに絶大な人気を集めた山田屋小金・浅野屋音重・大重辰子など東廓の芸妓写真が多く紹介されており、絵葉書市場の拡大を認められる。
- (15) 竹松幸香『近世金沢の出版』(二〇一六・桂書房) 六七頁。
- (16) 宮本由紀子は写真入りの細見の刊行目的について「馴染みの客はもとより、地方の人々にまで購買層を広げ」るためと分析する。宮本由紀子「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して」『駒澤史学』三四(一九八六) 二〇六頁。
- (17) 芸妓の新聞報道の概要については前掲(10) 佐伯順子二四頁を参照。
- (18) 詳細は拙稿「ショーウィンドウの中の美人―造り物・生人形・マネキン嬢」笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史』(二〇一四・勉誠出版)を参照されたい。
- (19) 混合民族論史については小熊英二『単一民族神話の起源』(一九九五・新曜者社)、岡本雅享『民族の創出』(二〇一四・岩波書店)を参照。
- (20) 徳田秋聲『郷里金沢』(二〇〇五・能登隆市) 収録。
- (21) 古厩忠夫『裏日本』(一九九七・岩波書店) 参照。
- (22) 加野十次郎『日本名妓花く良べ』第一集(一九〇八・便利堂) 国立国会図書館デジタルライブラリー八、九コマ参照。
- (23) 前掲(13) 四章参照。
- (24) たとえば大正四年の鵜崎鷺城『鳥の目だま』(一九二五・興成館書店)に「日本の美人系は第一が京都で、次では名古屋、新潟、秋田、徳島、松江といふ順序だらう」とみえる。また大正四年四月一日「大阪毎日新聞」掲載の「関西の三大都市」では「京都が我国の旧い首都として権門を集め文物制度を集中したる反面には諸国の美人も亦其権榮を慕うて此処に集まり以て今日の京都美人の根源となつた事は既に争い難き事実だが、名古屋候の採りたる遊樂的繁榮政策もまた名古屋に多くの美人を植附け今日の美人的豊饒を来さしめた種苗である京都と名古屋が東西の二大美人都市として噴々たるものは決して偶然ではない実に慥慥した培養を経た結果である神戸は此点に於て遺憾ながらまだ苗代時代美人系を云為する資格がないのである」とあり、京都名古屋は美人の産地とできても神戸は適当しないとみえる。
- (25) 前掲(10) 第一章参照。
- (26) この解釈は橋本和也『観光経験の人類学』(二〇一一・世界思想社) から示唆を受けた。
- (27) 国立国会図書館デジタルライブラリーで閲覧可。
- (28) 松川二郎『全国花街めぐり』(一九二九・誠文社) 七四三頁。
- (29) このような評価ポイントの変質は全国的なものであったことは、昭和四年に東京の蒲田撮影所が所長の欧米行脚にヒントを得て脚線美女女優の募集を日本キネマ史上初めて行なったところ、六〇名の募集があったことからもうかがえよう(昭和四年六月一六日「北國」)。
- (30) 佐藤(佐久間)りか「近代視線と身体が発見」坪井秀人編『偏見とい

- うまなざし』（二〇〇一・青弓社）一六七頁。
- (31) 前掲（13）三〇七～三〇九頁。
- (32) 戦争システムと女性イメージの関係については若桑みどり『戦争がつくる女性像』（一九九五・筑摩書房）を参照。
- (33) ちなみに瀬川清子『海女記』『販女』など昭和一七年発刊の女性叢書が物語るように、昭和一〇年代とは地方に生きる女性たちの生活ぶりを女性民俗学者がみつめた時代であるが、その背景にはこのような働く女性を美しいとする視線、さらにいえば戦争システムのなかの女性の立ち位置の変化があつたといえる。ちなみに、同叢書の一冊である昭和一八年刊江馬三枝子『飛驒の女』には「飛驒は美人系だと云はれてゐる」から始まる「小町むすめ」という章がある。民俗誌のなかでは数少ない美人に関する聴取事例報告であるが、「美人系」という視点が学術的な報告にまでいまだ影響力をもっていたことを読み取れる。
- (34) 『観光の金澤』一号（一九三四・金澤観光協会）二四頁。
- (35) 昭和一五年から一九年の廓関連記述は「石川の女性史」編集委員会編『石川の女性史』（一九九三・石川県各種女性団体連絡協議会）二八七～二八九頁に負う。

平成三十一年四月二十日発行

石川県立歴史博物館紀要 第二十八号

編集
発行

石川県立歴史博物館

金沢市出羽町三番一号
電話 〇七六―二六二―三三三六

印刷

株式会社 谷 印刷
金沢市中村町二八―一四

Bulletin of the Ishikawa Prefectural Museum of History

No. 28 2019

Articles

The dedication process of tachi swords dedicated from *kaga Maeda* clan
to *Kitano Shrine* in the *Edo* period

SHIOZAKI Hisayo 1

Study in a shipping business establishment in the Kaga clan area
and a “merchant cargo ship (*kitamae-bune*)” north route.

HAMAOKA Nobuya 35

A Study of *Uchida Masakaze*, the first governor of *Ishikawa* prefecture.

ISHIDA Ken 51

The establishment of beauty tourism : The lineage of *Kaga* beauty

DAIMON Satoru 77

Ishikawa Prefectural Museum of History

ISSN 0916-1120